
旧天劍授受者レイフォン

錆びた刀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

旧天剣授受者レイフォン

【Nコード】

N1610Q

【作者名】

錆びた刀

【あらすじ】

鋼殻のレギオスの世界で、槍殻都市グレンダンで女王陛下、天剣授受者が小説と違う行動をしていたら。

また、それ以外の人たちの行動等の違い、それに伴った原作と違う劉やダイトが誕生します。

オリキャラが出ますが、主人公ではありません。

小説を読む前に

初めて読む人へ

はじめまして。

私、錆びた刀といいます。

すばらしい作者様方の作品を読ませていただき私も書いてみたい
と思いつかせていただきます。

内容としましては、鋼殻のレギオスの二次作品となります。

主人公は、レイフォンとなっております。

小説の流れでここが違えばこうなつたのではないかと私自身が考
えた内容となっております。

とはいえ、原作にそつた内容となっております。

注意事項

キャラクタの話し方を完全に理解しているわけではないので、皆
様が持つているキャラクタのイメージを壊してしまうかもしれませ
ん。

そのようなことが、嫌という方は読まないください。

小説を書くのは土曜・日曜・祝日しか小説を書かないため、更新
速度はとても遅いです。

お願い

私は、ネーミングセンスがないので、オリジナルキャラクタが話
で重要であっても名前が決まっていないうこともありますので、
そのときは、小説を読んでくださつた方から名前を募集させていた

だきます。

未熟者の私の作品ですが、温かく見守ってください。

以上

第1話 苦難への命(めい)

第1話 苦難への命(めい)

グレンダン王宮：

室内には女王陛下アルシェイラ・アルモニス、グレンダン三王家の1つ、ユートノール家の現当主ミンス・ユートノール、グレンダンの政治に携わる大臣たち。

そして、女王陛下の剣である天剣授受者が11名と現天剣授受者唯一の念威繰者であるデルボネ・キュアンティス・ミューラの念威端子のみが存在している。

アルシェイラが集まってもらった理由を説明するために、天剣授受者の一人の名を呼んだ。

「レイフォン・ヴォルフシュテイン・アルセイフ、前に」

名前を呼ばれた天剣授受者は内心困惑しながらもそれを表情に出すことなくアルシェイラの前まで歩み出て、臣下の礼の体制をとった。

そして、アルシェイラはレイフォンが自分の前に来て臣下の礼をしたのを確認してから口を開いた。

「お前に、天剣授受者としての命を下す。

来年、学園都市ツエル二に、生徒として入学せよ。」

その言葉を聴き、各大臣は騒ぎ出した。

「天剣授受者を都市外に出すとはどういうことですか、陛下!！」

「そうです。」

汚染獣退治ならばまだしも、学園都市に生徒として入学せよとは何事ですか!！」

などと騒ぐ。

「黙れ!！」

これは、グレンダン女王である私が決めたことだ!！
その決定に不満があるのか!！」

とアルシェイラは一括した。

そのため、各大臣たちは黙った。

「陛下、ひとつ確認したいことがあります。」

と、今まで黙っていたレイフォンがアルシェイラに声をかけた。

「何？」

つまらないことなら、分かっているわね。」

と、アルシェイラは右手を握りながら返事をした。

「天剣授受者として学園都市に入学せよと言ったのですか？」

そう問いかけてアルシェイラはあきれた顔をしながら返事をした。

「私はそう言ったけれど、お前にはそう聴こえなつかたのかしら？」

「いいえ、そう聞こえたので確認をしました。」

「そう、それならいいわ。」

「しかし、なぜ学園都市に生徒として入学しなければいけないのですか？」

レイフォンはアルシェイラの返事を聞きそう問い返した。
アルシェイラは、少し疲れた顔をしながら説明を始めた。

「詳しく説明しようとしたら騒ぎ出したのがいたでしょ？」

まあ、それはいいとして、分かりやすく言うと、このグレンダンはあるものたちと戦うために存在している。

「ということは、天剣授受者は全員知っているわね。」

アルシェイラがそう問いかけると、全員がそれぞれ返事をした。
それをアルシェイラは確認して話を続けた。

「その戦いの中に学園都市ツエルニも関わるみたいなの。」

そこで、どう関わるのかを調べてきてほしいの。

で、調べるのなら生徒としていく方が何かと便利でしょ？」

そう考えると、天剣授受者の中で生徒として入学できるのがレイフォンしかいないからあなたを指名したの。

「分かった？」

「分かりました。」

しかし、私がそういうことが苦手なことを陛下はご存知ですよ？
私ではなく、そういったことが得意な武芸者を送った方がいいの

ではないですか？」

と、レイフォンは問い返した。

「そんなことは、お前に言われなくても十分理解しているわ！！
はあ…。」

まあそれはいいわ。

あなたを送るのはさっきも言った通り、グレンダンの戦いに学園都市が関わるから、それなりに実力が有る者を送らなければいけないの。

でも、それだけの実力者を何人も送れば向こうも不審に思うでしょう？

だから、お前に行ってもらおうの。

お前なら、老性体が相手でも勝てるでしょ？

まあ、名目としては、若くして、天剣授受者になったお前に都市外でいろいろなことを学習したり、体験してもらったために様々な都市から人が集まる学園都市に行かせる、ということでもいいでしょう。なぜ、ツエルニかと問われれば、サヴァリスの弟が生徒として入学していたからということでもいいでしょう。

そのことは、私からルツケンスに伝えておくわ。

以上だけどほかに聞きたいことはある。」

「はい。」

老性体相手でも勝てるとのことでしたが…。」

「ああ、そのこと。」

と、アルシエイラはレイフォンが言おうとしていることを理解し、レイフォンの話をさえぎり、言い放った。

「天剣のヴォルフシュティンを持っていきなさい。」

その場にいる者に大なり小なり、衝撃を与えた。

「しかし…」

「天剣授受者の戦いに関わっている以上、全力で戦えるようにするのは当然のこと。」

それじゃ、今日はココまで。

ああ、天剣授受者は会議室に集まること。」

その言葉で大臣たちと、ミンスは帰っていき、天剣授受者は会議室に移動を始めた。

天剣授受者会議室：

「そういうことだから、レイフォン、入学試験で落ちるんじゃないわよ。」

「はい。」

アルシェイラから言われたことにレイフォンが返事をした。

「レイフォンは抜けているところがあるから名前を書き忘れるとかのミスをしそうですね。」

天剣授受者の一人、カナリス・エアリフォス・リヴィンが左手を頬に当てながら、そうもらした。

「はあ、確かに、バカレイフォンなら解答欄もずらして書きそうだな。」

天剣授受者の一人、バーメリン・スワツティス・ノルネがため息を漏らしながら、そうもらした。

「いや、レイフォンなら、病気になって試験が受けられないのではないかのう。」

天剣授受者の一人、ティギリス・ノイエラン・ロンスマイアが顎鬚を撫でながらそう言い放った。

「いえいえ、汚染獣との戦いで試験自体が中止になるのではないですか？」

天剣授受者の一人、サヴァリス・クオルラフィン・ルツケンスが壁に寄りかかり、笑顔でそう言い放った。

その言葉を聴き、天剣授受者の、
リントンス・サーヴォレイド・ハーデン、
カウンティア・ヴァルモン・ファーンネス、
カルヴァーン・ゲオルディウス・ミッドノット、
トロイアット・ギャバナスト・フィランディン、
ルイメイ・ガーラント・メックリングがうなずいた。

「みんなそれはひどいよ。」

レイフォンも一生懸命勉強しているんだから。」

と天剣授受者の一人、リヴァース・イージナス・エルメンが全員に対して言った。

「そうですね。」

レイフォンさんも一生懸命勉強していますからね。レイフォンさん試験をがんばってくださいね。」

と、デルボネがレイフォンに声をかけた。

「ありがとうございます。」

レイフォンがデルボネに返事をする時、

「ツエルニに行くまでは、今まで通り、汚染獣との戦いは当然のこと、勉強もしっかりやりなさい。」

いいわね。」

「がんばります。」

アルシェイラがレイフォンに声をかけると、顔を引きつらせながらレイフォンは返事を返した。

「それじゃ、今日は解散」

アルシェイラが、今日の会議の終了を宣言した。

第1話 苦難への命(めい) (後書き)

次回から数話は過去について書きます。

第2話 最後の一本（前書き）

レイフォンが天剣授受者決定戦に出場し、天剣授受者になるまでを書きました。

第2話 最後の一本

第2話 最後の一本

サイハーデン道場：

レイフオンは朝早く一人で道場に来ていた。

「レストレイション」

アイアンダイト《鋼鉄錬金鋼》を起動鍵語とともに手に持ったダイトに剄を加えた。

そして、サイハーデン流の型を一通りこなしていった。

「ふう…」

今日の試合で最後の天剣授受者が決まる。

天剣授受者となれば、闇試合で高額の賞金を獲得できる。

そうすれば、園も、みんなも助けられる。」

型を一通りやり終えて、そうつぶやき、ダイトを基礎状態に戻し、剣帯に納めた。

そして、精神統一を始めた。

レイフオンが精神統一を始めてからしばらくして、

「気負いすぎず、いつも通りにやりなさい。」

道場主にして、サイハーデン流刀争術継承者のデルク・サイハー

デンが道場の中心で精神統一している、息子であり、次期サイハイデン流刀争術継承者であるレイフォンに入り口から声をかけた。

「ありがとう。」

養父（とう）さん

精神統一をやめて、立ち上がり父に振り向いて、返事をした。

「一度園に戻るぞ。」

みんながお前のことを待っているんだからな。」

そのことをレイフォンに伝えたデルクは、先に園へと戻っていった。

「みんなのためにも絶対勝たなくちゃいけないんだ。」

園のみんなを守るために天剣を手に入れなくちゃ!!!」

一人、道場に残っていたレイフォンは自分に言い聞かせるようにそうつぶやき、決意を新たなものとした。

孤児院：

「あゝ、やっと、レイフォン兄（にい）が帰ってきた。」

「お帰り。」

園の子供たちが道場から戻って来るレイフォンの姿を見つけ、声をかけながら駆け寄った。

「みんなごめんね。
待たせちゃったみたいだね。」

レイフォンが自分のことを待っていてくれたみんなに謝ると、

「ぜんぜん待ってないよ。」

「そっだよ。」

「今日は大事な試合があるんだから。」

子供たちは口々に待っていないことをアピールした。

「みんなありがとう。」

レイフォンは、みんなの自分を気遣ってくれる気持ちがとてもうれしかった。

周りを子供たちに囲まれながら、孤児院の食堂へと帰ってきた。

「お帰りなさい、レイフォン。」

ダイトの調子はどう？

どこか違和感を感じることはない？」

と、帰って来たレイフォンに声をかけたのは、ダイトメカニックであり、レイフォンのダイトを調整している姉のルシャ・シルフィであった。

「大丈夫だよ。」

ルシャ姉（ねえ）。」

「それならいいけど…」

「ダイトのことならどんな些細なことでも私に言っのよー！！
いいわね。」

「うん。」

「分かってるよ、ルシヤ姉。」

「と、二人が言い合っていると、」

「ルシヤ姉さんも、レイフォンもそれくらいにしたらどうなの？
今日は、レイフォンにとって大事な試合の日なんだから！！」

「リーリン・マーフェスが二人の言い合いを遮った。」

「もお、今日が、レイフォンの天剣授受者決定戦の日だってことを
忘れたのかしら。」

「リーリンが呆れていると、」

「リーリンもそのくらいにしておきなさい。
レイフォン準備をしなくていいのか？」

「道場に行くときに準備を済ませているから大丈夫だよ。」
「そうか。」

「デルクがリーリンを諷めて、レイフォンに確認をし、レイフォン
がそれに答えた。」

「ねえ、レイフォン。」

「もっ行くの？」

「うん。」

試合に行く前にみんなの顔を見ておきたかったからね。」

「がんばってね。」

心配そうな顔で聞いてきたリーリンにレイフォンは返事をした。そんな二人が、他の人が入り込めないような雰囲気をかもし出した。

しかし、周りで見ていた子供たちがその雰囲気を壊した。

「ああ、二人がラブラブな雰囲気になってる。」

「仕方ないよ。」

リーリン姉はレイフォン兄のことが好きなんだから。」

「そうだよ、そうだよ。」

子供たちは二人ことをからかい始めた。

「こ、こら〜!〜!」

「リーリン姉が怒った〜」

「わあ〜」

「逃げる〜」

子供たちは笑いながら、起こっているリーリンから逃げ出した。

「待ちなさいーいー!!」

顔を赤くしてリーリンは子供たちを追いかけだした。

「はあ…。」

リーリンも何やってるんだか…。」

ため息をつき、ルシヤがそうもらした。

今まで子供たちのやり取りを黙って見守っていたデルクが、レイフォンに声をかけた。

「試合で悔いを残さないようにがんばりなさい。」

「全力を出し切るのよ!!」

ルシヤも養父が声をかけたので声援を送った。

「ありがとう。」

養父さん、ルシヤ姉。

それじゃあ、行ってきます。」

レイフォンはデルクと、ルシヤに返事をして試合会場に向かいだした。

孤児院を出たところで子供たちがレイフォンの姿を見つけて駆け寄ってきた。

その後に、リーリンもやってきた。

「レイフォン兄行ってらっしゃい。」

後で試合見に行くから。」

「怪我しないでね。」

「絶対勝ってねー!!」

子供たちが次々にレイフォンに声をかけた。

「レイフォン試合がんばってね。」

後でみんなで試合を見に行くから。」

リーリンが心配そうな顔をしてレイフォンに声をかけた。

「みんなありがとう。」

リーリン、試合なんだからそんな顔しないで。」

みんなに返事をし、心配そうな顔をしているリーリンに命のかかった汚染獣との戦いではなく、試合であるため心配そうな顔をしないでほしいことを伝えた。

「みんな、行ってきます。」

そういうと、レイフォンは試合会場に向かうため背を向けた。

「さあみんな食堂に戻るわよー!!」

「はーいー!!」

リーリンはデルクとルシャがいるである食堂に戻るように声をかけた。

ルシャは、食堂に戻ってきたみんなに声をかけた。

「ちゃんとレイフォンに挨拶した？」

「うん。」

「頑張ってたって伝えたもん！！」

「みんなで試合を見に行ってくって伝えたよ。」

子供たちはレイフォンにどんなことを伝えたのかを話し始めた。

「そうか。」

ルシャ、お前がみんなを試合会場に連れて行ってくれないか？」

それまでルシャが入れてくれたお茶を飲んでいたデルクがルシャにその声をかけた。

「え！！」

お父さんは行かないの？」

その言葉を聞いたみんながデルクに振り向いた。

「うむ。」

誰かが留守番をしていなければいけないからな。

それに、今日の試合は特別だからなおさらだ。」

そうデルクはみんなに言った。

「特別な試合だからこそ養父さんが見に行かなくちゃいけないんじゃない！！」

ルシャが怒りながらデルクに言い返した。

「だからこそ、息子であり、弟子であるレイフォンを信じて私はここで待っている。」

デルクは表情一つ変えることなくそう言った。

「でも、」

「それに、レイフォンは一人前の武者だ。

だからこそ、師である私はレイフォンが勝つことを信じて待つんだ。」

「もお……」

ルシャとリーリンは自分たちの養父の不器用な息子への愛を感じて二人は顔を見合わせた。

そして、試合開始時間が近くなり、デルク以外のみんながレイフオンを応援するために、試合会場に向かおうとしている。

「それじゃあ、行ってきます。」

留守番よろしくお願いね、養父さん。」

「ああ。」

気をつけて行ってきなさい。」

「はい。」

「養父さんの分まで応援してくるね……!」

「帰りはレイフォン兄と一緒に帰ってくるね!!」

その言葉を聴いてデルクは間違いを正すことにした。

「今日の試合に勝って天剣授受者になれば今日は帰ってこれないぞ。」

「ええ〜!!」

「そうなの〜!!」

「そんな〜。」

「もお。」

勝っても今日帰ってこないだけなんだから我慢しなさい!!」

不満を漏らしている子供たちをリーリンは一喝した。

「リーリンたら。」

「それじゃあ行きましょう。」

そして、全員が今日の試合会場へと向かった。

全員を見送ったデルクは道場へ向かった。

サイハーデン道場：

「レイフォンに武芸を教え初めてもう4年か…。」

天剣授受者を決める試合に出られるようになるかな。

帰ってきたら、これを渡さなければな。」

デルクはそういつて自分の前に置いてある箱を手に取り、蓋を開けた。

そして、箱の中にはサイハーデン流免許皆伝を示すダイトが入っていた。

「このダイトと名を渡す時がきたのか。」
さびしそうな顔をしてデルクはそう呟いた。

闘技場：

「くら、トビー!!」
人がたくさんいるんだから、走り回らない!!」

闘技場近くで走り回っているトビ・クロットにルシャが怒鳴る。

「大丈夫だって。
俺はドジじゃないから誰かに当たったりするもんか。」

トビは後ろ向きに走りながらルシャに返事を返しから、前を向いて人ごみの中に走っていった。

「トビったら…」

「まあまあ、ルシャ姉。
トビはレイフォンに一番なついているんだから仕方ないわよ。」

リーリンが少々あきれ気味のルシャにそう話しかけた。

「もお、リーリンたら。」

あまりみんなを甘やかしちゃだめよ。」

ルシャがそうリーリンをたしなめた。

「うん。」

リーリンはその言葉を聴きルシャが独り立ちしようと考えていることを悟ってさびしそうな声で返事をした。

「リーリン、今日はレイフォンの天剣授受者決定戦なんだからそんな顔しない！！」

それより、トビを探さなくっちゃ。」

「そうね。」

「みんな、トビを探すから急ぐわよ。」

「はい。」

いつもならトビと一緒ににはしゃぐ子供たちも今日はおとなしくルシャの周りにいた。

そしてみんなでトビを探し始めて少しすると、何かの周りに集まっている人の姿を見つけた。

ルシャは少し気になり、集まっている人たちに近づき、何があったのかを聞いた。

「何があっただんですか？」

「何、今日の試合に孤児院出身の子供の武芸者が出ることを非難していた武芸者に子供がそれに文句をつけたんだよ。

相手が武芸者なんだから聞かなかつた振りをしてればよかつたのによ。」

それに、あいつは確かルツケンス流のガハ…」

「トビ…！」

「何なんだ？」

ルシャがそのことを聞き、話も途中で人の輪の中に入っていった。話しかけられた相手はいきなり相手が人の輪の中に入っていったので何があつたのか分からずそのまま見送つた。

「ちょっと、ルシャ姉…！」

もお…」

リーリンはあわててルシャに声をかけるが、その声が聞こえていないように人の輪の中に消えていった。

「みんな、ルシャ姉が戻ってくるまで私のそばを離れちゃだめよ…！」

リーリンが残ったメンバーの中で最年長である自分のそばを離れないようにと注意をした。

「リーリン姉、もしトビなら大丈夫かな？」

控えめな性格をしており、いつもみんなの後を付いて行くアリス・キャリーがリーリンに不安そうな顔をしてそう話しかけた。

「大丈夫よ。」

それに、トビと決まったわけじゃないわ。」

「うん。」

その言葉を聞いても、不安そうな顔がはれることはなかった。

一方、人ごみを掻き分けて中心に出てると、

「トビー!!」

今まで自分が探していた人物が、数人の武者の前で倒れていた。それを見て、ルシヤはすぐにトビをかばうため、トビと武者の間に立った。

「なんだ、お前。」

その集団の中心人物が声をかけた。

「私はこの子の姉です!!」

ルシヤは、相手が複数の武者であろうと脅えることなくそう言い切った。

「なるほど。」

お前も孤児か。

うっとうしいな。

俺たちはただ事実を言ったまでなのにな。

なあ、お前たち。」

中心自分物は自分の周りに居る武芸者たちに話しかけた。

「その通りですね。」

「餓鬼は餓鬼らしく遊んでりゃいいんだよ。」

「餓鬼にはおままごとでもしてればいいんだよ……！」

武芸者たちはそう口にした。

「何ですって……！！！」

「レイフォン兄を馬鹿にするな……！」

武芸者たちの言葉を聴きルシャとトビは怒りをあらわにして言い返した。

「まあ、この俺が出てれば俺の勝ちで決まりだけだな。」

そう言い放った。

「弱くて試合に出れなかつたくせに……！」

トビは中心にいる武芸者にそう言い返した。

「何だと……！」

クソガキ……！」

怒りで顔を赤くしながら、殴りかかろうとした。

活剏で身体強化していなくとも武芸者ではないルシャとトビにと

つては脅威であった。

しかし、その拳を止める人物がいた。

「誰だ!!」

自分の拳を止めた相手を確認するために振り向いた。

振り向いた先にいたのは、筋肉が岩のように鍛えられた2mを超える男がいた。

その男は、天剣授受者のルイメイであった。

「武芸者が一般人に暴力を振るおうとしているのはどういうことだ。」

「ル、ルイメイ様!!」

相手が自分が尊敬している相手と同じ地位にいる人物とわかりおとなしくなった。

「俺が聞いていることに答える。」

上からの視線で相手を睨みつけるようにして問い返した。

「あの、その…」

その問いに言葉に鳴らない声を出した。

「おや、何かおもしろいことでもあるんですが、ルイメイさん？」

そして、今までそこにいなかった人物の声が聞こえてきた。

「サヴァリスか。」

お前が期待しているようなことはない。」

「そうですか。」

笑顔でそう返したのは天剣授受者のサヴァリスであった。

「あれ？」

そこにいるのは確か…」

「こいつらのことを知っているのか？」

「ええ。」

確か家の門弟達です。」

「なら、後のことはお前に任せるぞ。」

「そう言われても、何があったんですか？」

「一般人に暴力を振るおうとした武芸者がいただけだ。」

「なるほど。」

わかりました。」

そう言ってサヴァリスは、ルシヤとトビに近づいた。

「怪我はありませんか？」

家のものが失礼しました。

怪我などがありましたら治療費を払いますので治療費は家に回し
てください。」

そう言って二人に背を向けた。

「君達、帰るよ。」

サヴァリスが騒ぎを起こしていた武芸者達に声をかけて道場に戻ろうとしていた。

「召集はどうするんだ？」

サヴァリスが足を止め、

「用事が無ければということだったので、僕は帰ります。ちょうど用事ができましたので。」

陛下にそう伝えておいてください。」

ルイメイに背を向けたままそう告げて再び歩き出した。

サヴァリスが立ち去るのを見送ってからルイメイは歩き出した。

「あ、あの。」

ありがとうございます。

ルイメイ様」

「俺は何もしていない。」

「で、でも、ルイメイ様が止めてくださらなければ…」

「ただ、武芸者としてなすべきことをなしたただけだ。」

ルシャが話している途中でルイメイが割り込みそう言い切った。

その言葉を聴き、ルイメイも自分達の養父と同じように不器用なのだと悟った。

「それでも、お礼を言わせてください。

ありがとうございます。」

「ありがとう。」

それまで何が起こっているのかよくわからなかったトビもお礼を言わなければならないと思いルイメイにお礼を言った。

二人の礼を聞きいた後、何も言わずにルイメイはアルシエイラたちがいるであろう観覧室へと歩き出した。

そして、ルシヤとトビはみんなと合流した。

「みんなごめんね。

勝手に飛び出して。」

ルシヤは子供達にそう謝った。

その後ろでは、トビがリーリンにしかられていた。

そして、全員で闘技場の観覧席へと向かった。

闘技場特別観覧室：

試合に出る武芸者が闘技場で全員が並んだところで、

「サヴァリスのやつ来ないわね。」

アルシェイラはサヴァリスが来ていないことに気がつきそう口にした。

「あいつなら帰った。」

それに返事をしたのは、闘技場の外での揉め事をとめたルイメイが答えた。

「何で？」

「一応来るように言ってたわよね？」

「外でルツケンス流の門弟が揉め事を起こしたから、そいつらを連れ帰った。」

「周りに人がいたからあいつが連れ帰った。」

端的に理由を話した。

「あっそう。」

「まあいいわ、誰が勝つと思う？」

サヴァリスがいなくても問題がないので、サヴァリスの話を持ち切り、部屋にいる天剣授受者に今日の試合で誰が優勝しそうかたずねた。

「子供の到量が飛びぬけているからあいつが勝つだろう。」

それ以外が勝つには、あのガキがまともに剄を使えない場合だけだろう。」

そう言ったのは、窓の近くでタバコをすっている天剣授受者最強といわれるリントンスだ。

「あのクソガキ以外はクスだ。
勝つ見込みなんてない。」

そういうのは、明らかに不機嫌だとわかるバーメリンだ。

「それ以外のやつはいないの？」

アルシエイラは予想を口にしなかった者たちへそう問いかけた。

「まあ、当然といえば当然よね。」

アルシエイラはそういつてつまらなそうに試合の注意事項を聞いている武芸者たちに視線を向けた。

そして、試合は、レイフォンが自分の身長よりも大きな刀を使用し、周りの大人たちを圧倒して優勝した。
そして、この瞬間当時13歳のサヴァリスが打ち立てた天剣授受者史上最年少記録を3歳も若い10歳のレイフォンが記録を塗り替えた。

闘技場特別観覧室：

「やっぱりあの子が勝ったわね。」

「ふん。」

あのガキ以外はクズしかいないんだから当然だ。」

つまらなそうにアルシエイラが口にする、バーメリンがそう返した。

「それもそうね。」

アルシエイラは一区切りを入れるようにそういった。

「カナリス、あの子を城まで連れてきてね。」

私たちは先に帰るから。」

そう言うとアルシエイラは部屋から出て行くために椅子から立ち上り、歩き出した。

「なぜ私のですか？」

そのようなこと他の者でもかまわないのでは？」

カナリスはそうアルシエイラに反論した。

アルシエイラは歩みを止め、カナリスへと向き直り、

「あの子は若いからね。」

城に来るまでに揉め事が起きそうだからね。」

あなただったら、人当たりはいいから行くように言ったの。わかった？」

それに、アルシエイラは行くように言ったことこの理由を説明した。

「わかりました。」

カナリスがそう答えるのを聞き、アルシェイラは部屋を出るべく歩き出した。

それを天剣授受者は見送った。

そして、カナリスは天剣授受者となった武芸者の元へと向かい、その他は各自の家に帰っていった。

第2話 最後の一本（後書き）

試合内容は今後の話しに関係ないと考えたので省略させていただき
ました。

次の話はもう少し短い内容になります。

次回からは、レイフォンが天剣授受者に成ってからを書きます。
過去編がしばらくは続きます。

第3話 初披露・初任務（前書き）

レイフォンの天剣授受について。

レイフォンの天剣授受者としての初任務についてを書いてみました。

第3話 初披露・初任務

第3話 初披露・初任務

天剣授受者会議室：

「やっと来たわね。」

そう言ったのは、自分たちよりも先にその部屋へ来ていた人物であつた。

そして、カナリスはレイフォンを連れて来るといふ仕事が終わつたと悟り、自分やすべき仕事をするために自分の執務室へと向かつた。

38

「適当なところに座りなさい。

それから、何か飲む？」

と気軽にレイフォンに話しかけた。

「えっと…

結構です。」

レイフォンはソファアに掛けながらそう返事をした。

「そう。

今日はおめでとじ」

と何気なく今日の試合で優勝したことへ賛辞を送つた。

「一応自己紹介しておくわね。」

私は、このグレンダンの女王であるアルシェイラ・アルモニスよ。

「

ぼ、僕は…」

アルシェイラが自己紹介したのを聞き、自分もしようとしたが、

「ああ、あなたはいいわ。」

知ってるから。」

それより、本題に入っていいかしら？」

「はい。」

「今日から、正確に言えば明日からあなたは天剣授受者になるわ。」

天剣授受者は都市のシンボルでもあるから、最低限の常識を持った行動をすること。

そして、一番大切なことは強くあること。

自分で考え、行動し、必要とあれば人を頼ることのできるものであること。

今言ったことが天剣授受者に必要なことよ。」

私の剣（つるぎ）に使い捨てのコマはいらないわ。いいわね。」

そのことを覚えておきなさい。」

「はい。」

レイフォンはアルシェイラに返事をしたが、自分が天剣授受者となり、やるうとしている事を見透かしているのではないかと考えた。

「ああ、それと、天剣授受者に命令できるのは私だけ。王宮には天剣授受者の部屋を用意しているわ。そこに住むもよし、汚染獣戦が連日であるときや式典の時にはそこで寝起きしてもらおうわ。」

「それじゃ、今日中にすることを説明するわね。」

「まず、都市外戦戦闘衣を作るための採寸。」

「あなたの場合はこれから成長期だからその都度行うように。」

「そして、天剣をあなたに合わせて調整を行う。」

「以上が今日中に行うことよ。」

「いいわね。」

「わかりました。」

「それじゃあ、採寸をしにいくわよ。」

「え？」

「どっしたの？」

「陛下も来るのですか？」

「当然でしょ？」

「あなたは私の剣になるのだから。」

「と言っても最初だけだね。」

「次からは自分ですよ。」

「はい。」

都市外戦戦闘衣の採寸はすんなり終了した。

しかし、天剣の調整を行おうとした時に問題が発生した。

天剣調整室：

「復元状態は剣にしてください。」

「え!!」

復元状態を剣にですか？」

「はい。」

剣でお願いします。」

「お前の流派は刀を主体とするものじゃなかったかしら？」

今まで話を聞いているだけだったアルシェイラがレイフォンにその問いかけた。

「確かにサイハーデンは刀を主体とした流派です。」

「ならなぜ剣なの？」

「それは……」

「まあいいわ。

好きにきなさい。

ただし、弱ければ刀を握りなさい。

それが嫌なら天剣を剥奪するから。

いいわね。」

「わかりました。」

「それじゃあ、天剣を剣で調整してあげて。」

「しかし…」

「当人がそれでいいって言うてるんだから大丈夫でしょ。それに、弱ければ天剣を剥奪することもできるからね。」

「わかりました。」

そう言われたダイトメカニック《錬金鋼技師》は不満げな顔をしながらもそう答え、天剣の復元状態を剣にしてから、レイフォンの手の大きさに合わせて調整を行った。

レイフォンは復元状態を剣にした天剣を持った。

そして、ダイトメカニックは天剣のに計測器気をつけデータ収集を行い、微調整を行った。

天剣の調整が済み、アルシェイラがレイフォンを王宮内のレイフォンの部屋へと案内した。

「ココが今日からあなたの部屋よ。」

最初にも言ったけど、ここに住むもよし、今住んでいるところにそのまま住んで必要なときだけここにとまるもよし。

それはあなたに任せるわ。」

「あ、はい。」

今日はありがとうございました。」

「それじゃ、おやすみ。」

「おやすみなさい。」

そして、アルシェイラは部屋を後にした。

「はあ。」

今日は疲れた…

それにしても、びっくりしたな。

闇試合に出ようとしていることを知っているかと思った。

でも、知らないみたいだったから大丈夫だよな。

やっと闇試合に出られる。

勝って高額の賞金で孤児院の経営を助けられる…」

レイフォンは明日の披露会についてより、天剣授受者と言う称号を手にいれ、闇試合に出場できるようになったため、試合の賞金を孤児院に寄付することを考えていた。

そして、レイフォンは初めて王宮に入った事と、女王と直接会ったことなどにより精神的に疲れていたため今日は寝ることにした。

翌日：

「レイフォン様、起きていらっしやいますでしょうか？」

レイフォンの部屋のドアをノックしてそう言ったのは王宮で働くメイドであった。

そして、レイフォンは部屋のドアを開けた。

「起きていますけど、何かあったんですか？」

「本日は天剣授受を行い、その後市民への披露がありますので。起きていらっしやるのか陛下が確認してくるようにと仰せつかりましたので。」

朝食は食堂にてお召し上がりください。

他の天剣授受者様も朝食を召し上がっていますので。」

「そうですね。」

ありがとうございます。」

そう答えてレイフォンは部屋の中にある鏡の前で身だしなみを整えてから食堂へ向かった。

レイフォンが食堂に着くと、数人の天剣授受者がいた。

各自食事を取るものや、飲み物を飲むものなどしており、レイフォンが来たことに気づいても話しかけるものはいなかった。

その為、レイフォンは朝食を食べるために席に着くと、メイドがどんな朝食にするか聞いてきた。

「おまかせします。」

と答えた。

メイドは少し困った顔をしたが厨房にシェフのお任せと伝えに言った。

しばらくして、朝食が運ばれてきたので食べた。

朝食を食べ終わったレイフォンは得にする事がなかったので、王宮の裏庭で天剣の授受式が始まるまでの時間を過ごすことにした。

謁見室：

「これより、天剣授受式を始めます。」

ついに天剣授受式が始まった。

この部屋には、女王、10人の天剣授受者、デルボネの念威端子、ミンスとグレンダンの政務にかかわる大臣たち。

そして、今日天剣を授受されるレイフォンだけであった。

「レイフォン・アルセイフ、女王陛下の前へ」

そう言われ、レイフォンはアルシェイラの前に行き臣下の礼をとった。

「汝にヴォルフシュティンを授与する。」

今日からはヴォルフシュティンと名乗るように。

そして、私の剣となりて、この都市に仇名すもを倒す剣となり、都市を守る盾であれ。」

「はい。」

「それではヴォルフシュティンを受け取りなさい。」

そう言っつて、アルシェイラは天剣をレイフォンに渡した。

その光景をミンスは不満げな顔をしながら見ていた。

「それでは、市民へ姿を見せに行くわよ。」

そう言っつてアルシェイラは歩き出した。

そして、その後天剣授受者が続いた。

王宮内広場：

そこには多くのグレンダン市民が集まっていた。
その中にはもちろん、レイフォンの家族たちもいた。

「レイフォン兄の天剣ってどんなのだろ〜。」

「かっこいいのかな。」

「ココからでも見えるかな〜?」

子供たちはレイフォンが姿を現すのを待ちどうしそつに待っている。

「レイフォンは逃げたりしないから大丈夫よ。

それより、人が多いから私たちから離れちゃだめよ!〜!」

ルシャは子供たちにそう注意をした。

「おい、あれって女王陛下じゃないか?」

「本当だ!〜!」

ということは、もうすぐ出てくるぞ。」

などと、前の方が騒がしくなった。

「もうすぐレイフォン兄が出てくるんだ!〜!」

と子供たちははしゃぎだした。

それを、ルシャとリーリン、そして養父が仕方なさそうに見守っていた。

そして、レイフォンが天剣を集まった市民に披露すると、

「「えっ！！」

「っ！！」

「きれ〜。」

「かつこい〜。」

ルシャとリーリンは声を出して驚きを表し、デルクは声は出さなかつたが驚いていた。

子供たちはダイトが今までと違い光り輝いていることと、レイフォンが堂々としている姿を見た感想を言った。

デルクは、子供たちの姿を目にした瞬間動揺を隠そうと、右手をきつく握り締めた。

そして、デルクの様子が変わったことを悟ったルシャとリーリンはデルクの様子を伺った。

『なぜだレイフォン！！』

なぜお前は剣を持っているのだ！！』

それは私と、サイハーデン流への決別なのか？』

デルクは心の中でそう問いかけたが、答えは返ってこなかった。

レイフォンの市民への披露は問題なく終わった。

孤児院：

レイフォンが王宮より帰ってきた。

そして、レイフォンが天剣授受者になったことのお祝いをした。

しかし、その祝いの席では子供たち以外は祝いの席とは思えないような雰囲気を出していたが、子供たちがいたこともあり、一応は問題なく終了した。

ルシヤはレイフォンを孤児院の外へと呼び出した。

「何があつたのレイフォン。」

ルシヤはいきなりレイフォンにそう問いかけた。

「！

何も無いよ。」

レイフォンも言われる内容を予想していても、正面から言われると内心では動揺した。

「じゃあなぜ、刀を捨てたの！！」

「それは、僕が武芸者として判断したことだよ。」

「私はあなたのダイトを4年間メンテナンスしてきたのよ！！

その私が、あなたに一番適している武器は刀しかないって思っているわ！！

あなたはそれを否定するの？」

怒りをあらわにしてルシヤはレイフォンに詰め寄った。

「そうだよ。」

レイフォンはルシヤに対してそう言い切った。

「!..!」

そう言い切られると思っていなかったルシヤはよろけながら後ろに下がった。

「そう..」

なら好きにしなさい!..!」

そう言ってルシヤはレイフォンに背を向けて孤児院の中へと走っていった。

「ごめん、みんな。。

ごめん..」

レイフォンはルシヤが孤児院の中に入ったのを見届けて、さびしそうにそうつぶやいた。

しばらくレイフォンはその場に立ち尽くしていたが、気持ちを切り替えて闘技場が行われている闘技場へと向かった。

後のあることが起きるまでレイフォンは闘試合に出場し多くの賞金を手に入れた。

レイフォンが天剣授受者になってから1ヶ月後

「レイフォンさん陛下が王宮に来るようにと。」

レイフォンが自己鍛錬している時にデルボネからそう連絡があった。

「わかりました。」

すぐに行きます。」

デルボネにそう答えた。

「はい、お待ちしています。」

そして、レイフォンは近くでレイフォンを見ていたリーリンに城へ行くことを伝えへ城に向かった。

天剣授受者会議室：

室内には今アルシエイラ、レイフォン、デルボネの念威端子、そしてなぜかリントンスがいた。

「グレンダンに老性2期の汚染獣が向かってきているわ。今回はお前に戦ってもらっわ。」

そして、後見人にはそのリントンスをつけるから。」

そして、レイフォンがなぜリテンションがいたのかを理解した。

「わかりました。」

「じゃあ、後は着替えて、外縁部で待ち構えてなさい。」

外縁部：

「レイフォンさん、老性体との初めての戦いです。
がんばってください。」

「ありがとうございます。」

少しして、レイフォンと老性体との戦いが始まった。

王宮裏庭：

「そろそろ出てきたらどう?」

階段に座った状態でそうアルシェイラは言った。

「ばれていましたか。」

笑顔でそういいながら出てきたのはサヴァリスであった。

そして、その後ろにはカナリスとカルヴァーンも続いていた。

「あなたたち何のよう?」

けだるげにアルシェイラは3人に問いかけた。

「陛下、なぜあのような子供に天剣を渡したのですか!?!」

アルシェイラに答えたのは内なる怒りをこめて答え、カナリスが頷いた。

「僕は陛下と戦いたいので、ミンスさんの誘いに乗っただけです。」

平然とそうサヴァリスは言い切った。

「そう。」

サヴァリスはいいとして、残りの2人は自分たちがしていることを理解してる?」

「当然です!?!」

「陛下の真意を聞くためです。」

カルヴァーンと、カナリスはそれぞれ答えた。

「真意ね〜…」

子供だろうと、誰であろうと強い武芸者であれば良いだけよ。天剣を持つのはね。」

アルシェイラはそう言い切った。

「本気ですか!?!」

カルヴァーンはそう言い返した。

「当然。」

それより問題なのはお前たちが調子に乗っていることね。」

アルシェイラは立ち上がった。

「今の内に締めておく必要があるそうね。」

そう言い3人の天剣授受者を倒した。

「まったく。」

困ったものね。」

そう言ってまた階段に座った。

外縁部：

「これで終わりだ!!」

と言ってレイフォンが老性体の首を切り落とした。

レイフォンは終わったと思いきを抜いた。

その為、今まで尻尾だと思っていた物が自分に向かってきていることに気づくのが遅れてしまった。

「あらあら、食べられてしまいましたね。」

「気を抜きすぎた結果だな。」

王宮裏庭：

アルシェイラはその報告を聞くと、

「リントンス、レイフォンを汚染獣の一部とともにここまで運びなさい。」

デルボネ、整備士にエアフィルタの出力上昇と、都市内の汚染物質浄化を優先させなさい。」

そう命令した。

そして、上からリントンスが飛ばしてきた汚染獣の一部が降ってきた。

地表に付くと中から切り開かれて人が出てきた。

「ここは、王宮？
いてっ。」

レイフォンは自分がいるのは王宮の裏庭であることに気づきヘルメットを脱ぐと、後ろから石が飛んできてレイフォンへと当たった。

「何が、王宮？、よっ！！
作りたての戦闘衣を汚すってどういうこと？
それ、結構高いのよ？」

とアルシェイラはレイフォンに言った。

「え、あ、すいません。」

「謝っても許さないわよ。」

「とはいえ、ミンス、とっとと出てきなさい。」

アルシェイラは今ここにいないはずの人物の名前を呼んだ。

「なぜです…」

なぜ最後の天剣の持ち主が私ではないんですか!!

ユートノール家の当主である私ではなく、そのような子供なので
すか!!

「答えてください!!」

そう言いながら、ミンスは姿を現した。

「あんたじゃ力不足。」

「それだけよ。」

アルシェイラはつまらなそうに答えた。

実際にミンスが言ったことが詰まらな思っていた。

「なっ!!」

その子供はどれだけの力があるというのですか!!

「だから天剣を預けたの。」

「そんなこともわからないの?」

レイフォンはいきなり始まったそのやり取りを見ているしかなか
った。

「良い事思いついた。」

レイフォン、あいつを倒しなさい。
そうしたら許してあげる。

ミンスはレイフォンを倒せたらあなたにレイフォンの天剣を渡す
わ。

「どっつ?」

「わかりました。」

ミンスはそう返事をしたが、レイフォンは理解し切れなかった。

「レイフォン、あんたが負ければ天剣を剥奪するからね。」

その言葉を聴き戦うき満々でミンスに振り向いた。

「合図は私がするからね。」

と言って、近くにあった石を上に向けて。

石が地面に落ちた瞬間にレイフォンがミンスに詰め寄り一撃で倒
した。

「ま、こうなるわよね。」

それにしても、ここの修理どうしようかしら...

そっだー!!

こいつらに出させよー!!

その言葉を聴きレイフォンはアルシエイラに振り向き、

「ぼ、僕もですか?」

そう聞いた。

「あんたはいいわ。」

「そこで寝てるやつらだから。」

その返事を聞きレイフォンはほっとした。

「レイフォン。」

アルシェイラは真剣な顔をしてレイフォンの名前を呼んだ。

「次からはあなた一人で戦うことになるわ。」

今回みたいなきっかけがあれば天剣を剥奪するから覚えておきなさい。

「

「はい、肝に銘じておきます。」

「ならいいわ。」

そして、アルシェイラは仕事をするために、レイフォンは着替える王宮の中へと入っていった。

レイフォンはこの時自分の未熟さを悟り、リントンスに弟子入りし、天剣授受者や武芸者の剋技を積極的に身につけることを決意した。リントンスに弟子入りし、鋼糸を学んだ。

途中でリントンスの言いつけを破り修行し、大怪我を負ったが老性体以外を倒すことができる程度の技術を身につけた。

また、多くの剋技も身につけた。

そして、時は流れる。

第3話 初披露・初任務（後書き）

次回の話より、原作と変わったところについて書いていきます。
お楽しみに。

第4話 発覚（前書き）

原作との分岐点となる話です。

どう変わるのかは読んでみてからの楽しみです。

第4話 発覚

第4話 発覚

とある病室：

「レイフォンさんが天剣授受者になり、闇試合に出るようになって半年ですか…」

別途に横になりながらそうつぶやいたのはデルボネであった。

「それにしても、レイフォンさんはどういっつもりなのでしょう？
強くなりたいためでもなく、賞金を自分で使うのではなくグレン
ダンの全孤児院に寄付しているのはなぜでしょ？」

一応陛下にも報告しておきますか。」

女王執務室：

「あゝ、つまんないの。」

何か面白いことが起きないかしら…」

「陛下、お時間よろしいでしょうか？」

「なに、デルボネ。」

何か面白いことでもあったの？」

「陛下が面白がるようなことはありませんが、報告することがあります。」

「汚染獣でも出たの？」

「いえいえ、違いますよ。」

「じゃあ、何よ？」

「レイフォンさんのことです。」

「？」

「何かあったの。」

「天剣授受者になってから闇試合に出るようになりました。」

「その程度、好きにさせれば良いわ。」

「聖人君子になれなんて言っていないからね。」

「それは理解しています。」

「しかし、不審なところがありますので。」

「不審なこと？」

「はい。」

「レイフォンさんは強くなるために出ているのでも、まして賞金を自分で使うでもなく、全額グレンダンの孤児院に寄付しています。」

「あの子が稼いだ賞金なんだから好きに使わせたら？」

「それもそうなのですが、孤児院の経営に状況が悪化しているのではないですか？」

それで、レイフォンさんは闇試合に出場し、その賞金を孤児院に寄付しているのではないですか？

一度、その事をレイフォンさんに聞いた方がよろしいのではないですか？」

「うん…」

「陛下、孤児院で生活している人たちも私たちが守るべき市民ではないですか？」

「それもそうね。」

わかったわ。

明日、全天剣授受者に会議室に集まるように連絡して。」

「わかりました。」

そして、デルボネは天剣授受者たちに明日、会議室に集まるように伝えた。

天剣授受者会議室：

室内には全天剣授受者がそろっており、アルシェイラが来るのを待っていた。

「クソ陛下はいったい何のようだ!!」

「老性体が出たのでしよう。
僕に行かせてくれないかな。」

バーメリンは文句を言い、サヴァリスは老性体が出たための召集
であろうと考えた。

「そうかの？」

それなら、デルボネが老性体が出たと伝えるはず。
しかし、昨日はそれがなかった。」

「それもそうですね。」

「な、何があったのかな？」

「リヴったら心配性ね。」

私たちを集めるってことは戦いでしょう。」

「僕は、戦いたくないな。」

「大丈夫よ、リヴ」

私たちに勝てるようなやつなんて陛下くらいのものよ。」

「わ、わかってるけど…」

でも、僕は戦いは嫌なんだ。」

「そんなリヴが私は好きよ。」

「ティア…」

リヴァースとカウンティアが二人だけの世界を作り出した。

「はあ…」

クソ陛下、さっさと来ないかな…」

バーメリは二人の雰囲気を見てそうつぶやいた。

しかし、その願いもかなわずアルシェイラが来たのはそれから30分が経ってからだった。

「全員そろっているよね。」

「あんたが最後だ、クソ陛下」

「素っ裸で外に放り出されたいのバーメリン？」

「クッ」

「とは言え、本当はレイフォン以外いなくてもよかったんだけどね。」

「ふざけるなクソ陛下!!」

「ならなぜ集めたんだよ。」

「よほど素っ裸で放り出されたいようねバーメリン。」

その小さな胸をそんなに衆目の目にさらしたいの？」

「なっ!?!」

アルシェイラはバーメリンが気にしているからだの一部分のことを言うと、天剣を抜こうとしたが、ここで抜けば本当にされると感じ

たため思いとどまった。

「単刀直入に聞くわレイフォン。」

「あんた闇試合に出てるんですって？」

「そうとわれ、レイフォンは肩を跳ねさせた。」

「先に言っとくけど、闇試合に出てることを責める気はないから。あんたより先にサヴァリスが出てたんだから。」

「はは。」

「確かに僕も昔出てましたけど、陛下が止めたじゃないですか？」

「あんたの場合は誰かを殺しそうだからよ。」

「これは手厳しいですね。」

「まあ、サヴァリスのことはいいとして、何であんたは出てるの？サヴァリスみたいに強さを求めてじゃないでしょ？それに、賞金も孤児院に全額寄付しているし。」

その事を聞き全員がレイフォンを見た。

「…」

レイフォンは自分が闇試合に出ていることを知られていたと知り動揺し、言葉が出なかった。

アルシェイラはレイフォンがしゃべり出すまで待った。

「グレンダン中の孤児院は前に起きた食糧危機の時、孤児たちが餓

死することが増えました。

その原因の一つに孤児院には蓄えがなかったことだと僕は考えました。

だから、高額な賞金が出る闇試合に出てその賞金を孤児院に寄付すれば彼らを助けられると考えました。」

レイフォンはそう小さな声でつぶやいた。

その呟きを聞き、全員が沈黙した。

「そう。」

そんなことがあったの。」

アルシェイラがその沈黙を破った。

「レイフォン、質問を変えるわね。」

お前は、このグレンダンの何？」

「えっ！」

「お前はこのグレンダンでどんな地位にいるか理解しているの？」

「天剣授受者です。」

「そう。」

その通りよ。

そして、私に直接会い、話すことができるのよ。なぜ、私に孤児院の現状を伝えなかつたの？」

アルシェイラはレイフォンにそう問いかけた。

「そ、それは…」

「お前は私をなめてるの？」

「私じゃまともな政策一つできないと考えていたの？」

「そ、そんなことはありません。」

「じゃあ、なぜ？」

「…。」

陛下に伝えるなんてこと、思いつきませんでした。」

「はあ…」

レイフォン私はあなたに言ったわよね？

必要とあれば人に頼るようにつて。

私の剣に使い捨てるコマわいらないつて。」

「はい。」

「あんたは誰にも頼らず自分だけで問題解決しようとした。今回のことで一番の間違いはそれよ。」

何でもかんでも人に頼るよりはましだけどね。」

とは言え、私の落ち度でもあつたわね。」

その言葉を聴き、全員がアルシエイラの顔を凝視した。

「何よあなたたち。」

「クソ陛下が自分の間違いを認めた…。」

明日は汚染獣の群れでも攻めて来るのか？」

「あんたねえく！！」

「バーメリンさん！！」

それは本当ですか！！

僕は明日が待ち遠しいですよ。」

サヴァリスはバーメリンの発言を喜んだ。

「サヴァリスさん、汚染獣が来るのはいつものことです。

あるとすれば、今年戦争が起きるくらいがちょうど良いくらいです。」

カナリスがそう訂正した。

「なるほど。」

今年がそうでしたね。

今から楽しみです。」

「あんたたち、静かにしなさい！！」

まだ話は終わってないだから！！」

アルシエイラはそう叱り付けた。

「とは言え、レイフォンには罰を受けてもらうわ。

今のお前は強いけれど使い捨てのコマにしかならないからね。来週頭の夕方から私が勉強を教えるから。

朝から夕方まではサバリスとの実践訓練をするように！」

「陛下、それは本気でやってもいいんですよね？」

「えっ!!」

「あんだ達が本気でやったら被害甚大じゃない。天剣を手にするまでに使ってたダイトを使うこと。それくらいあるわよね、サヴァリス？」

「もちろん。」

その状態での本気はいいんですよね？」

「かまわないわ。」

そう言う事だからレイフオンもよ。

良いわね。」

「それはできません!!」

今までは下を向いていたが、アルシエイラを睨んだ。

「あんたに拒否権はないわ。」

これは罰なんだから。

それと、前日に私が顔合わせのために孤児院に行くからその時までは王宮のお前の部屋で暮らすこと。

それと、明日デルクにもこのことを伝えるから。」

「…」

レイフオンは言い返したいがこれが自分への罰だと割り切りあきらめた。

「後は、ここにいる全員への命令だから。」

レイフォンが閻試合に出たのはレイフォンが天剣授受者になった事に不満を持っているものと戦わせるのと、強さを示すために私が命令して、賞金は孤児院に寄付することをあんたたちも承知していた。

と言うことだから。

いいわね。」

「ふむ、仕方ないのう。」

「承知しました。」

「わかりました。」

「わ、わかりました。」

ティギリス、カルヴァーン、カナリス、リヴァースが返事をし、それ以外はうなずいた。

「カナリス、孤児院に対したの助成金交付の準備と緊急財政会議を明日行うことを連絡しておいて。」

「わかりました。」

連絡は大臣だけでかまいませんか？」

「そうね、…」

一応ミンスにも連絡しておいて。」

「かしこまりました。」

「それじゃあ、今日の会議は終わりよ。」

そして、会議は終了した。

このことにより、レイフォンの人生が大きく変わっていくこととなる。

第4話 発覚（後書き）

次回は原作と違い、新しい出会いがあります。

また、原作と違う出会い方をする人たちが出てきます。

お楽しみに。

第5話 戸惑い・好転(前書き)

今回はレイフオンは出てきません。
私なりの考えで書いてみました。
それではどうぞ。

第5話 戸惑い・好転

第5話 戸惑い・好転

サイハーデン道場：

道場主であるデルクは瞑想していた。

「デルクさん、よろしいですか？」

念威端子を通してデルクに話しかけた。

「デルボネ様、どうなさいました？」

「陛下から明日王宮に来るようにとのことです。」

「私ですか？」

「はい。」

「デルクさんで間違いありませんよ。」

「なぜ私なのでしょう？」

「私は現役を引退した武芸者です。」

「陛下が私の力など必要ないのではないですか？」

「陛下は武芸者としてのデルクさんではなく父親としてのあなたに用があるみたいですよ。」

どのような内容は、明日ご自分で確認してください。」

「わかりました。」

ありがとうございます、デルボネ様。」

「それと、しばらくの間レイフォンさんは王宮にて生活するため帰ることができません。」

「そうですか…。」

「それでは私はこれで失礼しますね。」

デルボネの念威端子は去っていった。

そして、デルクは瞑想を再開した。

孤児院：

デルクが道場から帰ってきた。

そして、ルシャとリーリンにレイフォンがしばらく帰ってこないことを伝えるために食堂へと向かった。

「お帰りなさい。」

「お帰りなさい。」

食堂に入ってきたデルクに子供たちが挨拶をした。

そして、その声を聞いて子供たちにおやつを作っていたリーリンがキッチンから顔を出した。

「お帰りなさい、養父さん。」

「うむ。」

「リーリン、話があるんだが。」

「もうちょっとでみんなのおやつが出来上がるから。」

「それまで待つてくれない？」

「わかった。」

「話自体はたいしたことじゃないから急がなくていいぞ。」

キッチンでおやつを作っていたルシャとリーリンがおやつとお茶を持って食堂に入ってきた。

そして、席に座っていた子供たちに配った。

配り終わり、ルシャとリーリンは席に座った。

「それで、話ってなに養父さん？」

「リーリンが話があると言っていたデルクに話しかけた。」

「うむ。」

「明日王宮に行くことになった。」

「養父さんが？」

「父の話聞いてルシャがいぶかしげに問い返した。」

「ああ、私にとのことだ。」

「そう。」

「それと、レイフォンはしばらく帰ってこれないそうだ。」

「え!?!」

「どづいづいと!?!」

リーリンは驚き、ルシヤは父に食い下がった。

「しばらくは王宮で生活するそうだ。」

今日の召集が関係しているのだろつ。」

「レイフォン兄、いいな。」

「うらやましいな。」

父からレイフォンがしばらく王宮で暮らすことを聞きそつ言った。

「そついうことを言っつてわいかんぞ。」

子供たちをデルクはたしなめた。

「レイフォンがしばらく王宮で生活すると言つことは天剣授受者としての戦いが近いが、時期が確定してないと言つことだろつ。」

「大丈夫かしらレイフォン」

リーリンは心配そつに呟いた。

「リーリン、大丈夫よ。」

レイフォンは天剣授受者なんだから。」

「で、でも…。」

この間みたいに大怪我するんじゃないかって…。」

リーリンはレイフォンがリントンスに弟子入りし、鋼糸を習っているときのことを思い出した。

「あ…。」

そんなこともあったわね。」

ルシャもリントンスの言いつけを破り右腕に大怪我をし、デルボネから連絡をもらい病室に駆けつけたときに聞いたリントンスの言葉を思い出した。

「レイフォン兄なら大丈夫だって。」

「そうだよ。」

レイフォン兄はとっても強いんだから。」

「リーリン姉が信じなくてどうするの。」

子供たちがそう言ってリーリンを励ました。

「そうね。」

レイフォンを信じなくっちゃ。」

翌日 王宮謁見室：

今この部屋にいるのは2人だけだ。

一人は一段高いところで、顔を御簾で隠しいすに座っており、もう一人は臣下の礼をとっていた。

「今日あなたに来てもらったのはあなたに伝えなければならないことがあるからよ。」

そうアルシエイラがそう言った。

「伝えなければいけないことですか？」

デルクはアルシエイラにそう問い返した。

「ええ。」

私の剣のことよ。」

その言葉を聴いてデルクは顔を上げた。

「あなた考えている通り、レイフォンのことよ。」

「レイフォンが何か…」

「大した事じゃないんだけどね。」

ただ、闇試合に出てったてことよ。」

「闇試合に…」

デルクはアルシエイラが言ったことを理解できずに、鸚鵡返しを

した。

「そうよ。」

賞金を稼いで、孤児院に寄付するためにね。」

「…」

デルクには心当たりがあったため、言葉が出なかった。

「まあ、やり方は間違えてたけどんね。」

でも、レイフォンなりに家族や仲間を守ろうとした結果よ。

それだけは間違いないわ。」

「それで、レイフォンはどうなるのですか？」

デルクはそうアルシェイラに聞いた。

「今回のことはあの子の知識不足からおきたと考えているわ。」

その為、レイフォンに来週から勉強をしてもらうことにしたから。

とは言え、学校に行かす訳にも行かないから、こっちで家庭教師を行かせることにしたから前日には顔合わせに行かせるわ。」

それから、その日にレイフォンも帰ることになるようにするから、それまでは王宮で謹慎という事にしたから。」

「そうですか。」

「それと、勉強を始める日からサヴァリスと実践訓練もさせることにしたから。」

こっちはレイフォンが天剣になった事への不満を持っているものたちを黙らせるためにね。」

「それはどういっことでしょうか？」

「簡単なことよ。」

ルッケンス道場で遣り合っていたら強さが勝手に伝わるようになるからね。

後は、闘試合に出ていたのが強さを示すためと言っことを強調するための口実作りよ。」

「寛大な処罰ありがとうございます。」

「あの子は私の剣だからね。」

それに、あの子を今失うには惜しいからね。」

アルシェイラは本音の一部を漏らした。

「レイフォンに伝えたいことある？」

「いえ。」

伝えたいことは帰ってきてから直接伝えます。」

「そう。」

あなたもじっくり考えたいでしょうから今日はもう良いわよ。」

「それでは、失礼します。」

そう言ってデルクは部屋を出た。

王宮政務会議室：

「グレンダン中の孤児院への助成金を増やすわよ。」

アルシエイラは会議開始早々にそういった。

「しかし陛下、現在の財務状況ですと…」

と返事を返したのは財務大臣であった。

「わかっているわ。」

王宮に掛ける費用の削減をしてそれをまわしなさい。それから、無駄な費用も削減すること。」

「しかし、それだけでは…」

「わかっているわ。」

交易で何とかしなくちゃね…。

その為にも集まってもらったのよ。

誰が良いアイデアはない？」

「そういわれましても、グレンダンは武芸が盛んなくらいしかありませんし…」

「都市間移動バスもなかなか来ませんし。」

「汚染獣と遭遇する方が多いくらいですし…」

など、各大臣たちはそう口にした。

「陛下、発言をしてもよろしいでしょうか？」

そう言ったのは、今まで黙って会議を見ていたミンスだった。

「かまわないわよ。」

「ありがとうございます。」

交易に関して、一つアイディアがごさいます。」

「まさか天剣でも売る気が！！」

「そんなことが許されると思っているのか！！」

など大臣たちは口々にそうわめいた。

「お前達は黙っていないさい！！」

それでミンス、どんなアイディアなの？」

「汚染獣との戦闘データと、汚染獣の生態データを売るのはどうでしょうか？」

汚染獣との戦いは都市にとって命がけのことですし、相手も高く買ってくれるのではないのでしょうか。」

「なるほどね。」

それならグレンダンほどの情報を持っている都市はないわね。」

「ただし、天剣授受者の戦闘データは削除したものにりますが。」

「データの編集を任せても良い？」

「はい。」

ただし、少々時間をいただきたいのですが。」

「かまわないわ。」

情報自体が膨大にあるんだから仕方ないわ。」

「ありがとうございます。」

それでは、今日からはじめます。」

そして、このアイディアにより、グレンダンの財政は安定した。なぜなら、汚染獣との戦闘回数が少ない都市にとつて汚染獣の情報と戦闘データは生き残るためにとても重要であったためである。

サイハーデン道場：

王宮からデルクは帰ってきてから道場に籠っていた。

「レイフォンが刀を捨てたのはこの為だったのか…。」

私は、どうすればいいんだ。」

デルク以外いないはずの道場でデルク以外の声がした。

「親として、彼を信じてあげればどうですか？」

レイフォンさんはいつまでもあなたの息子さんなのですから。

親が子供を信じなくてどうするのですか？」

「デルボネ様…
しかし…。」

「彼も、あなたと同じように家族を守ろうとしました。
その事を忘れてはいけませんよ。」

「はい…。」

「あなたの不器用なところがレイフォンさんにも移ったみたいですね。」

「そうでしょうか？」

「ええ。」

「間違いありませんよ。」

「子は親の背中を見て成長するのですから。
そして、あなたはレイフォンさんの憧れの存在でもあるのですから。」

「とは言え、ゆっくり考えてください。」

「親としてなら私が相談に乗りますよ。」

「師としてならテイグリスさんやカルヴァーンさんに相談してはどうですか？」

「レイフォンさんと同じ天剣授受者ですから忌憚のないアドバイスをしてもらえないのですか？」

「お心遣いありがとうございます。」

翌日、デルクは二人の下に赴き師としてレイフォンとどう向き合えばいいのかを聞いた。

そして返ってきたのは、流派の理念に基づいて行動すればいいといわれた。

このことにより、デルクは今一度サイハーデン流刀争術を見直した。理念はどんなことをしても生き残ると言うものであることを思い出し、レイフォンはその事を胸に留めた行動だったのではないかと考え、自分こそが流派と決別していることに気づき愕然とした。

そして、今一度自分を鍛えなおすことを決め、翌日から自分を鍛え始めた。

だが、親としてはまだ迷っていた。

第5話 戸惑い・好転（後書き）

私なりにこうなるのではにかと考えて書いてみました。
次回は、レイフォンへの罰と新たな出会いについて書きます。

第6話 出会い・決意（前書き）

ついにレイフォンが罰を受ける前日の話となります。
そのほか、原作と違うことがおきます。
お楽しみに。

第6話 出会い・決意

第6話 出会い・決意

王宮レイフォンの部屋：

「明日からついに始まるのか…。」

レイフォンは明日から始まる罰を考え憂鬱になっていた。

「レイフォン居る？」

ノックもなしにドアが開けられた。

このグレンダンで天剣授受者の部屋にノックもせずには入れる存在は一人しか居ない。

「陛下、どうしたんですか？」

「あなたに注意しておくことがあったと、後、いくつか聞いたときた
いこともあったからね。」

「はあ。」

注意はいいとして、聞きたいこと？」

「まずは注意事項からね。」

王宮以外では私のことをシノーラ・アレイスラと呼ぶこと。」

「シノーラ・アレイスラ？」

「そ。

私の上級学校での偽名よ。

まさか、アルシェイラ・アルモニスなんて名乗るわけにはいかな
いでしょう？」

それと、私はティグ爺の親戚と言っことになってるからね。」

「名前はいいんですけど、なぜティグリスさんの親戚と言っことにな
っているんですか？」

「はあ。」

私があんたの家庭教師は直接指名したことになってんのよ。

そんな人物をでっち上げるんなら余り知られていないティグ爺の
親戚じゃないとまずいでしょ？」

わかった？」

「なんとなく。」

「まあ、その辺は一緒に行くティグ爺が説明してくれるわ。

あんたじゃうそだと簡単にばれそうだからね。」

「うっ。」

すみません。」

「とりあえず注意事項はこんなもんよ。

後、聞きたいこと何だけど、良い胸の女性（ひと）いない？」

「は？」

「だから!!」

「良い胸の女性よ!!」

「えっと、陛下は女性ですよね?」

「当然でしょ。」

「それともあなたには私が男に見えるの?」

「もしそうなら先に病院に連れて行くけど。」

「い、いえ。」

「女性に見えます。」

「そう。」

「ならいいわ。」

「でもなんで良い胸の女性何ですか?」

「良いレイフオン!!」

「胸はね、やわらかさと、弾力を併せ持った究極のものよ!!」

「私は私の理想の胸を持つ女性を探しているの!!」

「。。。」

「がんばってください。」

レイフオンは自分には理解できないことであつたため、投げやり
にそう答えた。

「あんたもいずれ女性の胸のよさがわかるときがくるわよ。」

「たぶん、サヴァリスみたいにさえならなければ。」

「僕は、サヴァリスさん見たいにはなりませんよ。」

「まあ、あんたがサヴァリスと同じようになろうがどうでもいいけどね。」

「…。」

「あんたに聞いても無駄だったか。でもいいわ。」

「私がじぎじきに見極めてやるわ!！」

『このまま孤児院に連れて行っても大丈夫かな？
みんなに悪影響しか与えないんじゃないかな？』

レイフォンは今のアルシェイラを見て心の中で自分が思った不安をつぶやいた。

コンコン

レイフォンの部屋のドアがノックされた。

「なに？」

ノックに返事をしたのはアルシェイラだった。

「テイギリス様がお見えになりました。」

「もう来たの？」

「早いわね。」

「まあいいか。」

それじゃあレイフォン行くわよ。」

「はい。」

レイフォンはついに園に帰ると思った。

王宮食堂：

「あの、陛下？

園に行くんじゃないんですか？」

レイフォンはアルシェイラの後について行くと食堂に着いたため、レイフォンはアルシェイラに質問した。

「行くわよ？

それがどうしたの？」

アルシェイラはいまさら何を聞いてくるのかと思いつつそつ返した。

「じゃあなぜ食堂に来たんですか？」

「そんなの決まってるでしょ？」

今の時間はお昼よ。

お昼に食堂に来れば昼食を食べる以外に何かあるの？」

「えっつと…。」

「ないです。」

「でしょ？」

それじゃさつさと席につきないさい。

ティグ爺が待っててくれたんだから。」

「わかりました。」

レイフォンは納得できないが、自分の事で来て貰ったティグリスをこれ以上待たせるわけには行かないと考え席に着いた。

そして、今日来てもらう事になったことを謝るうとした。

「レイフォンが謝る事はないぞ。」

孤児院のことは王家と行政府の責任じゃからの。」

「まあ、そういうことだからそのことはこれで終わりよ。」

早速昼食にしましょ。」

「陛下、レイフォンにあのことは伝えたのかの？」

「あ〜…。」

忘れてたわ。

食べ終わったら話すから、先に昼食にしましょ。」

「そうじゃのう。」

「？」

レイフォンは何があるのかわからないが、昼食が終わればわかるので昼食を食べた。

昼食後：

「レイフォン。」

あんたが家庭教師をつけて勉強することになったことへの建前としては、戦闘報告書の書き方がひどすぎるからよ。

あんたの報告書を見て何度かカナリスが怒鳴り込んできたのよ？
あんたは知らなかったでしょうけどね。」

「そんなことがあったんですか。」

「そうよ。」

私も見たけど、あれは酷すぎるわ。

それに、いつまでもカナリスに書き直させるわけには行かないから報告書の書き方と、一般教養を教えるから覚悟しなさい。」

「えっと、そんなに酷かったですか？」

「(怒)。」

戦闘者氏名、日付、汚染獣殲滅。

これだけしか書いてないものどどこが報告書よ！！」

その事を聞いてティグリスは普段は細い目を見開いた。

「それは確かにまずいのう。」

この際、徹底的にやるべきじゃ。」

「まあ、そういうことだから手加減なく教えてあげるから。」

アルシェイラはとても楽しそうに笑いながらそういったが、目は笑っていないかった。

「お、お手柔らかに…。」

アルシェイラの笑顔を見て自分の身近にいる二人の姉妹を思い出した。

「それで陛下、いつごろ伺うかの？」

「もう少ししてからの方がいいんじゃない？」

向こうは人数が多いんだから時間がかかるんじゃないかしら？
そこどころどうなのレイフォン？」

「えっと。」

いつもならもう少し時間がかかります。

でも、それは、僕が準備を手伝ったらのことなので…。」

「なら、私は着替えてくるわ。」

それまで、ここで待っててね。」

そう言ってアルシェイラは着替えるために部屋へと向かった。

「レイフォン。」

これからいろいろ覚えることが多くて大変じゃろうが、投げ出さずにがんばるんじゃないぞ。

お前の守りと考えとる家族を守りたいのならの。」

真剣な顔をしてティグリスがレイフォンに注意した。

「は、はい。
がんばります。」

「何じゃったら、わしの孫を嫁にもらってくれんかの。
はねつかえりなところはあがあるが、器量は良い子じゃからの。」

「え、えっと…。
考えておきます。」

「そうかそうか。
よく考えるんじゃぞ。」

「あらあら、それなら私も良い子を紹介しましょうか？」
デルボネが念威端子を通してそう告げた。

「ふむ。
確かにわしだけでは不公平じゃったの。」

「えっと…。
あの…。」

「大丈夫ですよレイフォンさん。
今の内に良い子を捕まえておかないと、大変ですよ。」

「は？」

「そうじゃのう。
今の内かの。」

「？」

何で後になると大変なんです？」

「長く続けていると相手の女性から話しかけにくくなってしましますし、レイフォンさんから話しかけても相手が緊張しすぎてしましますからね。」

だから、なつて間もない内に捕まえるのですよ。」

「うむうむ。」

テイギリスはデルボネが行ったことにならずいた。

そして、レイフォンは二人から見合いを進められ続けた。しかし、それもアルシエイラが来るまでだった。

「なんでレイフォンは机に突っ伏してるの？」

食堂に入るなり自分が見た光景の疑問を問いかけた。

「なに、レイフォンが若かったと言っただけじゃ。」

「そうですよ陛下。」

二人は平然とそう言い切った。

「そう。」

いいけどね。

それじゃあ二人とも行くわよ。」

「はい。」

アルシエイラは自らの剣を2本従えてレイフォンの家である孤児院へと向かった。

孤児院：

レイフォンは数日振りに家に帰ってきた。

「ただいま。」

入り口の戸をあけてそう声を掛けた。

「レイフォン兄お帰り！！」

「お帰り。」

「レイフォン兄だ。」

レイフォンの声が聞こえたため、子供たちは入り口まで走ってきた。
た。

その中でもトビはレイフォンにぶつかるとして抱きついた。

「トビ危ないから人に飛びついたらだめだよ。」

レイフォンは困ったような顔をしながらトビに注意した。

「みんな、今日はお客様がいるんだからその辺にしないで。」

子供たちの後からやってきたルシャがそう声を掛けた。

「はい。」

子供たちは返事をして遊んでいた部屋に走っていった。

「いらっしやいませ。」

狭いところですが、中へどうぞ。」

「お邪魔するよ。」

「お邪魔します。」

ティグリスとアルシェイラはそう返事を返して中へ入った。

孤児院食堂：

そこには園の全員がそろっていた。

「ようこそいらっしやいました。」

デルクは座っていた椅子から立ち上がり二人を出迎えた。

「そうかしこまらなくてもかまわんよ。」

ティグリスはデルクにそう返した。

「しかし…」

「何ワシはこの子を紹介するために来ただけじゃから気にせんように。」

「わかりました。」

デルクはティグリスの心遣いを受け入れた。

「お座りください。」

デルクは二人に上座に座るように勧めた。

「失礼すよ。」

「失礼します。」

そして二人は席に着いた。

「どうぞ。」

リーリンは席に座っている全員にお茶を配った。

「「ありがとうございます。」」

ティグリスとアルシェイラはお茶を配ってくれた相手を見てお礼を言った。

「っ!」

しかし、アルシェイラは相手の顔を見て表情に出さなかったが何かを感じた。

『何この感じ。』

心中でそうつぶやいた。

「まずはワシの自己紹介をしておこうかの。

わしはティグリス・ノイエラン・ロンスマイア。

そして、この者はワシの親戚のシノーラ・アレイスラじゃ。」

「ティグリスお爺様から紹介されましたシノーラ・アレイスラです。よろしく願います。」

二人が自己紹介をした。

「私はデルク・サイハーデンです。」

「ルシャ・シルフィです。」

こちらこそよろしく願います。」

「リーリン・マーフェスです。」

よろしく願います。」

二人の自己紹介を聞いてデルクたちも自己紹介をした。

「それで、今日ワシたちが来た理由じゃが、レイフォンのことじゃ。陛下の命により、明日よりサヴァリスと朝から夕方まではルツケンス道場にて実践訓練をしてもらい、夕方よりシノーラのもと勉強をもらうことになった。」

「あのティグリス様、なぜレイフォンにそのような命が？」

ルシヤは不思議に思ったことをティギリスに聞いた。

「それはな、天剣授受者となったレイフォンの実力を疑っているものがあるからじゃよ。」

レイフォンの実力をそんなものたちに知らしめるためじゃ。

勉強については、レイフォンの汚染獣との戦闘報告書の書き方をカナリスが直させるように陛下に伝えてそれが認められたからじゃ。

「

「サヴァリス様との実践訓練はいいのですが、なぜ勉強をさせるのですか？」

「それは、レイフォンの報告書の内容がひどすぎたため、カナリスがレイフォンの学力が低すぎるのではないかと考えての。」

陛下に最低限の勉強をさせるように進言したからじゃよ。」

「なるほど。」

ティギリスの説明を聞いてルシヤとリーリンは納得した。

「とは言え、レイフォンを学校に通わせるわけにはいかんからのう。そういうことで、家庭教師をつけて勉強をさせようと考えたんじやが、普通のものが天剣授受者を相手に対して意見を言いにくいのではとの事で、シノーラが抜擢されたのじゃ。」

「私は上級学校に通っていると言うことで陛下が夕方から勉強を教えるようにとの命が下りました。」

ルシヤがレイフォンを見ると、レイフォンは居心地悪そうにして

いた。

「レイフォン、シノーラさんに迷惑を掛けないように明日からきちんと勉強するのよ。」

「そうよレイフォン。」

今まで武芸しかやってこなかったからそんなことになったのよ。

これからはカナリス様に迷惑を掛けないように勉強するのよ!!」

リーリンは二人から聞いたレイフォンの醜態を聞き恥ずかしさをこまかすためにレイフォンに怒鳴った。

「う、うん。」

リーリンの気迫に負け弱弱しく返事をした。

「ふおっふおっふお」

「うふふ。」

二人は天剣授受者であるレイフォンが一般人に負けている姿を見て笑った。

「お恥ずかしいところを見せました。」

「何かまわんよ。」

こんな珍しい光景を見られたんじゃからの。」

「レイフォン様も二人の前では形無しですね。」

二人は笑顔でそう答えた。

「そうだ。」

リーリンちゃんも一緒に勉強しない？」

「でも、ご迷惑じゃないですか？」

「一人教えるのも二人教えるのも対して変わらないしね。それに、レイフォン様に襲われたら抵抗できませんから。」

『襲わないし、そんなことすれば殺される。』

『襲わんじやろうし、襲われても問題なかるうに。』

レイフォンとティグリスはアルシェイラの言葉を聞き心でそう反論した。

「うん。」

レイフォンがそんな事しないとしますけど。」

リーリンはレイフォンにそんな度胸はないと思ったため、そう答えた。

「いいんじゃないリーリン。」

レイフォンが襲うことはなくても、勉強が嫌で逃げるかもしれないから一緒に勉強して見張ったら？」

ルシャは弟の性格を知っているため、襲うことはなくとも、逃げたのではないかと考え、リーリンにその事を伝えた。

「確かに、レイフォンならありえるわね。

シノーラさんご迷惑じゃなければ私にも勉強を教えてくださいませんか？」

「お安い御用よ。」

『これで彼女に感じた違和感の正体を突き止められるわね。』

リーリンに返事をしながらアルシェイラはそう考えていた。

「シノーラの顔合わせも済んだしワシらは帰るとするかの。」

「そうですね、ティグリスお爺様。」

「本日はわざわざご足労いただきましてありがとうございます。」

帰ることを伝えた二人にデルクは感謝の言葉を口にした。

「なにかまわんよ。」

二人とともに四人も入り口まで来た。

「明日より、レイフォンとリーリンのことよろしくお願いいたします、シノーラ殿」

「こちらこそ明日よりよろしく申し上げます。」

そして、二人が帰るのを四人で見送った。

二人の姿が見えなくなるまで見送ったデルクは、三人に声を掛け

た。

「話があるから私の部屋まで着てくれ。」

デルクはそういつと自分の部屋へと向かい、三人はその後続いた。

孤児院デルクの部屋：

「二人には伝えておくべきだろうな。」

デルクはいきなりそう切り出した。

「!!!」

「二人?」

デルクが言おうとしていることをレイフォンだけが理解した。

「レイフォンがサヴァリス様との実践訓練を行うことと、勉強をすることになった本当の理由についてだ。」

「本当の理由ってどう言う事よ養父さん!!!」

「何があつたのレイフォン。」

リーリンはデルクに言い寄り、ルシヤは当事者であるレイフォンに事情を聞いた。

「そ、それは…」

「ルシヤ、それは私が今から話そう。」

「わかったわ。」

話を続けて。」

「レイフォンは天剣授受者になってから闇試合に出ていたんだ。今回のことはそれを隠すために行うこととなった。」

「レイフォンが…。」

「そんな…。」

嘘よねレイフォン。」

その言葉を聴いてリーリンとルシヤはレイフォンに振り向いた。

「…。」

レイフォンは俯いたままでリーリンの問いに答えなかった。

「何でなの養父さん。」

何でレイフォンは闇試合に出ていたの…!」

ルシヤはデルクは理由を聞いた。

「私たちを助けるためだ。」

「どついでとっ…」

「孤児院の経営状態が悪かったため少しでも経営状態をよくしようとしてレイフォンは闇試合の賞金を孤児院に寄付していた。」

「もしかして、レイフォンが天剣を剣にしたのは。」

「お前の考えている通りだ。」

「じゃあ、レイフォンが刀を使わなくなったのは。」

「これから自分がやろうとしていることが私たちへの裏切りと考えたんだろう。」

その為に、剣を取った。

そして、サイハーデン流刀争術を汚さぬためだ。」

「ほんとにバカよ。」

あなたはバカで不器用だけど、私の弟なんだから！！

私たち家族にもっと頼りなさいよ！！」

ルシャはレイフォンの胸倉をつかみながらそう言った。

「ごめんなさい。」

レイフォンは謝る事しかできなかった。

「私は謝ってほしいんじゃないの！！」

ただ、すべてを一人で抱え込まないでよ！！

ここで生活しているみんなは家族なんだから。」

そう言ってルシャはレイフォンを抱きしめた。

デルクはそんな二人の光景を見ていたが、黙っているリーリンが
気になり、リーリンに振り向いた。

「リーリン？」

そこには涙を流しているリーリンがいた。

デルクの声聞き二人もリーリンに振り向いた。

「どうしたのリーリン！！」

ルシャがリーリンの肩に手を置き体をゆすった。

「私たちのせいで、レイフォンは…。」

リーリンはそう呟いた。

「そんなことはない！！」

闘試合に出たのだから僕が自分で決めたことなんだ！！」

レイフォンははっきりとそう言った。

「でも、私たちさえいなかったらそんなことする必要もなかったで
しょ。」

「違う！！」

みんなが居てくれたからこそ僕は戦えたんだ！！」

「でも…。」

「リーリン。」

レイフォンは家族を守ろうとした。

その過程が間違っていただけだ。

私たちは家族なんだ、間違えたのならそれを正すのも家族ではないか？」

デルクはリーリンを諭すようにそう言った。

「そうよリーリン。

私たちは家族なんだからまたレイフォンが間違えないように私たちは私たちにできることをしましょう。」

「…。

うん。」

「レイフォン、お前に渡すものがある。」

「えっ！」

デルクは布に包まれた箱のようなものをレイフォンに渡した。箱を受け取ったレイフォンは慣れ親しんだ重さを感じ取った。

「開けてみなさい。」

「でも、これは…。」

「本当なら、お前が天剣授受者になったときに渡そうと思っていたものだ。」

お前の全力を受け止められはしないが、どうしてもお前に受け取ってもらいたかった。

だから遅くはなかったが受け取ってほしい。」

そう言ってデルクは頭を下げた。

「そんなことしないで養父さん!!」

「お前が受け取ってくれるまでやめん。」

「そ、そんなあ…。」

デルクにそういわれ困ったレイフオンはルシャとリーリンに助けを求めた。

「受け取りなさい、レイフオン。」

「そうよ、レイフオン。」

受け取るまで養父さんはやめないわよ。」

レイフオンもデルクの性格を理解している為、自分が受け取らない限り状況が変わらないと考えてる。

「でも、僕は武芸を汚した。」

だから受け取れない!!」

「お前は、何も汚してなどいない!!」

お前はサイハーデン流刀争術の理念のもと行っただけだ。

だからこそお前には受け取ってもらいたい。

そして、お前には刀を使ってほしい。

私たちのことを思うならば頼む。」

「…。」

「ねえ、レイフォン。」

あなたが武芸の力を最大限発揮できる武器は刀よ。

それはあなたが一番理解しているわね。

戦いで生き残る可能性が少しでもあげることができるとでしょ？

それを理解しているのなら私たち家族のためにも刀で戦ってほしいの。」

「そうよレイフォン！！」

レイフォンに何かあればみんな悲しむわ！！

私たちを守りたいって思っているのなら受け取って。」

ルシヤは冷静に、リーリンは泣きながらレイフォンに刀を受け取ってほしいと告げた。

「…。」

ルシヤとリーリンが言っていることを理解できるため、レイフォンは迷った。

三人は何も言わずレイフォンが受け取るのも黙って見守った。

「わかったよ。」

「10分ほど迷ったが、レイフォンは受け取ることを決め箱をあけた。」

「やっぱり…。」

「その通りだ。」

それはサイハーデン流刀争術免許皆伝を示すダイトだ。

「今のお前には物足りないだろうがルシヤに調整してもらいなさい。」

「さあ、レイフォン調整しましょ。」

「そつよレイフォン。」

「そして、私たちにその姿を見せてね。」

ルシヤは静かにレイフォンを促し、リーリンは調整が終われば自分たちに見せてほしいといった。

「それなら調整が済み次第道場に全員を連れてきなさい。」

そう告げてデルクは道場へと向かった。

「そついうことだから早く調整をしましょ。」

ダイト調整機器が置いてある部屋にレイフォンの背を押しなが
らルシヤは向かった。

「よかった。」

リーリンはそつつぶやいた。

「さて、みんなにも道場に行くように伝えなくっちゃ!」

リーリンは道場に来るように全員に言いに行った。

孤児院ルシヤの作業室：

「基本は今まで使っていた情報を使っわよ。」

ルシヤはダイトを聞きにつなぎながらレイフォンに告げた。

「うんお願い。」

それとお願いがあるんだけど。」

「なに？」

「先に前に使っていた方を調整してほしいんだ。」

「？」

「なんで？」

「壊したくないんだ。」

だから持ち歩くのは今まで使っていた方にしようと考えてるんだ。」

「

「じゃあ、このダイトはどうするの？」

「リーリンに預かってもらっていよいよって考えてる。」

「そう、わかったわ。」

そう言っつてルシヤは調整をするダイトを変えた。

「みんな待ってるんだからさっさと済ませちゃっわよ。」

「お願いします。」

そして、ダイトの調整を行った。

ルシヤはレイフォンの癖を理解していたため、調整は速く済んだ。

「違和感があればすぐに言うのよ。」

天剣授受者になるまでの会話が二人に戻ってきた。

「うん。」

さすがルシヤ姉さんだね。

とても使いやすいよ。」

レイフォンに昔のような無邪気さが戻ってきた事を知り、ルシヤは嬉しかった。

「さあ、みんなが待ってるんだから道場に行くわよ!!」

そう言ってレイフォンを促した。

サイハーデン道場：

「レストレイション」

レイフォンはダイトを復元した。

「わ〜。」

「かつこいいー!!」

子供たちはレイフォンを囲んでそう言った。

「ありがとう。」

リーリン、お願いがあるんだけどいいかな?」

「な、何?」

いきなり呼ばれびっくりした。

「このダイトを預かってほしいんだ。」

「え!!」

でも。」

「おねがい。」

ここに、みんなの元に返ってくるって言う僕の決意のためにも。」

「リーリン、預かってあげなさい。」

「「「「そうだよ、そうだよ。「「「「

ルシヤはリーリンを促し、子供たちはルシヤの援護に回った。

「でも…。」

「リーリン、受け取ってあげなさい。」

レイフォンなりの気持ちの表し方なのだから。」

デルクもリーリンを諭すためそう口にした。

「リーリン、受け取ってほしい。」

真剣な顔をしてレイフォンがリーリンにそう言った。

「わかったわ。」

だから、ちゃんと私たちの元に返ってきてね。」

「うん。」

約束する。」

「さあ、園に戻ろう。」

デルクは全員にそう声を掛けた。

「「「はい!!」「」」

子供たちは元気に返事をした。

「ごめん養父さん。」

僕王宮に行くよ。」

「え〜!!」

レイフォン兄（にい）帰ってきたんじゃないの?」

「そっだよ。」

帰ってきたんじゃないの!」

「ほんとにごめんね。」

どうしてもしなくちゃいけないことができたんだ。」

「行ってきなさい、レイフォン。
気が済むまで。」

だが、明日からは訓練が始まるんだから時間までには帰ってくるんだぞ。」

そう言ってデルクはレイフォンを送り出した。

「行ってきます。」

そして、レイフォンは王宮へと向かった。

天剣調整室：

「このダイトの設定を天剣に移せばいいんですか？」

ダイトメカニックはレイフォンにそう聞いた。

「刀の設定を増やしてほしいんです。」

あと、復元言語の変更もお願いします。」

「わかりました。」

そう言ってダイトメカニックはレイフォンが持ってきたアイアンダイトのデータを抜き出し、天剣に入力し始めた。

この部屋にいなかった人物がレイフォンの背後から近づいてきた。

「ッ!」

レイフォンは自分の背後から近づいてくる気配を感じて振り向いた。

「あら、気づいた。」

背後から近づいていた人物は振り向いたレイフォンにそう言った。

「陛下、何してるんですか？」

レイフォンはあきれた顔をして自分に近づいて来た人物に問いかけた。

「帰ったはずのあんたが来たって連絡があったからね。何しに来たのか気になったのよ。」

「そうだったんですか。すみません、先にそちらによるべきでしたか？」

「別にかまわないわよ。」

それにしても、刀を持つことにしたのね。」

「はい。」

家族を守るために。」

そして、家族を悲しませないために刀を持つことに決めました。」

「今のあんたはいい顔してるわよ。」

「そうですか？」

「ええ。」

まあ、気が済むまでやりなさい。

でも、明日からの罰はきちんと受けるのよ。」

「はい。」

「じゃあ、私は帰るわ。」

そう言って、アルシェイラは自分の部屋へと帰っていった。

そして、レイフォンは納得するまで天剣の調整を行った。

現在のレイフォンの天剣設定

レストレイション : 刀

レストレイション01 : 剣

レストレイション02 : 鋼糸

となった。

第6話 出会い・決意（後書き）

こんな感じでレイフォンに刀を持たせて見ました。

次回はサヴァリスとの戦闘の詳細については未定のため、省くことがあるかもしれませんが。

第7話 強さの探求（前書き）

まずは読んでみてください。

第7話 強さの探求

第7話 強さの探求

孤児院食堂：

朝食が終わりリーリンとルシャとレイフォンが片づけを始めてすぐに呼び鈴がなった。

「私が行って来るわ。」

そう言ってリーリンが入り口まで出向いた。

孤児院入り口：

「はい、どちらさまですか？」

そう言ってリーリンはドアを開けた。

「おはようございます。」

レイフォンは起きていますか？」

そこには満面の笑顔を浮かべた美青年が居た。

「サ、サヴァリス様！！」

あ、あの、おはようございます。」

リーリンは相手を確認してそう口にした。

「レイフォンは起きていますか？」

サヴァリスは先ほど自分が訪ねた事をもう一度訪ねた。

「は、はい。」

少々お待ちください。

すぐに呼んできます。」

そう言ってレイフォンを呼びにいこうとした時、

「僕ならここに居るよ。」

レイフォンはリーリンの後ろに立っていた。

「きゃっ！！」

後ろに立っていたレイフォンに驚き後ろに倒れた。

「おっと。」

大丈夫ですか？」

後ろに居たサヴァリスが支えた。

「す、すみません。」

レイフォン脅かさないでよ！！」

サヴァリスに謝り、レイフォンに顔を赤くしながら怒鳴った。

「ごめんごめん。」

それより、殺戮をして来ないでくれませんか？」

「ちよつとしたテストですよ。」

それよりも最初から気づいていたのなら自分がくればよかったんじゃないかい？」

「レイフォン誰が来たかわかってたの！！」

リーリンはサヴァリスが言ったことを聞きレイフォンはサヴァリスが来たことを知っていたと知り、なぜ自分にも教えてくれなかったのかと怒った。

「伝える前にリーリンが行ったから。」

「それなら引き止めてよ！！」

「クツクツク…。」

サヴァリスは二人のやり取りを見て笑った。

リーリンはサヴァリスが居ることを思い出し、顔を赤面させて俯いた。

「それで、サヴァリスさんどうしたんですか？」

「君を迎えに着たんだよ。」

なにせ、今日からは君と戦えるんだからね。」

「迎えに来てくれなくてもきちんと言きますよ。」

「それでもだよ。」

何せ今日が来るのを楽しみに待っていたんだからね。早く君と戦いたくてね。

それで、準備はいいかい？」

「ええ。」

大丈夫です。」

「それじゃあ行こうか。」

「リーリン、行ってきます。」

「あ、行ってらっしゃい。」

やっと顔を上げたリーリンはレイフォンにそう返した。

二人を見送ってからリーリンはキッチンに戻った。

孤児院キッチン：

レイフォンを見送ったリーリンが戻ってくるとルシャが一人で食器を洗っていた。

「ごめんなさい、ルシャ姉さん。」

「かまわないわよ。」

「サヴァリス様だったんでしょ？」

「うん。」

でもなんでわかったの？」

「レイフォンのダイトよ。」

「？」

「ダイトが戦いに行くときと同じように見えたからね。」

「そんなのわかるの？」

「なんとなくだけどね。」

レイフォンがダイトを意識しているように感じるのよ。」

「そうなんだ。」

「ええ。」

長くレイフォンのダイトの調整をしていたからかもしれないけどね。」

「なんだかずるい気がする。」

「ふふ。」

私じゃリーリンには勝てないわよ。」

ルシャにそう言われ、顔を赤くして俯いた。

「レイフォンは鈍感だから気持ちは伝えなくちゃ伝わらないわよ。近くに居るからって安心してると誰かに取られちゃっわよ。」

「うん。」

わかってるんだけどね。」

「ならがんばりなさい。」

私は応援してるからね。」

相談には乗ってあげるからね。」

「ありがとう、姉さん。」

二人はそんな話をしながら食器の片づけを続けた。

ルッケンス修練場：

レイフォンは今日からどのような内容で訓練するのかをサヴァリスから説明を受けていた。

「今週の訓練は活剱と殺剱だけを使用して戦うこと。」

来週以降は衝剱や化鍊剱も使用して戦ってもらいからね。」

実践訓練は午前中だけで、午後からは好きにすればいい。」

「わかりました。」

でも、どこで訓練するんですか？」

「ここ以外にどこがあるんだい？」

「でも他の道場生が居ますけど。」

「彼らは僕たちにとってはただの障害物だよ。

実践では何があるかわからないからね。

彼らを利用して攻撃を防ぐのもよし、仕掛けるときに使うもよし、ということだよ。」

「わかりました。」

『サヴァリスさんの身体能力は侮れない。

その体にどんな風に剄を流してるのか見極める。』

『レイフォンは僕に比べて身体能力は劣っている。

でも、剄量は僕よりも多い。

その剄を限定されて剄しか使えない中でどう使うのか楽しみだよ。

』

「何か聞きたいことはあるかい？」

「いいえ、ありません。」

「それじゃあはじめようか。」

二人はすぐに仕掛けずに相手を見極めるために道場生たちを使い姿を隠した。

『サヴァリスさんから少しでも多くのことを学ばなくちゃ。

その為にはまず、相手の動きを見るしかない！！

剄の流れを今まで以上に見極める。』

『どんな戦い方をしてくれるのかな。

楽しみだね。』

二人は殺剄を使用して相手の様子を伺っていたが状況を変えるために仕掛けた。

そして、二人は上空でぶつかり合った。

「さあ、楽しもう。」

「勝手に楽しんでください。」

道場生の間を潜り抜けながら打ち合った。

「ハッ！！」

「ヤア！！」

そして、そのやり取りが長く続いたが、その間に二人の攻撃が当たった道場生たちが床に倒れていた。

「やっぱり強い！！」

それに、身体能力を活かしきる剄の使い方をなんとしても盗む。」

『活剄はまだ最適化されていないが剄の使い方はうまい。』

これは長く楽しめそうだ。』

そんな二人の戦いを目にした若い武芸者の心を折った。

『兄さんと渡り合うなんて…。』

天剣授受者がすごいのは兄さんの実力からわかっていたが、自分たちとは根本的に違う。』

彼は都市を離れる事を決めた。

そして、訓練の終了時刻となった。

「今日は楽しかったよ。」

また明日を楽しみにしてるからね。」

「今日はありがとうございました。」

『剽の無駄をさらに削る。

これからの課題かな。

これからの訓練で身につけて見せるぞ。』

『身体能力の強化、自分を活かすきる活剽。

この2つが今の僕には足りない。

体は訓練で鍛えられるから、活剽はサヴァリスさんの使い方を見ながら自分のものにしてみせる。』

二人は今日の訓練から自分にとって不足していることを見つけていた。

サイハーデン道場：

レイフォンはサヴァリスの活剽を思い出していた。

「この活剽はサヴァリスさん専用最適化されているんだ。

と言うことはすべての剽技を僕専用最適化しなくっちゃ。」

そつつぶやいたレイフォンはとても楽しそうな顔をしていた。

ルツケンス家サバリスの部屋：

「必要到量以上の剽を使っていることに気づけないとは。

僕もまだまだですね。

でも、必ず身につけて見せる。」

いつもの笑顔ではなく、心から喜んでいるとわかる笑顔をサヴァリスは浮かべていた。

孤児院食堂：

そこには三人の姿があった。

「今から二人の学力テストをします。」

「はい。」

「…。」

アルシェイラのその言葉を聴きリーリンは返事をしたが、レイフオンは嫌そうな顔をした。

「そんな顔しても変わりませよ、レイフォン様」

アルシェイラはレイフォンにさっきを飛ばしながらそう言った。

「そうよ、レイフォン!!」

シノーラさんがわざわざ用意してくれたんだからちゃんとやらなくちゃ!!」

「う、うん。」

『絶対にカナリスさんに押し付けたんだろっな…。』

『下級学校の教師たちに作らせたんだけどね。』

二人はリーリンの言葉を聴きそう考えた。

「言語、数学、歴史、交易の4科目をしてもらいます。

内容としてはあなたたちの年齢に合わせて下級学校3年までの内容になっているから。

何か質問はある?」

「ありません。」

「それじゃあ、初めて。」

アルシェイラがさういうと二人はテストに取り掛かった。

アルシェイラはテストに取り掛かった二人の姿を見ていた。

「終了よ。」

アルシェイラはテスト終了を二人に伝えた。

ゴン!!」

机からそんな音がした。

「ちょ、ちょっとレイフォンどうしたの!?!」

その音はレイフォンが机に倒れた音だった。

アルシェイラは二人のテストを採点した。

採点が終わったアルシェイラの感想は、

「リーリンちゃんは満点に近いから問題ないんだけど、レイフォン様、これはないんじゃないですか?」

「そんなにひどいんですか?」

「ええ。」

そうやってアルシェイラはリーリンにレイフォンの解答用紙を見せた。

「こ、これは…。」

そこにあっただのは言語と数学は50点、歴史と交易に関しては1桁と言う解答用紙だった。

「確かに戦うだけなら問題ないですけど、人としてどうかと思いませんけど。」

「あ、あの、へ…」

レイフォンはアルシェイラに様付けをやめてほしいと伝えようと
して、睨まれた。

「し、シノーラさん。」

「何でしょうか、レイフォン様？」

「様付けと、敬語をやめてもらえませんか？」

「そういわれましても、レイフォン様は天剣授受者ですから。」

「ここには僕を様付けする人もいませんし、僕が勉強を教わっている立場ですのでお願いできませんか？」

「確かにレイフォンの言う通りね。」

シノーラさん私からもお願いします。」

「うん。」

リーリンからもそういわれアルシェイラは困った。
そこに、

「休憩でも入れたらどう？」

と、ルシヤがお茶とお菓子を持ってきた。

キラー！！

ルシヤが来たことによりアルシェイラの目が光った。

『もしかして陛下何かするつもりじゃ……。』

レイフォンはアルシェイラの変化を見落とさなかった。
そして、アルシェイラはお茶とお菓子を置いたルシャの背後に回
り、胸をもんだ。

「キャー!!」

何するんですか!!」

ゴン!!」

そのやり取りを見ていた二人はそんな音を聴いた気がした。
殴られた当人は困惑していた。

「ちょ、ちょっとルシャ姉さん、何してるの!!」

レイフォンはアルシェイラを殴ったルシャに詰め寄ったが、

「何か間違ってる。」

ルシャがレイフォンに振り向きそう言った。

「え、えっと…。」

その顔は自分たちをしかるときの顔と同じだったため気後れした。

「レイフォン、相手が誰でも間違っていることはきちんと注意しな
いといけないのよ。」

それとも私が間違ってる?」

「ま、間違っではないけど…。」

「そつでしょ。」

そつ言つてルシヤはアルシェイラに振り向いた。

「シノーラさん女性同士でもセクハラは成立するんですよ!!
いきなり人の胸を揉んじゃだめです!!
いいですね!!」

「え、ええ。」

両親にも起こられた経験がなかったアルシェイラは戸惑いながら
そつ答えた。

しかし、自分を叱つてくれた事がうれしくもあった。

「じゃあ、断つたらいいの?」

「余り良くはないけどね。」

ただし、相手が嫌がったらすぐにやめるのよ!!

それと、近くに小さい子供がいるところでやっちゃだめよ!!
子供たちに悪影響を与えるから。」

「わかつたわ。」

それと、ルシヤさん私と友達になつてくれないかしら?」

アルシェイラは今までの自分の周りに居ないタイプの人物であつ
たためそつ言つた。

「まあ、私でいいのならね。」

それと、私のことはルシヤでいいわよ。」

「それなら私のこともシノーラって呼んで。」

そう言って二人は握手をした。

「それじゃあ、ルシヤ早速胸をもませてね。」

そういうや否や背後に回り揉みだした。

「こ、こらー!!」

「いいじゃない、私たち友達なんだから。」

「友達だけどダメ!!」

「え〜!!」

そう言いながらアルシエイラはルシヤから離れた。

「仕方ない。」

また後で揉ませてね。」

ルシヤはその言葉を聴いて両手で胸を隠して後ずさった。

「それはそうと、ルシヤにも聞きたいんだけど。」

「な、何を？」

警戒しながらもそう答えた。

「レイフオン様が様付けと敬語をやめてほしいって行ってるんだけ

「どう思うっ？」

「うん。」

レイフォンが勉強を教えてもらっているからその方が自然じゃないかしら。」

ルシヤの話聞いて考える振りをした。

「それもそうね。」

「これからはレイフォンって呼ばせてもらっわね。」

「え、ええ。」

「それじゃあ、私もリーリンって呼んでもらえますか？」

「そうね。」

「これからはリーリンって呼ぶわね。」

「私のことはシノーラ姉（ねえ）さんって呼んでね。レイフォンもよ。」

「はい。」

「努力します。」

「それでシノーラ、レイフォンはどう？」

「かなりひどいわ。」

そう言ってレイフォンの解答用紙をルシヤに見せた。

ゴン！！
ゴン！！

そんな音が食堂に響いた。

はじめの音はルシヤがレイフォンの頭を殴った音であり、次の音はレイフォンが頭を机にぶつけた音だった。

「いいことレイフォン！！」

これからきちんと勉強するのよ！！」

顔を赤くしてそう言った。

「うう…。」

レイフォンは殴られた頭を抑えていた。

武芸者としてグレンダンで天剣授受者となったレイフォンにとっ
ては痛くはないはずだが、昔からよく殴られて怒られていたため、
痛く感じるのであった。

「聞いているの、レイフォン！！」

「ちょ、ちょっと待ってルシヤ姉さん。」

もう一度殴ろうとしているルシヤをリーリンが止めた。

「ふふ。」

レイフォンもルシヤの前では形無しね。」

グレンダンでは天剣授受者とは象徴であるため、ありえない。
しかし、ここではそんなことは関係なかった。

「ルシヤ、それくらいにしてくれない？
明日からの内容の説明をしたいからね。」

「そうね。」

「ごめんね邪魔しちゃって。」

「いいのよ。」

「今は休憩中だからね。」

そして、ルシヤが持ってきてくれたお茶とお菓子を食べた。

「あら、これおいしいわね。」

「ありがとう。」

「これ、ルシヤが作ったの？」

「ええ。」

「シノーラも作ってみる？」

「そうね。」

「今度教えてくれる？」

今まで料理をしたことがなかったため、そう答えた。

「その時は厳しく教えてあげるわ。」

「その時はよろしく。」

「あの、姉さん達もついい？」

『リーリン声を掛けないですよ…。』

「ああ、ごめんごめん。」

「ごめんね。」

明日からはリーリンは新しいことを教えるわ。
レイフォンには3年までの復習をしてもらってから。」

「「はい。」」

「それじゃあ、リーリンから教えるわね。」

そう言っってリーリンが間違えた箇所を教え始めた。

「もっと勉強させてれば良かったわ…。」

「ルシヤ姉さん。」

「ごめんねレイフォン。」

私たちがもっと気をつけていたら…。」

「違うよ。」

「僕のせいだよ。」

「私から振っておいてなんだけど、この話はやめましょう。」

「そつだね。」

「がんばるのよ、レイフォン。」

ルシャはそう言ってレイフォンを抱きしめた。

「あゝ!!」

いいな。

私にも。」

「シノーラはダメ!!」

胸を揉んだんだからダメ!!

それより、解説は終わったの?」

「ええ。」

もともとリーリンは間違いが少なかったからね。

それじゃあ、レイフォンいらっしやい。」

「はい。」

処刑台に上る囚人のように近づいた。

そして、間違いの解説をされていてアルシェイラは気づいたことがあった。

『レイフォンも頭は悪くないわね。』

ただ、理解していないことが多いだけね。

まあ、今まで武芸が中心だったから仕方ないか。』

これにより、明日からのレイフォンへの勉強の教え方が決定した。そして、今日の勉強会は終わった。

孤児院入り口：

シノーラを見送るためにデルク、ルシャ、リーリン、レイフォンがいた。

「本日はありがとうございました、ルシャ殿」

今まで道場で練習をしていたデルクがアルシェイラにお礼を言った。

「いえいえ、かまいませんよ。」

「明日もお願いね、シノーラ。」

「また明日勉強を教えてね、シノーラ姉さん。」

「ええ、また明日来るわね。」

「今日はありがとうございました。」

それぞれがアルシェイラにお礼を言った。

「何言ってるのレイフォン!!」

あなたはシノーラを送っていくのよ!!」

「そうよレイフォン!!」

シノーラ姉さんに何かあったらどうするの!!」

「そうだぞレイフォン。」

女性を一人で帰らせられる時間ではなかつつ。
お前のために来ていただいたのだから送っていくのは当然だろつ。

「シノーラ姉さんなら何もないうつ。」

「レイフォン。」

送っていきなさい。」

ルシヤはレイフォンにそう言い放った。

「それまでは帰ってきちゃダメだからね。」

「う、うん。」

ルシヤが余りにも怖かったためレイフォンは頷いた。
そして、デルク、ルシヤ、リーリンは見送った。

「ほんとにレイフォンったら鈍いわね。」

とルシヤは呟いた。

帰り道：

「いいとこらね。」

「え！…！」

いきなりアルシエイラから話しかけられ何を言っているのかわからなかった。

「あなたの家のことよ。」

家族の温もりを感じたわ。

あれなら、あんたのした行為にも頷けるわね。」

「陛下。」

「でも、やり方は間違えていた。

それは覚えておきなさい。」

「はい。」

「私は家族の温もりを感じたことはなかったわ。

今日みたいに叱ってくれたりする人がいなかったし。

大切にするのよ。」

アルシエイラはさびしそうにそうレイフォンに言った。

「陛下、ルシヤ姉さんとリーリンにとっては陛下も家族の一員です

よ。」

「そうかしら?。」

「ええ、そうですよ。」

だからルシヤ姉さんとリーリンの前では素直になっていいんじゃないでしょうか?。」

「そうですね。」

ありがとうレイフォン。

じゃあ、明日からは厳しく行くから覚悟しなさいよ。」

アルシエイラはそう言っつて不適な笑顔を浮かべた。

「お手柔らかにお願いします。」

そして、王宮に着くまでそれ以上話すことはなかった。

第7話 強さの探求（後書き）

アルシェイラのキャラがおかしくなっていました。
しかし、こんなアルシェイラもどうでしょう？

戦闘についてはこれからも詳しく書くことはないと思います。

第8話 最初の一步(前書き)

今回は訓練をメインに書いてみました。

あと、題名については読んだ人によって捉え方が違うと思います。

第8話 最初の一步

第8話 最初の一步

ルツケンス修練場：

レイフォンは前日と同じ時間に訪れた。

「それじゃあ、はじめようか。」

「そうですね。」

二人のその言葉を聴き、道場生は逃げ出そうとした。

「僕たちのことは気にせず君たちは自分の練習をできていいよ。」

サヴァリスにそう声を掛けられたため逃げられなくなった。

そして二人は戦い始めた。

「ハア！！」

「フツ！！」

二人は前日と同じく激しく道場内を動き回りながら戦った。

「どうしたんだい、レイフォン！！」

劉が乱れているよっ！！」

そう言いながらサヴァリスはレイフォンの胴体に蹴りを放った。レイフォンはそれを刀の柄尻で受け、サヴァリスから距離を開けた。

「そういうサヴァリスさんこそ動きに切れがありませんよっ!!」

そう言ってからサヴァリスに近づき刀を一閃させた。

それをサヴァリスは半身になって交わしたが、レイフォン左手で顔に抜き手を放った。

その抜き手が当たると道場生たちは思った。

ドゴツ!!

しかし、吹き飛んだのはレイフォンだった。体を右にそらした際に蹴りを放っていた。

「ふふっ。

危なかったですね。

やはり戦いとはこうでなくてはいけませんね。

そう思いませんかレイフォン？」

「勝手に思ってください。」

「つれないですね。

僕は楽しくてしょうがないのに。

それに、強くなっているという実感を感じられる。

これほど楽しく訓練できたのは初めてですよ。

さあ!!

もっと楽しませてくださいね。」

サヴァリスは一気にレイフォンとの距離を縮めた。

『確かに強くなっている実感がある。』

それに、力を使う事がこんなに楽しいなんて。』

そして二人は接近戦を続けた。

訓練が終わればサヴァリスには切り傷、レイフォンには痣ができていた。

昨日と違い、二人は傷を負っていた。

なぜなら、初日は相手を観察することをメインとしていたが今日からは自身の力を試し、研鑽することがメインだったからだ。

「それじゃあレイフォン、今日の訓練は終了だよ。」

そう言ってサヴァリスはレイフォンに背を向けた。

「待ってください。」

レイフォンはサヴァリスを呼び止めた。

「何です？」

「サヴァリスさんは体をどうやって鍛えてるんですか？」

そして、身体能力を最大限に生かす活剷はどうやって身につけたんですか。」

「何でそんなことを聞くんだい？」

そんなことを聞かなくても君ならいずれわかることだろ？」

「そうかもしれない。
でも、そのことを知っている人がいる、だから聞いたんです。
それに、陛下が言っていた人を頼るといいうことを実践しているだけ
です。」

「なるほど。」

人を頼るですか…。」

『まあ、その程度教えたところで問題ないでしょう。
それに、レイフォンの練習方法を聞くこともできますしね。』

「ダメですか。」

「かまいませんよ。」

体の鍛え方ですが、一つの動作をゆっくりすることです。
その時に剋量を少しずつ上げながら行います。
これにより、場所ごとの活剋の量を決めます。」

「なるほど。」

活剋で筋肉を刺激することにより強い筋肉に変え、活剋の最適
量を測るんですね。」

「そう言うことです。」

周りにいた道場生たちは騒然とした。

なぜなら、サヴァリスが簡単に自分の訓練方法を教えるなどは
思っていなかったためである。

「サヴァリス様そんなこと教えていいんですか？」

道場生の一人がその声を掛けた。

「別にかまいません。

たいした事ではありませんしね。

それではレイフォン、君の訓練方法を教えてくれませんか。」

「ええ、わかりました。

ここには鉄球はありますか？」

「鉄球ですか？」

君たちは知っているかい？」

サヴァリスは自分ひとりで訓練していたため練習場にあるのかと周りにいる道場生たちに聞いた。

「い、いえありません。」

先ほどサヴァリスに問いかけた道場生が答え、他の道場生たちはそこ答えを肯定するために首を縦に振った。

「鉄球がないと説明出来ないのかい？」

「ある方がわかりやすいからです。」

「なるほどね。

どのくらいあればいいんだい？」

「そうですね50個くらいあれば十分じゃないですか？」

最初のうちはつぶすことが多いでしょうから。」

「わかったよ。」

「ゴルネオ、今から買ってきてくれないか？」

「俺がですか？」

「そつだよ。」

「僕個人の買い物となるからね。」

「僕の部屋にある財布を持って行って買ってきてもらいたいからね。」

「

「はあ。」

「わかりました。」

「サヴァリスの弟のゴルネオ・ルツケンスはそう言ってサヴァリスの部屋へと向かった。」

「ゴルネオが買ってくるまでに治療を済ませておこう。」

「サヴァリスはレイフォンにそう言った。」

「そつですね。」

「いつまでもこのままというわけにも行きませんしね。」

「レイフォンはそう返した。」

「まあ、そつでしょうね。」

「昨日二人が怪我をしなかったのがおかしいのですから。」

「そつ女性が声を掛けてきた。」

「そうですか、母上？」

声を掛けてきたのはサヴァリスの母であり、ルッケンス流継承者
フォルシル・ルッケンスの妻であるティアレス・ルッケンスであっ
た。

「はじめまして。」

初めて会ったサヴァリスの母親に挨拶をした。

「はじめまして、レイフォン様。」

サヴァリスの練習相手になっていただいております。
この子の相手を出来る人がいない事を気に掛けていたんです。
もしよろしければこれからもよろしくお願いします。」

そうレイフォンに挨拶をした。

「い、いえ。」

とんでもないです。」

戸惑いながらもそう返事をした。

「母上、そんなことを言いに来たのではないでしょうっ？」

「あら、そうでした。」

二人とも治療をしますから傷を見せてください。」

そう言って二人を道場の隅に連れて行った。

その時レイフォンは彼女に自分の姉たちと同じものを感じた。

『逆らわない方がいいんだろうな。』

そんなことを思った。

「二人ともいい体をしていますね。」

二人の治療を終えたティアレスはそう言った。

「え、えつと…。」

「レイフォン、母上も武者ですからね。」

やはりそういうことが気になるんですよ。」

「ごめんなさいね。」

そんなこといきなり言われたら驚きますよね。」

「ええ、まあ。」

「母上もかなりの武者ですからね。」

僕以外ではこの道場で最強ですよ。」

「まあ、うれしいことを言ってくれるのねサヴァリス。」

「本当のことですよ。」

そんな二人のやり取りを聞きながら何度か見たことのあるフォルシルのことを思い出していた。

『確かにサヴァリスさんはティアレスさんに秀囲気が似ている。』

そう考えるとかなりの実力であるのは間違いないだろう。それに、サヴァリスさんがお世辞を言うわけがない。』

レイフォンはそう結論付けた。

そして、ゴルネオが帰ってくるまで三人で話をしていた。

「買って来ましたよ兄さん。」

「ありがとうゴルネオ。」

サヴァリスはゴルネオから鉄球を受け取った。

「それでこれを使ってどう訓練するんだい？」

「することは簡単ですよ。」

この上を高速で移動したり、型を行います。後は、打ち合いを行います。」

「それだけかい？」

「それだけです。」

実際にやってみればわかりますよ。」

そう言われサヴァリスは20個ほどを床の上に置いた。

「確かにバランスを鍛えるにはいいけど、たいした事じゃないよ。」

「私にもそう見えるわ。」

「いつものように動いてみてください。」

レイフオンはそれだけしか言わなかった。

「まあ、やってみるか。」

サヴァリスは実際にやってみないとと言われていたので高速で移動した。

『確かに思った以上に難しいね。』

球だけあって簡単に転がってしまうね。』

そう思いながら移動をしていた。

グシヤー！！

いきなりサヴァリスの足元からそんな音が聞こえた。

「おっと。」

サヴァリスは自分が踏んだ鉄球がいきなり潰れたことに驚いた。

「何で潰れたのかしら？」

「それは簡単ですよ。」

サヴァリスさんの剄に鉄球が耐えられなかったんです。」

「でも、サヴァリスならその程度のコントロールを間違えたりしないわよ?。」

「普通ならそうです。」

しかし、球は簡単に転がってしまいます。
その為に足場を確保しようと力を多く掛けてしまいます。
その連鎖によって足裏の剉量を増やしてしまい、鉄球を潰してしまっただんです。」

「なるほど、そういう事か。」

「なるほどね。」

レイフォンの説明を聞き二人は納得した。

「剉量を必要以上に掛けると簡単に転がるようになります。
その為、正確な剉量のコントロールが身につきます。
そして、それは打ち合いにもいえます。」

「なるほど。」

「これは面白いね。」

「本当、こんな訓練があるなんて面白いわ。」

「僕がしている訓練はこれくらいです。」

「そうかい、ありがとう。」

「ありがとうね、レイフォン君。」

三人だけで話している時にレイフォンはティアレスに様付けで呼ばないでほしいことを伝えたため君付けで呼ばれるようになった。

「さて母上、打ち合いの相手になっていただけますか？」

「いいわよ。
楽しみだわ。」

レイフォンはやはり二人は似ているとさらに思った。

「それでは僕は帰ります。」

「ええ、それではまた明日。」

「明日からもサヴァリスをよろしくお願いね。」

そして、レイフォンは孤児院へ帰った。

サイハーデン流道場：

レイフォンがルツケンス修練上に出かけてからデルクは修練をしていた。

「養父さん、ちょっといい。」

そのデルクに声を掛けるものがいた。

「どうしたルシャ。」

「私弟子入りしようと思ってるの。」

「いきなりどうした。」

「いきなりじゃないの。」

前から考えていたんだけど、切欠がなくて。」

「そうか。」

私はとめたりはせんよ。」

「ありがと、養父さん。」

「だが、弟子入りしようと思った切欠を教えてくださいないか。」

「…。」

レイフォンの事があったから。」

「なるほどな。」

だがなぜだ？」

「弟であるレイフォンに甘えていられないって思ったの。」

あんなことをしたのも私が甘えていたからじゃないかって思って

…。」

「なら、私は何も言わんよ。」

お前の思うようにやりなさい。」

何かあったら相談してくれ。」

私たちは家族なんだからな。」

「うん。」

それと、ダイトメカニックを紹介してほしいんだけど。」

「私もメカニックの知り合いは多くない上に、現役を引退している

者しかいない。

それに、私も武者として引退していたために今のメカニックには知り合いはいない。」

「そうね。」

「そういうことならレイフォンに聞いた方がいいだろう。」

「レイフォンに？」

でもレイフォンは私と天剣専門のメカニック以外知らないんじゃないかな。」

「そうだろうな。」

しかし、あいつは王宮に出入りできるからな。」

「そのことに何の関係が？」

「王宮には優秀なメカニックの情報が集まるからな。」

「なるほど。」

デルクの答えを聞き納得した。

「ありがとう養父さん。」

レイフォンが帰ってきたら聞いてみるね。」

そう言っつてルシヤは孤児院に帰るために背を向けた。

「そっしなさい。」

デルクはルシャにそう言ってから訓練をはじめた。

「甘えていたのは私も同じだな。

あの子達を守るために私も今一度刀をとる。」

デルクはそうつぶやいた。

孤児院食堂：

昼を少し過ぎたくらいにレイフォンは帰ってきた。

「ちょっと待っててね。」

前日にレイフォンから昼には帰ってくることを伝えられていたり
ーリンはそう言いながらキッチンへと向かった。

「レイフォン聞きたいことがあるんだけど。」

ルシャはレイフォンが帰ってきたことを知り作業室から出てきた。

「何ルシャ姉さん？」

「ダイトメカニックを紹介してほしいの。」

「うーん、そういわれても…。」

「出来たわよ。」

リーリンはレイフォンの昼食を持って帰ってきた。

「ありがとう、リーリン。」

「いいのよ。」

ルシャ姉さんもレイフォンが食べ終わるのを待ってから聞けばいいんじゃない？」

「そうね。」

「ごめんね、レイフォン。」

「ううん、いいんだよ。」

「それじゃあ、いただきます。」

レイフォンはリーリンが作ってくれた昼食を食べ始めた。

「ごちそうさま。」

リーリンは片付け始めた。

「私も手伝うわ。」

「私一人で大丈夫よ。」

それに、ルシャ姉さんはレイフォンとの話があるでしょ？」

「ありがとう、リーリン。」

ルシャはリーリンの心遣いを受け入れた。

「それでレイフォン、誰か知らない。」

「そう言われても、僕は姉さんと天剣専門のメカニック以外に調整してもらったことがないから。」

「それは知ってるの。
でも誰か知らない？」

「うん。」

そう言えば、天剣専門のメカニックが辞めて町でメカニックをしてるって聞いたことがあったような…。」

「それ本当!!！」

「た、たぶん…。」

「どこに居るのが聞いてきてくれない。」

「えっと、どこで？」

「どこって、王宮以外ないでしょ？」

「だよな…。」

「お願いレイフォン!!！」

真剣な顔で頭を下げた。

「ちょ、ちよつと、姉さん!!！
わかったから頭を上げてよ。」

「ありがとうレイフォン。」

「ちょっと行って来ます。」

そして、レイフォンは確かめるために王宮へと向かった。

「いきなりどうしたのルシャ姉さん。」

「いきなりじゃないの。」

前から考えていたのよ。

早く独り立ちしなくちゃいけないって考えてたのよ。」

「でも、急じゃない？」

「そうね。」

レイフォンのことがなければこんなに早く言うことはなかったか
もしれないわ。」

リーリンは何もいえなかった。

王宮天剣調整室：

「ちょっといいですか？」

「どうしましたレイフォン様。」

若いメカニックがそう答えた。

「天剣のメカニックをやめた人が町でダイトメカニックをしている
って話を聞いたんですけど本当ですか？」

「本当ですよ。」

でも、あったことありませんでしたっけ？」

「レイフォン様が会ってるわけないだろ。」

天剣授受者になる前にやめてるんだからな。」

そう言ったのはこの主任であった。

「そうでしたっけ。」

「ああ、間違いない。」

ロイヤール・クオートさんがやめたから俺が主任になったんだから
な。

それに、あの人が居たらレイフォン様は最初から刀を握っていた
よ。」

「それはないと思いますけど。」

レイフォンはそう返事をした。

「いえ、絶対に刀を持っていましたよ。」

「何でそう言いきれるんですか？」

「簡単なことですよ。」

私たちは基本本人に頼まれた通りに調整するが、あの人は違う。
あの人は使い手の実力を最大限に発揮できるようにしか調整をし

ないからな。」

「そう考えると確かにロイヤーさんが居れば刀を持つてたでしょうね。」

「そんな人が居たんですか。」

「それで、ロイヤーさんは今どこに居るんですか？」

「確か家に居るはずだ。」

「そこが工房でもあるからな。」

「住所を教えてくださいませんか。」

「かまいませんが、なぜです。」

「姉がダイトメカニックを目指していて、弟子入りしたいと言っていたので。」

「そうだったんですか。」

若いメカニックはそう答えた。

「もしかして、レイフォン様のダイトを調整をしている人ですか？」

主任メカニックである、彼はレイフォンの天剣を刀に調整したためそう聞いた。

「そうです。」

「それなら今のままでもやっていけるだけの技術はありますよ。」

「そうなんですか。」

「ええ。」

でも誰かに弟子入りするのはいいことですからね。ちょっと待っててください。

ロイヤーさんの住所を書いてきますから。」

「ありがとうございます。」

レイフォンは住所と名前の書かれた紙を持って帰っていった。

孤児院ルシヤの作業室：

「ルシヤ姉さん、聞いてきたよ。」

「ありがとうございます。」

「別にいいよ。」

「明日合いに行つて来るわね。」

「がんばってね姉さん。」

「うん。」

そして、レイフォンは部屋を出た。

時は流れレイフォンの勉強の時間となった。

孤児院食堂：

三人の人物がそこにはいた。

「リーリンは4年生からの、レイフォンは3年生までの勉強をしてもらいます。」

解らないことがあつたらその都度聞いてね。」

そして、勉強が始まった。

アルシェイラは勉強をしている二人を見ていた。

『リーリンから感じる違和感は何なのかしら？
嫌な感じでもないし、何の関係しているのかしら？』

そんなことを考えながらリーリンを見ていた。

「うん。」

レイフォンが問題を見て頭を抱えてうなっていた。

「どこがわからないの？」

「ここです。」

アルシェイラはどこがわからないのを聞き解説を始めた。

「レイフオンは頭が悪いんじゃないから理解できてないからできないだけのようね。」

アルシエイラはそう結論付けた。

「そうですか？」

「間違いないわよ。」

その問題は自分だけで解けたでしょ？」

「確かに。」

「基礎さえきちんと理解すればもっと出来るようになるわよ。」

「そうならば勉強も楽しくなるわよ。」

そして、時は過ぎ今日の勉強は終わった。

第8話 最初の一步（後書き）

サヴァリスとゴルネオが余りにも性格が違ったため親について簡単に書いてみましたが、どうだったでしょうか？

第9話 見極め（前書き）

完全に私の妄想で書いた話となっております。

その為、矛盾箇所があると思いますのでそれはご了承ください。

第9話 見極め

第9話 見極め

レイフォンが王宮にてロイヤー・クオートの工房の住所を聞いてきた翌日の朝

ロイヤー錬金鋼工房：

工房の前に一人の女性が立っていた。

「ここがロイヤー・クオートの工房。」

急に来たけど居るかしら？」

連絡もせずに急に来たためにルシャは不安になった。

「とにかく確認しなくちゃね。」

居なければ出直せばいいだけだし。」

決心が付いたルシャはドアを開けた。

ガチャ

「すみませーん。」

ロイヤー・クオートさんはいらっしやいますか？」

工房の奥にその声を掛けた。

「何じゃ。」

そう言いながら一人の男が出てきた。

「私、ルシャ・シルフィといいます。」

「それでどんなようじゃ。」

お主は武芸者ではないじゃろ？」

「はい、私は武芸者ではありません。」

私はあなたに弟子入りしたくて来ました。」

「わしに弟子入りじゃと？」

「はい!！」

「帰ってくれ。」

わしは弟子を取るつもりはない。」

「お願いします。」

私を弟子にしてください。」

「さつきも言ったがわしは弟子を取るつもりはない。」

「そこを何とかお願いします。」

「なんともならん。」

「では、なぜ弟子を取らないのか理由を教えてください。」

ただ言い合いをしても変わらないと思ひ理由を尋ねた。

「弟子を取りたくない、それだけじゃ。」

ルシヤの問いに答えなかった。

「いいえ。」

あなたには何か理由があるはずですよ。」

「理由などない。」

とつとと帰れ。」

「いいえ、あなたは嘘をついています。」

あなたの目は何か深い理由があると言っています。」

「ッ!」

ルシヤの言葉を聴き肩をはねさせた。

「もう理由は聞きません。」

でも、私の技量を見てから判断してくださいませんか?」

ルシヤはロイヤールの反応を見て軽々しく聞いてはいけないと感じ理由を聞かないことにした。

その代わり、自分の力量を見てから判断してほしいと言った。

「…。」

「ダメでしょうか?」

「わかった。」

お前さんの力を見て判断してやろう。

だが、わしの目利きは厳しいぞ。

それでも良いか？」

「はい!!」

「とは言っても誰のダイトを調整してもらうかじゃが…。」

「今までに調整したダイトを見てもらうのではいけませんか？」

「それではダメじゃ。」

初めての人のダイトを調整してその出来具合をもって判断しなければ力量を計れん。

それに、メカニックは初めてのダイトを調整できなければいかならな。」

「確かにそうですね。」

「さて、誰に頼むかの…。」

ロイヤーが誰のダイトを調整してもらおうか悩んでいると豪快にドアが開かれた。

バンツ!!

「ロイヤーさん、ダイトを作ってほしいんですけど。」

そう言って入ってきたのはレイフォンと同年代の少女であった。

その少女は自分以外に人が居るのを見つけた。

「ごめんなさい。」

「お客さんが来てたんですね。」

「客ではなく弟子入り志願者じゃ。」

「へえ〜。」

「ロイヤールさん弟子をとるんですか？」

「それを決めるためにダイトの調整をさせて力量を図ろうとしておるのじゃ。」

「そうなんですか。」

「なら、私が立候補してもいいですか？」

「お嬢ちゃんがか。」

「はい。」

「それと、私のことはクララって呼んでください。」

「わしから見ればお嬢ちゃんじゃよ。」

「いつかクララって呼ばせて見せますからね。」

「気長に待っておるぞ。」

ルシヤは黙って成り行きを見守った。

なぜ見守っているのかというと、誰のダイトを調整することになっても全力を尽くすと決めていたためであった。

「そういつことで、そのお嬢ちゃん専用のダイトを作ってもらっぞ。」

「はい。」

「それでかまいません。」

「ならかまわん。」

「それでは、二人とも自己紹介ぐらいしたらどうじゃ。」

「そ、そうでしたね。」

「すみません。」

「私はルシャ・シルフィと言います。」

「あなたのダイトを作らせていただくことになりました。全力を尽くしますのでよろしくお願いします。」

「私は、クラリーベル・ロンスマイアです。」

「こちらこそよろしくお願いします。」

「私のことはクララとお呼びください。」

「えっ!!」

「ロンスマイアってもしかして…。」

「一応三王家のロンスマイアですが、お気になさらずに。未熟者です。」

「それじゃあ、明日作成してもらおうかの。」

「わかりました。」

「クラリーベル様…。」

「クララとおよびください。」

クラリーベルはルシャが話しをさえぎりそう伝えた。

ルシャは王家の人を気軽に呼ぶことに抵抗があったが、相手の目がそう呼ばなければ話が続けられたいと感じたためあきらめた。

「え、えっと、クララ、どのダイトをどんな形にしたいの？」

「アイアンダイトで刀を作ってほしいんです。」

「刀に？」

「弓ではないのですか？」

「はい、刀でお願いします。」

「ロンスマイアー門は弓を使う武芸者が多かったと思いますが違いましたか？」

「わしもそうじゃったと記憶しておる。」

「はい。」

私の一族は弓を使用する武芸者が多く居ます。

しかし、それ以外の道具を使い人も居ます。

私は弓を使うのが性に合わないので刀を選びました。」

「そうなんですか。」

「でも、なぜ刀を選んだんですか？」

ルシャはクラリーベルがなぜ刀を選んだのか気になったので聞いてみた。

なぜなら、刀を使用する一門はグレンダンでも少なかったためである。

「簡単です。」

レイフォン様の流派が刀を使うからです。

あの人を超えるには刀のことを理解できなければいけないと思ったからなんです。」

「レイフォンを？」

「ルシャさん年下とは言え天剣授受者と呼ばび捨てにするのはやめた方がいいですよ。」

「確かにそうじゃな。」

相手は都市の象徴でもあるんじゃないかな。」

「そ、そうですね。」

「気をつけます。」

ロイヤーはルシャが呼び捨てにしていたことを注意したが当然のように呼んでいたためその事を聞いてみた。

「わかったのならいいんじゃない。」

しかし、気軽に名を呼ぶということとは関係者か？」

「そうなんですか!!！」

クラリーベルはルシャに詰め寄った。

「私の弟です。」

「本当ですか!!」

私を紹介してください。」

「なるほどな。」

それで今までに調整したダイトを見せようとしたのか。」

ロイヤーは力量を測るといったときに言っていた調整したダイトとはレイフォンのダイトであったことを理解した。

そして、彼女が今までレイフォンのダイトを調整していたメカニックであることを理解した。

「そう言うわけでもなかったのですが…。」

ただ、調整したダイトというのが養父とレイフォンしかいなかったたので。

それに、現役の武芸者はレイフォンしか居ないので。」

「まあ、そんなことはどうでもいい。」

明日の調整で判断させてもらうからの。」

「はい、よろしく願います。」

「ルシャさん、今日家にお伺いしていいですか?」

二人の話が終わるまで待っていたクラリーベルがそう言った。

「ええ、かまいませんよ。」

でも、今の時間ではレイフォンは居ませんけどいいですか?」

「かまいません。」

レイフォン様についてお聞きしてみたいので。
それに、レイフォン様のダイトを調整していたあなたにもいろいろ聞きたいですし。」

「ちよつと待つてくださいね。」

ロイヤーさんかまいませんか?」

ルシヤはロイヤーにダイトを調整する前の話し合いをしてもいいものかを聞いた。

「なに、その程度かまわんよ。」

それにお嬢チャンは刀について詳しくなさそうじゃからの。

明日は10時に二人とも来ておくんじゃぞ。」

「はい。」

「それでは失礼します。」

ルシヤはそう挨拶をして工房のドアを開けて外に出た。
そして、クラリーベルもその後続いた。

「あの者はおんなことにはなりはしまいか…。」

二人が出て行ったのを見送ったロイヤーはそう呟いて。

孤児院への帰り道：

「ルシヤさん先ほどどうかがった今の時間居ないとはどういふことぞ

すか？」

クラリーベルは家を訪ねてもいいかとたずねたときにその事を聞き疑問に思っていたため聞いた。

「今の時間はルツケンス修練場でサヴァリス様と訓練してるのよ。」

「？」

レイフォン様の流派はサイハーデン流刀争術ですよね。
なのになぜルツケンス修練場で訓練しているんですか？」

「それはね、女王陛下の命でレイフォンの実力をわかりやすくアピールするためなの。」

「そんなことをしなくても天剣授受者になった時点で実力がいかに優れているかを証明しているのではないですか？」

「普通はそうなんだけど、若すぎるからって事でいい顔をしない人たちが居るからだそうよ。」

「ああ、そういう事ですか。」

確かに、人の実力を認められない人は居ますからね。」

「そういうことだね。」

ルシヤは真実を隠し、建前を伝えた。

「ではその間メカニックからの視点での話を聞かせていただけますか？」

「ええ、かまいませんよ。」

よろしければ養父からも話を聞きますか？」

「いいんですか？」

「大丈夫ですよ。」

二人はそんな話をしながら孤児院まで歩いた。

ルッケンス修練場：

周りに居る道場生は違和感を感じていなかったが、レイフォンとサヴァリスとティアレスは違和感を感じていた。

「二人とも何かあったんですか？」

「何もありませんよ。」

それより君こそ何かあったのかい？」

「何もないわよ。」

レイフォン君こそ何かあったの？」

「何もありませんけど。」

しかし、三人から違和感がなくなることはなかった。

「それより今日から私も加わってもいいかしら？」

「僕がかまいませんが、サヴァリスさんはかまいませんか？」

「僕は母上が加わるのはかまいませんよ。」

何より、劉量は少なくともそれを補う技術を持っていますからね。

「

「ふふ。」

それではよろしくお願いします。」

そして、三人は手合わせを開始した。

『『『動きが鈍い』『』』』

三人は手合わせを始めて自分の動きと相手の動きがいつもより鈍いことが違和感であったと気づき手合わせを中止した。

「昨日の個人練習の負担が思ったより大きいみたいね。」

ティアレスは自分が感じたことを口に出した。

「そのようですね。」

「そうですね。」

二人もうなずいた。

「この後どうしましょう？」

「どうしようか？」

「どうしますか？」

「この後どうするのかの話し合いを始めようとした。

「あの、ちょっといいですか？」

レイフォンは二人に話しかけた。

「どうしたんですレイフォン？」

「何かあったのレイフォン君？」

「二人の剽脈何ですが、昨日と違うように見えるんです。」

「そつえばレイフォンは剽の流れが見えるんですね。」

「ええ。」

「すごいわ〜レイフォン君。」

「それでどうしたんですか？」

「試してみたいことがあるんです。」

「「試してみたいこと？」」

「はい。」

「二人の剽脈に外部から剽を流してみたいんです。」

「そんなことして大丈夫？」

「正直わかりません。」

「僕はいいですよ。」

「「え!!!」」

「何事も経験ですよ。」

それに、レイフォンの剽を見る方法も気になりますしね。どうやっていいのかわかりますか？」

「今まで意識したことがなかったですね。」

「それなら、今から意識して見てみましょう。」

「そうですね。」

今まで意識せずに見ていた剽を意識してみた。

「あれ？」

「どうしたんですか？」

「どうしたの？」

「目が熱くなってきたので…。」

「何も変わってないわよ。」

「他に感じることはありませんか？」

ティアレスはレイフォンの目が変化していないことを伝え、サヴアリスは他に感じることはないかを聞いた。

「そうですね。」

目に剉で作られたレンズがあるような感じですね。」

「そのレンズによって剉を感じているわけですか。面白そうですね。」

「楽しそうですね。」

私も見てみたいわ。」

それぞれの感想を述べた。

「剉の鼓動が見えます。」

後は、剉脈？の大きさもわかります。」

「それでは、レイフォン僕に剉を流してください。」

「わかりました。」

両手を出してくれませんか？」

「いいですよ。」

レイフォンに答えながらサヴアリスは両手を出した。

「何で両手なの？」

ティアレスは疑問をレイフォンにぶつけた。

「互いの両手を合わせて円状にしたほうが流れやすいんじゃないかと考えたからです。」

ティアレスに答えながらサヴァリスと手を合わせた。

「それではいきますよ。」

「いつでもどうぞ。」

そして、レイフォンは剽をサヴァリスに流した。

レイフォンは10回ほど剽をサヴァリスと自分の間を循環させてから手を離れた。

「どうでしたか？」

「なかなか面白いですよ。」

今まで理解しきれていなかった剽脈の位置をはっきりと認識することができました。」

「それはすごいわねサヴァリス。」

「母上も受けてみてはどうですか？」

それに、体が軽くなったようにも感じますしね。」

「そうなんですか？」

「ええ。」

剽の流れが元に戻ったみたいですね。」

「それじゃあレイフォン君、私にもお願いね。」

「わかりました。」

そう言ってレイフォンはサヴァリスにしたのと同じようにした。

「確かに剽脈をはつきりと認識できたわ。

それに、体が前以上に軽く感じるわ。」

二人はレイフォンに剽を流してもらったため違和感がなくなった。しかし、レイフォンは剽を流してくれるものが居なかったため違和感をぬぐえなかった。

「今日は帰ってゆっくりすればいいよ。」

「そうよ。」

今日は体を休めるのがレイフォン君の訓練よ!!」

そう言って二人はレイフォンを帰る様に促した。

「わかりました。」

今日は帰らせてもらいます。

ありがとうございます。」

そう答えたレイフォンは孤児院へと帰った。

「僕たちも体を休ませますか。」

「そうね。」

レイフォン君も休むんだから私たちも合わせなくちゃね。」

「明日からの訓練が楽しみですね。」

「早く明日が来ないかしら。」

しかし、レイフォンに剉を流してもらったことが後に大惨事を起こす事になるうとは二人は思っても居なかった。

孤児院食堂：

そこにはデルク、ルシヤ、クラリーベルがおり、刀についてクラリーベルが話を聞いていた。

「ただいま。」

話をしている最中にレイフォンが帰ってきた。

「どうしたの？」

今は訓練中じゃないの？」

帰ってくるはずのない時間にレイフォンが帰ってきたためルシヤはその事を聞いた。

「今日の訓練は中止になったんだ。
それで帰ってきたんだよ。」

レイフォンはそう説明した。

「お帰り、レイフォン。
早かったのね。」

横からレイフォンが帰ってきたことを知ったリーリンが話しかけてきた。

「ただいま、リーリン。」

「帰ってきたんなら紹介するは、彼女はクラリーベル・ロンスマイアさんよ。」

「クラリーベル・ロンスマイアです。
気軽にクララとおよびください、レイフォン様。」

「よろしく。」

「レイフォン、目がどうかしたの？」

リーリンはレイフォンにそう話しかけた。

「ちょっと目が痛くて。
後は体がだるいんだ。」

「それなら今日はもう休んで。
後のことは私たちでしておくから。」

「でも…。」

「レイフォン今はゆっくり休みなさい。」

それが皆のためにもなるんだからな。」

「そうよレイフォン、今日は休みなさい。それとも、私たちに心配を掛けたい？」

「それじゃあ、今日は休ませてもらうね。」

「そういうことなので、クラリーベル様失礼します。」

「お体を大切に。」

その言葉を聴きレイフォンは体を休ませるために部屋へと向かった。

「私はレイフォンの看病をしてくるわね。」

そう言ってリーリンはレイフォンの後を追った。

クラリーベルはデルクとルシャと刀についているいる聞いてから帰った。

そして、夕方となった。

食堂にはリーリンとアルシエイラだけだった。

「レイフォンは体調不良のため、今日は休んでいます。来ていただいたのにすみません。」

「いいのよ。」

体調が悪くなったのなら仕方ないわ。

今日はリーリンに付きっ切りで教えてあげるわ。」

『ある意味私にとっては好都合ね。』

「そういえば、ルシヤはどうしたの？」

「ルシヤ姉さんは今レイフォンの看病をしています。」

「そうなの。」

「うらやましいわね。」

「ダメですよ、レイフォンは体調不良なんですから。」

アルシエイラがルシヤの胸を触りに行かないように釘をさした。

「わかってるわ。」

せっかくのチャンスを逃さずにリーリンを観察し始めた。

『もしかしたら…』

それに、年齢的に考えても矛盾はないわね。

間違いなく私の子供に受け継がれるはずだった力を宿している。』

アルシエイラは今までの観察からリーリンについての結論を出した。

そして、今日の勉強は終わった。

本来ならレイフォンが送っていくのだが、体調不良のためデルクが送っていくこととなったためティグリスの家まで送ってもうらう事となった。

『レイフォンは私だけの剣じゃなかったか。』

でも、いいわ。

私の剣でもあるわけだからね。

これからどうするか、考えなくっちゃね。』

アルシエイラは今日わかったことについてそう結論付けた。

第9話 見極め（後書き）

ルシャが弟子入りするにはやはりどの程度の技量があるのかをテストするべきだと私は考えたためこのようになりました。

また、クラリーベルをこのように出してみました。どうだったでしょうか？

第10話 進化・逃避（前書き）

前回の話の続きのような話となっています。

ゴルネオが学園都市に行くことを家族に話をします。

また、進化については読んでからのお楽しみです。

第10話 進化・逃避

第10話 進化・逃避

レイフォンの訓練がなかった日の夜。

孤児院看護室：

現在この部屋には二人しか居ない。

「う〜。

目が痛い。」

「大丈夫、レイフォン。」

ルシャがベッドで唸っている弟に声を掛けた。

「今は目が痛いだけだから。」

「目薬さしてあげましょうか？」

「いい。

剋の量が増えたときに近い感覚だからこのまま我慢する方がよさそう。」

「そう。

でも、何かあったらちゃんと言っのよ。」

「ありがとう。」

それとごめんね。

明日は弟子入り試験なのに。」

「そんなこと気にしないの。」

コンコン

ドアがノックされた。

「入っていいわよ。」

ルシャはノックをした人物に入っている事を伝えた。

「レイフォンの調子はどう?」

部屋に入ってきたリーリンはルシャにそう聞いた。

「目が痛いそうよ。」

ただ、剋量が増えたときと似てるそうだから何もできないけどね。」

「レイフォン、何かしてほしいことはある?」

「ありがとう、リーリン。」

でも今は何もないかな。」

「そう。」

そう答えてリーリンはベッドの近くにある椅子に座った。

「姉さんはもう休んで。

後は私がするから。」

「大丈夫よ。

私も手伝うわ。」

「ダメよ姉さん!!」

明日は大事な試験があるんでしょ!!

クララのダイトを調整するんでしょ!!

それとも姉さんにとってはダイトの調整なんかどうでもいいの!

「!」

「そうじゃないけど...。」

ルシヤはリーリンの気迫に負けていた。

「じゃあ、今日はもう休んで。

明日のダイトの調整で全力を出せるように!!」

「わかったは。

それじゃあ、レイフォンお休み。」

「お休み、姉さん。」

そして、ルシヤは自分の部屋に帰っていった。

「ごめんね、リーリン。」

迷惑掛けて。」

「そんなことないわよ。」

「でも…。」

「私は迷惑だなんて思ってないわよ。」

それに、こういうことは突然起こるんだからしょうがないわよ。」

「ありがとう。」

『レイフォンはまた無茶をしたんじゃないか…。』

私たちを守るために強くなるうとしてるのは嬉しいけど、体には気をつけてね。』

リーリンはレイフォンに心の中でそう願った。

その直後、レイフォンが苦しみだした。

「あ、熱い、目が熱い。」

「え、え。」

どうしたのレイフォン!!」

いきなり目を押さえ、熱いと言い出したレイフォンにリーリンはあわてた。

バンツ!!

「どっした!!」

様子を見ようと近くまで来ていたデルクがレイフォンとリーリン

の大声を聞いて急いで部屋へ入ってきた。

「レイフォンがいきなり目が熱いって言い出したの。」

リーリンがそう答えたが、その後ろではレイフォンがまだ目が熱いと言っていた。

「タオルと洗面器に水と氷を入れて持ってきなさい。」

「う、うん。」

リーリンはデルクにそう言われて部屋を出た。

「何かあったとき私でレイフォンを止められるか。」

デルクはそう呟いた。

「何があったの？」

「どうしたの？」

園の全員が部屋へと集まってきた。

レイフォンはみんなが集まってきているのを感じて声を出すのを我慢した。

「心配ないから皆は休みなさい。」

デルクはそう答えたが、

「でも、レイフォン兄とリーリン姉の大声が聞こえたよ。」

「「「そうだよ。「「「

トビがデルクにそう返すと、他の子供たちがその事を肯定した。

「今日は遅いから明日説明する。

だから今日はもう寝なさい。」

状況を理化仕切れて居ないためそう答えた。

「「「「わかった。「「「「

子供たちはしゅしゅ部屋へと戻っていった。

「養父さん。」

一人残っていたルシャが話しかけた。

「お前も今日は休みなさい。

明日の朝話すから。」

「わかったわ。

お休み、養父さん。」

「ああ、お休み。」

ルシャは部屋へと帰っていった。

そして、デルクは活剷を全身にめぐらせた。

「もってきました。」

そこにリーリンが帰ってきた。

「ありがとう。」

リーリンはタオルを水につけた後良く絞りレイフォンの目に当てようとした。

「レイフォン、タオルを置きたいから手をのけくれる。」

「う、うん。」

痛みをこらえながらそう答えた。

「どっ？」

「少し楽になったよ。」

「ありがとう。」

「それと、何かあったんですかバーメリンさん。」

「「え。」」

「クソ陛下の命令できたんだよ。」

「何かあったんですか？」

バーメリンの答えを聞いてレイフォンはグレンダンで何かが起きているのではないかと考えた。

「お前が暴れだしたら押さえつけるために来た。」

「どういふことです。」

「クソ婆からの連絡でお前たちを抑えるために私たちが出向くことになった。」

「僕たち？」

「僕意外にも何かあつたんですか。」

「サヴァリスのクソ野郎と母親にも派遣されてる。」

「そうですか。」

「そういうことだから今晚はお前を見張らせてもつらからな。」

「わかりました。」

「よろしく願います。」

「お手数をおかけします、バーメリン様。」

今まで黙っていたデルクがバーメリンにそう述べた。

「気にするな。」

「命令できているだけなんだからな。」

「それでもです。」

「バーメリン様、ありがとうございます。」

リーリンはバーメリンに感謝の言葉を述べた。

「お前が気にすることじゃない。」

それに、礼ならそこで寝てるやつにしてみらうからな。」

「お手柔らかにお願いします。」

「クソ命令を出される原因に手加減する必要はない。」

そして、場を沈黙が支配した。

時間は過ぎ朝となった。

「目はどうレイフォン？」

「痛みもなくなってるよ。」

そう言ってレイフォンは眼の上にあるタオルをのけ目を開けた。

「「「なっ!!」「」「」

レイフォンの顔を見ていた全員が驚きにより声を上げた。

「何かあったの？」

「レイフォンの目が…。」

「僕の目？」

きちんと見えてるけど。」

「お前の瞳の色が変わっているんだ。」

バーメリンがそう指摘した。

「は？」

瞳の色が変わってる？

そんな馬鹿な。」

「いや、お前の瞳は今金色だ。」

「本当よレイフォン。」

「そうなんだ。」

まあいいけどね。」

「確かに瞳の色が変わった程度だからな。」

レイフォンの気軽な声にバーメリンも同意した。

「あれ？」

バーメリンさん何をつけてるんですか？」

「私はいつもの格好だ！！」

やっぱりおかしくなったんじゃないか？」

「そうよレイフォン。」

バーメリン様は私たちが見たことのある格好よ。」

レイフォンはその答えを聞きまわりを見回した。

「じゃあ養父もいつもの格好をしてるの？」

「そうだが、どうした？」

その答えを聞きレイフォンはベッドから立ち上がりデルクに近づき体を触った。

「何をしている？」

「何しているのレイフォン！！」

「お前はそういう趣味をしていたのか。」

「やっぱり何も無い。」

そう言って今度はバーメリンに近づき腕を触った。

「ちょっとレイフォン！！」

「何してるの！！」

その行動を見てリーリンはレイフォンに怒鳴った。

「気が済んだかレイフォン。」

声に怒りを乗せてバーメリンはそう言った。

「ええ、ありがとうございます。」

「ゴンー！！」

バーメリンが本気でレイフォンを殴った。

「痛い。」

「女の体を断らずに触ったばつだ。」

「そうよ、レイフォンー！」

「今回はレイフォンが悪いわー！」

「すみませんでした。」

「それで何かわかったの。」

「バーメリンはレイフォンをにらみながらそう言った。」

「ええ。」

「バーメリンさんが僕を殴ったときに確信しました。」

「それで何を確信したんだ。」

「そのことなんです、陛下にも報告しよつと思つので」

「わかった。」

「王宮で話すんだろ。」

「ええ。」

「それじゃあ、とつとと行くよ。」

「はい。」

「それじゃあ、言ってきました。」

そう言ってバーメリンとレイフォンは窓から出て行き王宮へと向かった。

同日夜

ルツケンス家食堂：

そこには四人の人物が居た。

「父上、大事な話があります。」

ゴルネオはフォルシルに話しかけた。

「なんだ。」

「俺を学園都市に行かせてください。」

「まあ。」

ティアレスは意外なことを聞いたという声を出した。

「なんだと。」

もう一度言ってみる。」

フォルシルはゴルネオをにらみつけながらそう言った。

「俺を学園都市に行かせてください。」

「お前はルツケンス流の次期後継者だ。
そのようなところに行くことは許さない。
そんなくだらない話は今後するな。」

「なっ！！」

後継者は兄さんじゃないんですか？」

フォルシルが兄ではなく自分が後継者だといわれ驚き問い返した。

「僕は強くなるためなら流派を捨てると言ったからね。
それに、僕は流派にこだわりがないしね。」

「そういうことだ。」

「でも、俺は兄さんのように強くない。
それなのになぜですか！！」

「サヴァリスと同じ強さなど天剣授受者以外ないからな。
それに、お前はルツケンス流に執着があるからだ。」

「あなた、ゴルネオがなぜ学園都市に行きたいのかを聞いてから判断する方がいいのではないですか？」

「そんな必要はない。」

「たまにはゴルネオのわがままを聞いてもいいんじゃないですか？」
殺気を向けながらフォルシルに話しかけた。

「ゴルネオ、なぜ学園都市に行きたいんだ。」

シルフィルの殺気に負け、不機嫌ながらそう聞いた。

「グレンダンではルツケンスという名前に守られています。

だからこそ、その名前が通じないところで自分を鍛えたいのです。そして、外で多くのことを学びたいのです。」

「武者者にもなれていないお前が外で強くなれるとは思えない。それゆえに行く必要はない。」

「まあ、いいのではないですか？

ゴルネオはいずれルツケンス流を継ぐのですからいろいろな経験をさせておくのはいいことだと思いますよ。

それに、強くなれなかつたら破門と一族から追放すればいいんですから。」

ティアレスは笑顔でそう言った。

「ゴルネオが学園都市に行きたいと言ったんですからそのくらいの覚悟をしているんでしょうから許可してはどうですか父上。」

サヴァリスはティアレスの意見に賛成した。

「ちょっと待ってください。

俺は…。」

「なるほど。

それだけの覚悟があるのなら行ってくるとい。

ただし、今よりも弱くなっていれば生きていられると思うなよ。

それではこれで話は終わりだ。
反論は許さんぞゴルネオ。」

シルフィルはゴルネオが話をさえぎり、殺気を飛ばしながらそう
言い切り席を立った。

「がんばるのよゴルネオ。
期待しているからね。」

ただし、武芸者の誇りをなくすようなことがあれば私が殺してあ
げますからね。」

ティアレスはゴルネオの肩をたたき笑顔でそう告げた。

「母上風邪薬をもらえますか？」

「あら、サヴァリスも？」

「母上も、体がだるいのですか？」

「そうなのよ。」

こんなときに風邪をひくなんてね。」

「ええ、早く直さなければレイフォンと楽しめませんからね。」

ティアレスはサヴァリスに風邪薬を渡した。

「今日は早く寝るのよ。」

「わかっています。」

「それではおやすみなさい。」

「はい、おやすみなさい。」

そして、二人も部屋へと戻っていった。

「俺はそんなこと考えてなかったのに……。
ただ、兄さんたちから離れたかっただけなのに、なぜこうなっ
たんだろう。」

一人だけ取り残されたゴルネオはそう呟いた。
しかし、フォルシルから許可をもらえたので明日にでも試験申し
込みをしようと考え部屋へと戻っていった。

サヴァリスの部屋：

「体がだるいのに体が熱いとはね。
明日にはレイフォンと楽しむためにも早く寝ますか。」

サヴァリスはそう言ってベッドへと入った。

サヴァリスとティアレスが寝てから少しして二人の体から汗が漏れ
出し始めた。

王宮アルシェイラの寝室：

部屋の主がベッドで寝ていた。

「寝ているところすみません陛下。
緊急事態が発生しました。」

蝶の形をした念威端子がそう告げた。

「何があつたのデルボネ。」

「サヴァリスさんの体から剉が漏れ出ています。
それと、ティアレスさんからも剉がもれ出ています。」

「ティアレス？」

「サヴァリスさんの母親ですよ。」

「ああ、あのいい胸をしていた人ね。

でもあの二人が剉のコントロールができないなんてね。」

「何か外的な要因があると思いますよ。」

「そうですね。」

ルイメイとカナリスを行かせなさい。

何かあれば二人で何とかできるでしょうからね。」

「わかりました。」

あと、レイフォンさんもごく一部なのですが、剉がもれ出ていま
す。」

「そっちはバーメリンを行かせて。」

「では、三人にはそう伝えておきます。」

「二人には王宮に来てもらわなくちゃいけないわね。何があったのかしらね。」

そして、アルシェイラは眠りについた。

サヴァリスの部屋：

「どうしたんですかルイメイさん。」

サヴァリスは苦しげにルイメイに問いかけた。

「陛下の命だ。」

「そうですか。」

ルイメイの返事から自分の体に起きていることが原因で来たことを理解した。

「それと、お前の母親のところにはカナリスが行っている。」

「母上にも？」

「今のお前と同じ状況ということだ。」

「なるほどそうですか。」

「そういうことだ。」

おとなしく俺に監視されている。」

そして、時間が過ぎ、朝となった。

「それでは王宮に行きますか。」

「当然だろうな。」

だが、カナリスにも声を掛けておかないとつるさいぞ。」

「そうでしたね。」

「私は何ですか？」

部屋の外から女性の声が聞こえてきた。

「入ってくればいいのに、外で待っているとはね。」

ガチャ。

ドアを開けてカナリスが室内へと入ってきた。

「それでは、陛下も待っているでしょうから王宮へ行きますよ。」

「ええ。」

「ああ。」

二人はカナリスにそう返し、窓から王宮に向けて移動した。

第10話 進化・逃避（後書き）

私はゴルネオが簡単に学園都市にいったと思わなかったため、このような設定にしてみました。がどうだったでしょうか。

次回は王宮内での話と、ルシヤの試験となります。

第11話 決定（前書き）

アルシエイラ、ロイヤーの決定についての話になっています。
アルシエイラはどんな決定を行うのか。

そして、ロイヤーはルシヤにどんな決定をするのか。

それは読んでからのお楽しみです。

第11話 決定

第11話 決定

天剣授受者会議室：

現在室内には天剣授受者がそろっていた。

「全員そろっているわね。」

そこにアルシェイラが現れた。

「はい。」

すぐに始めますか？」

カナリスがアルシェイラに聞いた。

「まあ、朝食を食べてからでも問題ないでしょうから先に朝食にするわよ。」

そう言ってアルシェイラは食堂に向かった。

「確かに陛下の言う通りじゃの。」

今回の話し合いの内容も決まっているからの。」

ティグリスはアルシェイラの言葉を肯定して食堂へ向かった。

「そうだな。」

今すぐに何かあるわけでもないからな。」

カルヴァーンも同意して食堂へ向かった。

「ふん。」

確かに今回の召集の原因のクズたちもいるからな。」

バーメリンもそう答え食堂に向かった。

そして、それに続くようにカナリス、サヴァリス、レイフォン以外が食堂へと向かった。

「わかっていると思いますが、食事が済み次第何があったのか話してもらいます。」

いいですね。」

「はい。」

「ええ。」

あなたに言われなくてもわかっていますよ。」

サヴァリスはカナリスにいつも以上の笑顔で答えた。

「...。」

それならいいです。」

その答えを聞いたカナリスは目つきを鋭くしてそう答えた。

「それじゃあ、食堂に行きませんか？」

険悪な二人にレイフォンがそう言った。

「そうですね。」

陛下をお待たせするわけには行きませんかからね。」

「そうですね。」

三人は食堂へと向かった。

王宮食堂：

アルシエイラは全員がそろったことを確認して本題以外を話し出した。

「今年は戦争の年よ。」

その時はあんた達だけで片付けてね。」

「わかっております。」

それで、出撃者はどのように決めますか？

老性体との戦いのような相性があるわけでもないですし。」

「そうですね。」

リントンスでいいんじゃない？」

「陛下、誰でもいいなら私にやらせてくれませんか？」

サヴァリスが投げやりに答えたアルシエイラにそう言った。

「あんたでもいいけど、リントンスのほうが早く済むからよ。たかが都市同士での戦いで市民をシエルターに長時間入れておくわけには行かないでしょ？」

「だからよ。」

アルシェイラはサヴァリスにリントンスを選んだ理由を説明した。しかし、都市同士の戦争をたかがと評したアルシェイラを非難するものはここにはいなかった。

「確かに都市同士の戦いごときでは仕方ないですね。」

サヴァリスもその意見に納得できるところがあり、そう答えた。

「とは言え、その時になって変えるかもしれないしね。」

アルシェイラはどうでもいい事と言うようにそう告げた。

「いい加減だな、クソ陛下。」

バーメリンもどうでもいいようにそう言った。

「都市同士の戦争なんて私たちにはたいした意味を持たないからね。ただし、負けることは許さないわよ。」

そのことは覚えておきなさい。」

アルシェイラは自分の剣を睨みながらそう言った。

その言葉に全員がうなずいた。

話が終わったことを見計らいメイドたちが朝食を持ってきた。

そして、全員が朝食を食べ終わり今日の本題を話し合うために会議

室へと戻った。

天剣授受者会議室：

「原因に心当たりはある？」

アルシエイラはサヴァリスとレイフォンに単刀直入にたずねた。

「僕と母上についてはあります。」

「すみませんわかりません。」

二人はそれぞれそう答えた。

「そう。」

なら、サヴァリスから話してもらおうかしら。」

「わかりました。」

原因はレイフォンに剽を流してもらったことではないかと考えています。」

「どういふこと。」

具体的に話さない。」

「僕と母上はレイフォンに体の剽脈にそって剽を流してもらいました。」

そのことにより、剽脈を今まで以上に感じる事ができました。また、そこ事により、剽脈が刺激されたため剽量も増えたと考え

ています。

「剽が漏れたのは剽脈の拡張に伴う剽量の増加が原因だと思います。」

「なるほどね。」

レイフォンの剽で刺激したことによって剽脈の制御が甘くなったわけか。

それなら、お前たちも試してみる？

「というか話が終わったらやるように。」

サヴァリスの予想の真偽を確かめるためにね。

「拒否は許さないから。」

アルシェイラは天剣授受者たちにそう言った。

「しかし陛下、一度に全員行うのですか？」

カナリスは疑問に思ったことを聞いた。

「当然でしょ。」

事も無げにアルシェイラはそう答えた。

「しかしそれでは何かあった場合はどうするのですか？」

「二人以外は戦えなくなります。」

自分たちが戦えなくなるためその事をアルシェイラに聞いた。

「二人がいるから大丈夫でしょ。」

「それに、私もいるからね。」

カナリスにアルシェイラはそう答えた。

「わかりました。」

カナリスにはそう答えるしかなかった。

「サヴァリスさんもしかして風邪薬を飲みませんでしたか？」

話が一段落したと思いレイフォンはサヴァリスに疑問をぶつけた。

「ええ、飲みましたよ。」

それがどうしたんです？」

「やっぱりそうですか。」

「何でそんなことを聞くのレイフォン？」

「今まで僕が分量が増えたときのことなのですが、風邪のような症状が出ます。」

そして、風邪薬を飲むと体のコントロールが聞かなくなったことがあります。」

その為、サヴァリスさんたちの剉が漏れたのは風邪薬を飲んだからではないかと考えたからです。」

「なるほどね。」

そんなことがあったの。」

なら武芸者には風邪薬を飲ませない方がいいわね。」

「しかし、剉が急に増えるなんて滅多にありませんから気にしなくてもいいと思います。」

「なら、剉を流した後はじっとしてるのよ。」

アルシェイラはレイフォンに剉を流してもらう天劍授受者たちにそう告げた。

「それでレイフォンのことだけど、ほんとに心当たりはないの？」

「そうですね。」

今までと違い意識して剉を見るようにしてから目が痛かったんです。

もしかしたらその状態で啓が増えたために瞳の色が変わったのかもしれない。

それに、剉脈が今まで以上に見えるようになりました。」

レイフォンは自分で考えてた意見を述べた。

「どう見えてるの？」

「今までは流れだけが見えていたんですけど、今は色が付いて剉の鼓動が見えます。」

「見るのにコツはあるの？」

「そうですね。」

剉で作ったレンズを複数重ねるといった感じですが、厚みや枚数は人によって違うと思います。」

「なるほどね。」

それじゃあ、レイフォン全員に剉を流しなさい。」

「わかりました。」

そう答えて全員に剽を流した。

そして全員の感想は剽脈を今まで以上に感じる事ができるとい
うものだった。

その事を聞きサヴァリスは

「やはりそうなるのですか。

僕もそうでしたからね。」

と自分も体験した事を告げた。

「今日は全員王宮で待機してもらおうからね。

それじゃ、解散。」

アルシェイラはそう言って部屋を出た。

「一応言っておきますが、時間が経つにつれて体にダルさを感じる
ようになりますよ。」

そう言ってサヴァリスも部屋を出た。

「それでは僕もこれで失礼します。」

レイフォンはそう言って部屋を出た。

「確かに今まで以上に体が軽いの。

10歳以上若返ったようじゃ。」

ティグリスが自分の体と剽の確認を終えてそう言った。

「確かにクソ爺の言う通り体が軽いな。」

「「「確かに。」」」

残りの天剣授受者も肯定した。

「今日一日私たちは体を休めることが仕事です。各自自分の部屋で休むとしましょう。」

「そうじゃのう。」

そして、各自の部屋へと向かった。

ロイヤー錬金鋼工房：

工房には三人の人物がいた。

「それでは始めてもらおうか。」

ロイヤーが開始の合図をした。

「はい。」

「お願いします。」

ルシャはアイアンダイトで刀の基礎形態を作り出した。その様子を見たロイヤーがクラリーベルに話しかけた。

「昨日の内に話し合いをしていたのか？」

「刀については話しましたが、今日作ってもらった刀の内容は話していませんよ。」

「そうか。」

「なら楽しみに待ったおくか。」

「ええ、私も楽しみです。」

二人が話している内にルシヤはアイアンダイトを刀に加工した。

「それじゃあ、微調整するから刀を持ってくれるクララ。」

「はい。」

「計測器を接続していないぞ。」

「それでは使い手の剄に合わせることはできんぞ。」

ロイヤーは計測器に接続していないダイトをクラリーベルに渡そうとしているルシヤに注意した。

「？」

「計測器なんでなぜ必要なんですか？」

「使うのは武者ですよ？」

「何を言っておる！！」

「わたたちがダイトに流れる剄からダイトのパラメータを調整するんだぞ！！」

その為にも計測器が必要だ!!
そんな基本も知らんのか!!」

ロイヤーはルシャの返答を聞きそう怒鳴りつけた。
そして、クラリーベルは二人の様子を静かに見守っていた。

「私たちが数値で理解したものを反映させての調整ならば誰でもいいではないですか!!」

私たちメカニックは使い手に一番適したダイトの調整を行うためにいるんです!!」

だからこそ、使い手の感覚を信じずに何を信じるのですか!!」

「彼ら武芸者も人間だぞ!!」

間違えることもある!!」

そんな不確かなものに頼って調整などできん!!」

「彼らは自分の命をダイトに預けています!!」

その彼らが自分の感覚を信じられなくてどうやって戦うんですか!!」

彼らは戦場で命のやり取りをしているんです!!」

その彼らが戦場で磨いてきた感覚を疑うのならばそんな人は武芸者失格です!!」

「なっ!!」

ロイヤーは絶句してしまった。

なぜなら、ルシャは武芸者の感覚を全面的に信頼していると理解したからだ。

そして、年若いルシャにそこまでの決心させたレイフォンに驚きを隠せない。

「そう言えばお爺様が、最近のメカニックは武芸者の感覚を否定する人が出てきたといっていました。」

そして、自分の感覚を信じられない武芸者も現れたとも。」

「そんなことはいいからクララ、ダイトを復元してくれる？」

「そうじゃの。」

今はお嬢ちゃんのダイトの調整を済ませてしまおうか。」

「わかりました。」

レストレーション。」

クラリーベルはルシャから受け取ったダイトを早速復元した。

「持ってみてどう？」

「全体的に重たいですね。」

刃渡りももう少し短い方がいいですね。」

「それはそうよね。」

レイフォンの設定じゃそうなるわよね。」

後は剉の流れに違和感はない？」

「剉の流れはともいいです。」

抜けるような開放感があります。」

「ほお〜。」

「剉に関してはレイフォンの設定を基準にして調整をすればいいみ

たいね。

とは言え、これからの訓練しだいで剽の流れは変わってくるから
ダイトの剽の流れは気に掛けておくのよ。

違和感があったらすぐに教えてね。」

「はい。」

ロイヤーはクラリーベルの体型に合った刀に調整をしているルシ
ヤを静かに見ていた。

『あれだけの強い意志を持っていれば大丈夫だな。
この子なら間違った道を進むことはないだろう。
あいつと違って…』

調整が終わった二人にロイヤーは話しかけた。

「ルシヤお前を弟子として認めよう。」

明日から来なさい。

ただし、わしの指導は厳しいぞ、覚悟しておくように。」

「はい。」

明日からよろしく願います。」

ロイヤーから弟子として認められたルシヤは笑顔で返事をした。

第11話 決定（後書き）

いかがだったでしょうか？

続きについては今のところ考えていないのでそのときの気分しだいとなります。

リクエストなどがありましたらそれに沿った内容で書きますのでよろしく願います。

第12話 ピンチ?いいえ普通です!! (前書き)

今回は内容が余り思いつかなかったため今まで以上に少なくなっています。

レイフォンとサヴァリスがバグ化している話となっています。

第12話 ピンチ?いいえ普通です!!

第12話 ピンチ?いいえ普通です!!

王宮食堂:

「あなたたち何か変化はあった?」

アルシェイラはレイフォンに剋を流してもらった天劍授受者たちに問いかけた。

「剋脈を今まで以上に感じる事ができます。

それに、体の芯は熱いのに体はだるく感じます。」

カナリスがアルシェイラに答えた。

「確かにそんな感じじゃのう。」

「私も同じです。」

ティギリスとカルヴァーンがカナリスに同意した。

「全員同じ感じなの?」

アルシェイラは返事も同意もなかった天劍授受者に問いかけた。

「はい。」

「そうね。」

「ああ。」

「ふん。」

リヴァース、カウンティア、リントンス、バーメリンが答え、他の天剣授受者は頷いた。

「そう。」

ここまではサヴァリスと同じね。

お前たちは各自の部屋で休んでいること。

これは命令だからね。」

アルシェイラがそう締めくくったため全員が昼食を食べだした。そして、昼食を食べ終わり全員が自分の部屋へと戻っていった。

サヴァリスの部屋：

部屋の前にレイフォンが立っていた。

コンコン

「びびぞ。」

ドアをノックされたためサヴァリスは返事をした。

そしてレイフォンがドアから部屋の中に入ってきた。

「どうしましたレイフォン？」

レイフォンが来ていた事がわかっていたがどんな用事で来たのかわからなかったために理由を聞いた。

「サヴァリスさん今いいですか？」

「別にかまいませんよ。」

「剽脈に剽を流した状態を見せてほしいんですけど。」

「それはかまいませんがなぜですか？」

「僕は誰にも剽を流してもらっていないため皆ほど剽脈を感じられていません。」

その為、サヴァリスさんが剽を流しているところを見て真似しようと思ったんです。」

「なるほど。」

確かにレイフォンが流してはいても流してもらっていませんからね。」

それでは裏庭に行きますか。」

「よろしくお願いします。」

王宮裏庭：

レイフォンとサヴァリスが向かい合っていた。

「それでは始めますがいいですか？」

「始めてください。」

サヴァリスが全身の剽脈に剽を流し始めた。

レイフォンは剽の流れを見ることに集中した。

その状態をサヴァリスは5分ほど続けた。

「こんな感じでいいかい？」

「ありがとうございます。」

「別にこのくらいのことはかまわないよ。」

それで、これからどうするんだい？」

「サヴァリスさんの剽の流れを再現してみようと思います。」

「そうかい。」

なら僕も付き合おうよ。」

「いいんですか？」

「かまわないよ。」

それに、何かあったときに君を止めるためにもね。」

「なるほど。」

確かにそうですね。」

ありがとうございます。」

レイフォンはサヴァリスに礼を言って先ほど見たサヴァリスの剽の流れを再現し始めた。

そして、サヴァリスはレイフォンに聞いた剽を見るために剽をレンズのようにして目に集めだした。

『大きな剽脈は骨にそって存在していた。

そこから先は少しずつ剽の流れを確かめていくしかないか。』

『剽のレンズはこんなものでしょう。

後は厚みと枚数の調整ですね。』

二人は冷静に訓練を分析していた。

そして、二人が訓練を始めて30分が経った。

「できた。」

「こつということですか。」

レイフォンは剽脈を今まで以上に理解することができ、サヴァリスは剽の流れと剽脈を見ることができるようになった。

「サヴァリスさんは何をしていたんですか？」

レイフォンはサヴァリスが何をしているのかがわからなかったために質問した。

「剽を見る訓練をしていたんですよ。

この技術はいいね。

剽を見ただけで理解できるというのは便利だ。

「これができるようになれば剋技を習得するのは簡単ですね。」

「確かに剋の流れを見ることができれば剋技を習得するのは簡単ですよ。」

「後は自分に合わせればいいだけですからね。」

「それに、これには他の使い方もできそうですね。」

「他の使い方ですか？」

「ええ。」

例えば、今まで以上の視力を得ることもできます。」

「そうなんですか？」

「ええ。」

ただ、戦いの中でこれを行おうと思えばこの技術を当然のように使いこなせるだけの技術が必要になりますけどね。

これからの戦いが楽しみですよ。

この技術をどのように活用するのかわかると戦い方が大きく変わるでしょうからね。」

「そうですね。」

それは良かったですね。」

「ええ。」

本当に楽しみですよ。」

サヴァリスは心のそこから喜んだ。

そして、二人は自分の部屋へと帰っていった。

それから2時間ほどが経った。

とある病院の一室：

「あらこれは。

陛下に報告しなければいけませんね。」

都市外を監視していたデルボネが見つけたものを報告しようとしていた。

王宮アルシェイラ執務室：

「はあ、めんどくさいわね。

とは言え、カナリスは今日は使い物にならないしね。

とつと終わらせてルシヤのところに行こうかしら。」

執務をこなしながらアルシェイラはそうつづばやいた。

「陛下都市に向かってくる汚染獣を発見しました。」

「数と種類は？」

「老性体の1期が2匹、2期以降が1匹です。」

「老性体が複数で？」

「はい。」

「そう。」

市民に避難勧告を出すように連絡と全部芸者にはシエルターの護衛をするように伝えて。

それから、サヴァリスとレイフォンには会議室に来るようにと。」

「わかりました。」

「老性体が複数表れるなんてね。」

もしかしたら私たちの戦いが近いのかしらね。」

天剣授受者会議室：

アルシェイラが部屋へ入ると都市外戦戦闘衣に着替えたレイフォンとサヴァリスがいた。

「今回は老性体が3匹現れたわ。」

その内1期が2匹、2期以降が1匹よ。」

その言葉を聴いてレイフォンは驚きを顔をに表し、サヴァリスはニヤリと笑った。

「その為、今回は私たちで3人で出撃するわよ。」

1期はそれぞれ片付けなさい。」

2期以降は私が片付けるから。」

「陛下も出るのですか？」

「そうよ。」

いつもなら天剣を出せばいいけど、今回はそうは行かないからね。それに、あんた達を失うのは惜しいからね。

後は万全を期すためよ。

それじゃあ行くわよ。」

「陛下はそのままですか？」

レイフォンは自分たちは都市外で戦うがアルシェイラはどうするのか疑問に思ったために質問した。

「私は外縁部からの一撃で片付けるわ。」

だからこのまま出るわ。

他に聞きたいことはない？」

「ありません。」

アルシェイラはレイフォンとサヴァリスを引き連れて外縁部へと向かった。

外縁部：

そこにはアルシェイラと天剣を復元したレイフォンとサヴァリスが佇んでいた。

「とつとと終わらせるわよ。」

アルシェイラはそう言っで右手を銃の形にした。

「バン！！」

アルシェイラがそう言っくと人差し指から衝剽が打ち出され、2期以降の老性体を一撃のもと葬った。

「後はおんたたちの仕事よ。」

そう告げた。

「それじゃあ僕たちも始めますか。」

「そうですね。」

早く終わらせましょう。」

そう言っで二人は老性体へと向かっでいった。

剛力徹破・咬牙

閃断

グチャ

スパツ

サヴァリスの剽技が老性体の頭をつぶし、レイフォンの剽技は老性体を真つ二つに切り裂いた。

「おや？」

「エッ!！」

「へえ。」

サヴァリスとレイフォンは驚き、アルシエイラは感心した。
なぜなら、サヴァリスとレイフォンといえども老性体1期を一撃
で今まで倒せたことがなかったためだ。

「二人ともとても強くなりましたね。」

その光景を念威端子を通して見ていたデルボネがアルシエイラに
そう声を掛けた。

「そうですね。」

剋量が多くなったのもあるでしょうけど、剋脈をはっきり認識で
きるようになったから技の威力も上がったみたいね。

これは嬉しい誤算だね。」

アルシエイラは笑顔でデルボネに返事をした。

「そうですね。」

これからの戦いが少しでも楽になりますね。」

「そうですね。」

でももっと強くなってもらわなくちゃね。」

こうして老性体との戦闘はあっけなく終わった。

第12話 ピンチ?いいえ普通です!! (後書き)

原作では天剣授受者の老成1期との戦闘シーンがなかったため自分なりに考えて書いてみましたがいかがだったでしょうか?

次回からはバグキャラ化した天剣授受者たちの話とルシヤのダイトメカニックについてを書こうと思っています。

第13話 修行・新たな発想（前書き）

投稿が遅くなってしまい誠に申し訳ありませんでした。

今回の話は前回の話と同日の内容となっています。

内容としてはルシヤの修行について手を一応書いたつもりです。

第13話 修行・新たな発想

第13話 修行・新たな発想

ロイヤー錬金鋼工房：

工房内には工房の主であるロイヤーとその弟子になったルシヤがいた。

「それぞれのダイトの特性は知っておるな？」

ロイヤーはダイトメカニクを志す者ならばだれしもが知っていることを確認の意味をこめてルシヤに聞いた。

「はい。」

ルシヤはロイヤーの目を見ながら答えた。

その姿はロイヤーが教えてくれたことや些細な動作すらも見逃さず身につけようとしているようであった。

「ならばよい。」

それならばダイトの作り方については知っておるか？

ダイトの作り方などは普通のダイトメカニクには必要のないことじゃが知っているのと知らないのでは調整技術に天と地ほどの差が出る。

それゆえにお前さんにはこれからダイトの作り方について覚えてもらおう。

わしの教え方は厳しいが、それでもよいか？」

ロイヤーは不敵な笑顔でルシヤに問うた。

「覚悟の上です。」

よろしく願います。」

一片のよども迷いもなくルシヤは返事をした。

その姿を見たロイヤーは

『お前ならばあいつのように狂気にとらわれることなく武者が実力を最大限発揮できるダイトを作ることすらできるかも知れんのだ。いや、それだけでなく既存のダイトの概念すら超えた天剣に並ぶダイトすら作ってしまうかも知れんのだ。』

と心の中で考えていたが、まさか自分がそのことの証言者となるとは考えてもいなかった。

「まずはダイトが生成されるまでの流れを説明する。」

到制御部とその周りを覆っておる各特性を持った金属元素などを合わせることによりダイトが作られておる。

そして到の受容総量を決めているのが各特性を持った金属や有機物などじゃ。

作業の流れとしてはこんなもんじゃが何か質問はあるかの？」

「その作業をしているのは全員ダイトメカニックの方なのですか？」

「当然そうじゃ。」

ダイトを作るからの。」

「ではダイトの剉の受容総量を増やすためには金属などの量を多くすればいいのですか？」

「確かにそうすれば受容総量は増えるが、同時に総重量が増えることとなる。」

そのことから使用者である武芸者と念威線者にとって使いやすい重さと受容総量が今の状態となっており。

それゆえに長く新しいダイトが作成されることがない。

作られていたとしてもまともに使用することができないから知られてはいない。」

「それでは現在の受容総量は材料の受容総量と同じなのですね。」

「そうじゃ。」

新たなダイトを作るならば新たな材料を見つけるか斬新なダイトの生成方法を見つけるしかないじゃろうな。」

「それならば材料に受容総量ぎりぎりの剉を込めた状態で生成した場合はどうなるのですか？」

「剉を込めた状態で生成をか？」

しかしダイトメカニックでは剉を込めることはできん、ましてやぎりぎりの剉を込めることなど無理じゃ。」

「そんなことはありませんよ。」

確かに剉脈を持たない人はダイトに剉を注ぐことはできません。

なら、剉を注ぐことのできる武芸者の人に頼めばいいんです。」

「確かに武芸者に頼めば注いでくれるじゃろうが、ダイトの生成するのには武芸者に頼るといふのはな。」

それに、ぎりぎりの剉を込めるとなると一人では無理じゃ。
複数人に頼めたとしても剉同士が反発してしまうためほとんど意味はないぞ。」

「だから一人で込めることができる人に頼めばいいんです。
この都市にはそれができる人たちがいますからね。」

「それは陛下や天剣授受者のことか。
確かにあの方々ならばその程度簡単にこなしてしまうじやろうが、
そのようなことで煩わせるのはいかなものかの。」

「やったことがないのであれば、やる価値はあるのではないでしょう
うか？」

「そうかもしれませんが、それをどうやって伝えるんじや？
わしが王宮に赴いて伝えたとして陛下にそのことが伝わるかわか
らんぞ。」

「そうなんですか…。
それなら、レイフォンに頼んでみます。
レイフォンなら陛下に直接伝えることができますから。」

「なるほどな。」

確かに天剣授受者であれば陛下に直接伝えることができるな。」

二人はタイトの新たな作り方の原案をレイフォンからアルシエイ
ラに伝えてもらうことを決めた後、さらに細かいことについて話し
合った。

そして二人はタイトの調整についての話を始めた。

「ダイトの調整方法は身につけておるようじゃがダイトメカニクはそれだけでないかん。

それは理解しておるな？」

「はい。」

メカニクは様々な形状でその人に合ったダイトで調整するといふことですね。」

「そうじゃ。」

しかし嬢ちゃんは形状は刀だけ、ダイトはアイアンダイトのみ。」

「はい。」

「何そんなことは気にするな。」

経験がないのならこれから積みばいい。」

「ありがとうございます。」

ルシヤはロイヤーの不器用な優しさを感じたためお礼を言った。

「まずはアイアンダイト以外のダイトを刀に調整してもらおうぞ。」

そういうとロイヤーはアイアンダイト以外のダイトをルシヤの前に置いた。

「それでは初めてもらおうかの。」

「はい!!--」

ルシヤは一つ一つのダイトの違いを意識しながら調整を行った。

そして、すべてのダイトの調整が終わった。

「終わりました。」

「そうか。」

「なら今日はここまでだ。」

「えー!!」

「調整したダイトはどうするんですか？」

「決まっておろう。」

「家で最終調整をして来い。」

「ここにはダイトを使える者がおらんのかな。」

「それはそうですが、レイフォンでいいんですか？」

「構わんよ。」

「何せお前にダイトごとの違いを理解させるためなんじゃからな。そのためには調整しなれたもので行うのが一番じゃからな。」

「わかりました。」

「明日までに微調整をして来ればいいんですね。」

「期日は明日までじゃ。」

「いや、今日帰ってこなければ明日中に調整を終わらせてもってこい。」

「今日は帰ってもいいぞ。」

「ありがとうございます。」

ルシヤは自分が調整したダイトを持って帰った。

孤児院食堂：

ルシヤが帰ってくるとそこには子供たちにお菓子を作っているレイフォンとリーリンがいた。

「おかえりなさい、ルシヤ姉さん。」

「おかえり、ルシヤ姉さん。」

リーリンとレイフォンがルシヤが食堂に入ってきたために声をかけた。

「ただいま、二人とも。」

レイフォン後で私の作業室に来てくれる？」

「持って帰ってきたダイトのこと？」

レイフォンはアイアンダイト以外のダイトを持って帰ってきたルシヤの姿からそう聞いた。

「そういうことよ。」

後で調整をしたいからね。」

「わかったよ。」

終わったら行くから。」

「レイフォンはルシヤ姉さんの手伝いをしてきていいわよ。」

今まで黙っていたリーリンがレイフォンにそう言った。

「ルシヤ姉さんの作業を手伝えるのはレイフォンしかないんだから行ってきなさい。」

「こっちはもう少しで終わるんだから。」

そう言ってリーリンはレイフォンの背中を押した。

「でも…。」

「いいから行くの…!」

そして、レイフォンはリーリンに食堂から追い出されてしまった。

「それじゃあ、今からお願いね。」

「うん。」

二人はルシヤの作業室へと向かった。

ルシヤの作業室：

「それじゃあ、今日中にこのダイト全部微調整するわよ。」

「ぜ、全部…!」

「そう、全部よ!!」

これ全部明日までに微調整するのが私に出された課題なの。だからお願い協力して。」

ルシヤは自分がむちゃを言っていることを理解しているためレイフォンに頭を下げた。

「頭をあげてよ、ルシヤ姉さん。」

僕にできることなら何でも協力するから。

ね。」

「ありがと、レイフォン。」

「始めよう、時間がないんですよ。」

「よろしくね。」

そして二人はリーリンが夕食の時間になっても出てこなかったため呼びに来るまで調整をしていた。

孤児院食堂：

「ほんとにもう二人ったら!!」

二人が時間を忘れるくらい夢中になっていたことにリーリンは不機嫌になっていた。

自分には二人のように時間が経つことすらも忘れて夢中になれるようなことがないということに気付いたからである。

なぜなら、このままでは自分だけが置いて行かれてしまうのではないかと焦りを隠すためである。

「ごめんねリーリン。」

「今度からは気をつけてね。」

『私も二人みたいに自分のやりたいことを見つけたいな。私が好きなことって何だろ…。』

口では簡単な注意だけで済ませたが、心の中で自分の今の状況を変えたいと焦っていた。

「それではいただきます。」

今まで黙っていたデルクがそう言った。

「いただきます。」

それに子どもたちが元気良く返事をした。

『なにかあったのかしら。』

リーリンも一人で抱え込むところは養父さんやレイフォンと同じなんだから…。

でも、もう少し様子を見たほうがいいんでしょうね。』

ルシャはリーリンのちょっとした変化を見逃さなかった。

「それじゃあレイフォン続きをするわよ。」

夕食を食べ終わった二人は残りの作業をするために作業室へと向かった。

ルシヤの作業室：

「続きを始めるわよ。」

ルシヤがレイフォンにそう声をかけた。

「早く終わらせてしまおう。」

レイフォンはルシヤにそう返した。

そして、2時間ほどかけ残りのダイトの微調整を終わらせた。

「お疲れ様ルシヤ姉さん。」

「レイフォンもありがとう。」

それにしてもダイトが違うところも調整に違いが出てくるなんてね。」

「そうだね。」

基本的な流れは変わらないのに微妙に違うんだね。」

二人は作業を問うて感じたことを口にした。

「そうだレイフォン、もうひとつお願いがあるんだけど。」

「なに？」

他にも調整するダイトがあつたの？」

「そうじゃないの。」

陛下に直接渡してほしいものがあるの。」

「？」

渡すくらいはいいけど、物にもよるよ。」

「渡してほしいのは今日私とロイヤール先生で考えた新しいダイトの作り方についてなの。」

「それならルシャ姉さんたちが王宮に持っていけばいいんじゃないの？」

「それでもいいんだけど、陛下の目に留まらないかもしれないからね。」

本当はこんなことしちゃいけないってわかってるの。」

でも、レイフォンが天剣を手にするまでダイトで苦労していたこともあつたからどうしてもそんな人がいないようにしたいの。」

でも、無理には言わないわ。」

だから持つて行きたくなければ持つていかなくてもいいわよ。」

「もし僕が持つていかなかつたらどうするの？」

「その時は私が王宮に持つて行くわ。」

「それくらい僕が今から持つて行ってくるよ。」

「でも…」

「それくらい大したことじゃないからね。」

それに、姉さんの役に立てるんだからうれしいんだ。」

「ありがとうレイフォン。」

それじゃあこれを陛下に渡してほしいの。」

そう言っつてルシヤは錬金鋼工房でロイヤールと共に書いたノートを渡した。

「うん。」

それじゃあ行つてきます。」

そして、レイフォンは渡されたノートをアルシエイラに渡すために王宮へと向かった。

王宮アルシエイラ寝室：

部屋の主がベットで横になっていた。

コンコン

部屋のドアがノックされた。

「なにかあったのレイフォン？」

寝ていたアルシエイラはドアがノックされる前からレイフォンが近づいていることに気づき起きていた。

しかし、レイフォンが何をしようと対処するだけの自信があった

ためレイフォンが行動を起こすまで何も行動をしなかった。

「寝ていたところすみません。」

「どうしても陛下に見ていただきたいものがありましたので。」

「入りなさい。」

「失礼します。」

そう言ってレイフォンは部屋へと入った。

「私に見せたいものって何？」

「カナリスじゃまずいものなの？」

「カナリスさんでもいいとは思いますが陛下に見てもらおうほうが確
実だと思ったので。」

「まあいいわ。」

「それで見せたいものって何？」

「これです。」

そう言ってレイフォンはルシャから渡されたノートを出した。

「ノート？」

「何か課題を出してたかしら？」

アルシェイラはレイフォンに勉強での課題を出したのかを思い出
そうとした。

「いえ、課題ではありません。」

それに、これはルシヤ姉さんからです。」

「ルシヤから？」

思わぬ人物の名前が出てアルシェイラはいぶかしんだ。

「はい。」

「もしかして、愛の告白かしら。」

「いいえ違います。」

ルシヤ姉さんは新しいダイトの生成方法を纏めたノートとのことです。」

レイフォンはノートをアルシェイラに渡した。

「新しいダイトの生成方法？」

アルシェイラは上級学校でダイトについても学んだがゆえにどんな方法なのだろうと思った。

「それでは失礼します。」

レイフォンは自分の役目が終わったと考え帰ろうとした。

「何言ってるの。」

私を起こしたんだからあなたにも付き合ってもらいわよ。」

そう言いながらアルシェイラはレイフォンのポニーテイルをつか

んだ。

「やっぱりそうですよね。」

「当然よ。」

そう言いながらもアルシェイラはノートを読んでいた。

「ここに座りなさい。」

レイフォンのポニーテイルから手を離し自分の横に座るようにつべつとをたたいた。

「この部屋には座れるものはこれしかないんだからさっさと座りなさい。」

アルシェイラが言ったようにこの寝室にはベット以外の家具は存在しない。

「あんただけを立てさせておくわけにいかないでしょ。それとも私に強制的に座らされたい。」

そう言ってアルシェイラは左手で拳を作った。

「わ、わかりました、座ります。」

レイフォンはその拳を見てすぐにアルシェイラの横へと座った。

「最初からそうすればいいのよ。」

それにしてもこの方法は面白いわね。」

「確かにこんな方法が実行できるのはグレンダンくらいのものよね。」

「確かあんたたちは昼には練習を切り上げてたわね。」

アルシェイラはレイフォンとサヴァリスの訓練について聞いてきた。

「はい。」

昼からは各自で自分の改善点について集中的に訓練しています。」

「なら、昼からはダイト生成所でルシャたちの考案したダイトの生成方法に協力すること。」

「これは私からの命よ。」

「それは僕だけですか？」

「そんなわけないでしょ。」

「天剣授受者全員よ。」

「陛下そんなに短期間に天剣授受者を王宮に何度も集めて大丈夫なんですか？」

その言葉を聞いてアルシェイラは驚いた。

「なんでそんな顔してるんですか？」

「あんたの口から天剣授受者を短期間で集めて大丈夫、なんて出るとは思わなかったからね。」

あんたもちよつとは成長してるのね。
勉強を教える身としてはうれしいかぎりね。」

そう言いながらアルシエイラはレイフォンの頭をなでた。

「ちよつとやめてください。」

そう言ってアルシエイラの手を振り払った。

「さて、もう帰ってもいいわよ。」

それと、このノートはしばらく私が預かるわ。
そのことをルシヤに伝えておくように。」

「わかりました。」

それでは失礼します。」

そう言ってレイフォンは部屋を出た。

レイフォンが王宮を出たことを感じたアルシエイラは窓へと近づき月を見ながら呟いた。

「確かにこんなこと普通は考えないわね。」

通常のダイトでは全力を振るえない者のためだけのダイトを作るうなんて。

「これも私たちの戦いが近いことへの知らせなのかもしれないわね。」

『彼女と私の剣を何とかしなくちゃね。』

先ほどまでいた剣のことを思い出した。

「あの子には今まで以上に強くなってもらわなくちゃ彼女を守ることはできない。」

あの子をどう鍛えようかしらね。

最低でもリテンンスを超えてもらわなくちゃね。」

そう言いながらレイフォンを強化するためのことを考え始めた。

第13話 修行・新たな発想（後書き）

今回の話はルシヤの修行について書いたつもりですがいかがだったでしょうか？

今回は今回の話で出てきた新たなタイトの作り方によって新たなタイトが登場しますのでご期待ください。（たぶん…。）

第14話 想いの片鱗（前書き）

話自体はとても短くなっています。

ほんの少しだけ心の声を書いてみました。

第14話 想いの片鱗

第14話 想いの片鱗

孤児院食堂：

朝食を食べ終え、食器をかたずけている三人がいた。

「ルシヤ姉さん、陛下が新しいタイトの作成をするそうだよ。」

レイフォンは昨日の夜アルシェイラが言っていたことをルシヤに伝えた。

「それ本当!!！」

そのことを聞いたルシヤは驚いた。

「なんでそんなに驚くの？」

驚いたルシヤと目を見開いているリーリンにレイフォンは問いかけた。

「なんでって…。」

確かにレイフォンに持って行ってもらったけど、翌日にそれを試すなんて思っただけだからよ!!！」

ルシヤは何が起きているのか分かっていないレイフォンに怒鳴っ

た。

「レイフォンも少し一般常識を身につけてほしいんだけど…。」

あきらめた顔をしながらリーリンはレイフォンに言った。

「僕は常識的だと思うんだけど…。」

レイフォンは自分の周りにいる天剣授受者たちを思い出した。

そのため、自分は常識人だと考えていた。

しかし、天剣授受者といえば武芸者としての実力が飛びぬけているために、人としての常識を忘れていくことが多いのである。

「レイフォン、天剣授受者の皆様を比較の対象にするのはやめなさい。」

あなたたちは武芸者としても人としても飛びぬけているんだから。

「

「なんでみんなを比較対象にしたことがわかったの!!」

レイフォンは自分が天剣授受者を比較対象にしたことをなぜルシヤがわかったのかと驚いた。

「聞き返すところがそこなんだ…。」

リーリンは疲れたようにそうレイフォンに言った。

「だって、リーリン。」

僕はルシヤ姉さんに比較対象を言わなかったんだよ!!」

「言わなくてもだれでもわかるわよ!!」
あなたの周りにいる人たちって言ったら天剣授受者以外にだれがいるのよ!!」

リーリンはレイフォン理解能力のなさを思い出したため、怒鳴りながら返した。

「うっ…。」

「ね？」

天剣授受者以外って言ったら私たち家族しかいないでしょ？
あんたが私たちを比較対象になんかしないってことわわかってるんだから残りはと考えれば誰だってわかるのよ。」

ルシャは小さな子供を諭すように優しくレイフォンに教えた。
しかし、ルシャの目はかわいそうな人を見るような瞳であった。

「レイフォンももつと色々な人と付き合ってたほうがいいわよ。
私たちのことばかり心配するんじゃないかと自分のことにも気を配って。」

リーリンは悲しそうな顔をしながらレイフォンにそう伝えた。

「そんな顔しないでリーリン。
僕はリーリンにそんな顔をしてほしいんじゃないんだ!!」

レイフォンは自分が強くなろうと考えた時のことを無意識に口に
してしまった。

「えっ!!」

「へえ〜。」

リーリンは顔を赤くしてレイフォンの顔を見ており、ルシヤは弟の意外な姿が見れたとニヤニヤしながらレイフォンを見ている。

「い、いやその…。」

そ、それじゃあ行つてきます!!」

レイフォンは顔を赤くしてルツケンス修練場へと向かった。

「よかったわねリーリン。」

「からかわないでよ姉さん!!」

ルシヤは顔を赤くしているリーリンにそう声をかけたが、リーリンは自分をからかっていると感じてしまった。

「からかってなんかないわよ。」

心から喜んでるのよ。

レイフォンは強くなるうとしたのはリーリンのためだったんだからね。

でもねリーリン、レイフォンは天剣授受者だということを忘れちゃだめよ!!」

独り占めできるとは限らないわよ。」

「レイフォンに限って…。」

「天剣授受者だけあって憧れている子は大勢いるわ。」

その中の誰かが迫ったら断れるとは思えない。

そうは思わない？」

リーリンの話を遮ってルシヤはリーリンに問いかけた。

「思う…。」

「でしょ？」

それにもしリーリンが付き合いだしたとしてもレイフォンを独占するのは難しいと私は思ってるわ。

だからレイフォンと付き合うなら覚悟をしておくのよ。」

「えっ！…！」

「当然でしょ。」

強い武芸者は子供を残す風潮が強いんだから。
天劍授受者ならそれ以上よ。」

「…。」

リーリンは今まで一緒にいたレイフォンがこれからも一緒にいられると思っていた。

しかし、その考えをルシヤに否定された。

「まあ、それだけレイフォンを強く思っている人がいなければ独占できるわよ。」

でも、あなたと同じくらいレイフォンを思っている人が現れたら譲るんじゃないかってその人と共にレイフォンを支えていくのよ？」

ルシヤが姉としてではなく、母のような顔をしてリーリンに話しかけた。

「姉さん…。」

リーリンはルシヤが自分たちに幸せになって欲しいと考えていることを知り涙を流した。

「さあ、片づけるわよ。」

そう言ってルシヤは後片付けを始めた。

ルツケンス修練場：

「何かあったの？」

レイフォンは道場に入るなりティアレスにそう声をかけられた。

「えっ!!！」

レイフォンは朝のことをティアレスが知っているのかと思い驚いた。

「何か困ったことがあったの？」

「いえ何もありませんよ。」

レイフォンはティアレスが朝のことを知っているはずがないと思
いなおし冷静に対応した。

「そう？」

何か困ったことがあったら相談してね。」

「ありがとうございます。」

「どうしたんですか母上？」

やけにレイフオンのことを気にかけているようですが？」

「当然じゃない！！」

若いんだから色々悩むことがあるわ！！

それを聞いたり助けたりするのは大人の義務と私は考えているから
「よ。」

「その割にはゴルネオに厳しいと思いませんか？」

「当然よ！！」

あの子は武芸者として半人前にもなっていないのよ。

中途半端な状態で手を貸すことはないわ。

もし甘えるようなら私の手で楽にさせてあげます！！」

その言葉を聞きレイフオンは

『やっぱりサヴァリスさんにそっくりだ。』

と思った。

「確かにゴルネオは武芸者ですらありませんからね。」

「そついうことです。」

でもレイフォン君は武芸者として自分の道を歩いてるからね。」

「確かにゴルネオとレイフォンを同じと考えること自体が間違っていましたね。」

「そうですか？」

レイフォンは二人の話を聞いていて家族なのにそれでいいのかと思ったためそう口にした。

「そんなものじゃないですか？」

「人それぞれよ。」

と二人は答えた。

そして、三人は訓練を始めた。

そんな三人の会話を聞いていたゴルネオは修煉場を出た。

「やはり俺はこの家に必要ないのか…。」

ゴルネオはいつも感じていたことをついに口にしてしまった。そして、そんなゴルネオに声をかける者がいた。

「そんなことはないぞゴルネオ。」

お前はこれから強くなるんだ。

そして一門を背負いグレンダンのために戦うんだ。」

「ガハルドさん!!!」

「落ち込んでいるからといって気を抜きすぎだぞ。俺が近付いてきていることに気づけないとはな。」

修練場から抜け出したゴルネオにガハルドはそう声をかけた。

「す、すみません。」

「まあ、偶にはそんなこともあるさ。」

「俺には一門を背負うことなんてできません!! 武者者ですらない俺では…。」

「なら、強くなればいい。」

「それだけだろ?」

「で、でも…。」

「やってもいないのに弱気になってどうする!! そんな状態ではできることもできないぞ!! お前はそれでいいのか!!」

「嫌です!!」

ゴルネオは今までは心の中だけに秘めていた思いを口にした。

「そうだ!!」

「その意気だ!!」

「修練場に戻って訓練を始めるぞ!!」

「はい!!」

よろしく願います。」

二人は修練場へと戻って行った。

『お前みたいな奴でもサヴァリス様に近づく役には立つだろう。』

第14話 想いの片鱗（後書き）

今回の話はどう立ったのでしょうか？

今回は新たな剣の誕生について書こうと思っています。

第15話 新たなダイト・授受者決定（前書き）

新たなダイトについてとその持ち主についての話です。

第15話 新たなダイト・授受者決定

第15話 新たなダイト・授受者決定

天劍授受者会議室：

そこには11人の天劍授受者が集まっていた。

「皆集まってるわね。」

アルシェイラが部屋に入ってくるなりそう言った。

「陛下このたびの招集はどのような内容なのでしょう？」

カナリスが部屋へ入ってきたアルシェイラに疑問をぶつけた。

「近頃の陛下は天劍授受者を全員王宮に招集することが多いのではないのか？」

テイギリスもカナリスに続いてそう問いただした。

「私もそう思います!!」

陛下はいったい何を考えなのですか!!」

カルヴァーンは最近のアルシェイラの行いをたしなめようと語気を強めて問い詰めた。

「このグレンダンの存在意義であり、私やお前たち天剣授受者の存在意義そして、この世界を駆けた戦いに備えてよ。

私はその事を考えて行動しているわ。

それが気に入らないのなら私の剣には必要ない。」

アルシェイラの表情にも声にも感情をこめずにそう言い切った。

レイフォンは今日全員が集められたのが姉が提出した新しいダイトの作成方法を試すためだと知っているため、天剣授受者たちの態度を見て内心あせっていた。

「なら俺は文句はない。

戦いたくないと思える地獄と思える戦場のためならな。」

窓際でタバコをすっていたリントンスがグレンダンに来たときアルシェイラから聞いた事を言った。

「どういうことですかリントンスさん？

そんな楽しいことが待っているんですか！！

なら僕も陛下にどこまでも着いていきますよ、命続く限り。」

今までは興味なさそうにしていたサヴァリスだがリントンスの言葉を聴いて目を輝かせてリントンスに聞いたのだした。

「俺がグレンダンに来たときにクソ陛下から聞いたことだ。

続きは向こうに聞け。」

「そうね。

ついでだからそのことについてもあんた達に話しておくわ。

とは言っても簡単なことになるけどね。」

「詳しく話よクソ陛下!!」

バーメリンがそう言った。

「残念だけど、私も詳しくは知らないのよ。」

だから私が知っていることをあんた達に話すのよ。」

「ならワシらはそれを黙って聞くとしようかの。」

ティギリスはソファーに座ったままそう言った。

「そつだよ。」

まずは話を聞いてからにしようよ。」

リヴァースは全員にそう言った。

「リヴの言う通りね。」

カウンティアがリヴァースに同意した。

「それじゃあいいわね。」

アルシェイラは天剣授受者たちに問いかけた。

そして、全員が頷いた。

「まず、このグレンダンはイグナシスと戦うために存在しているの。武者者はアイレイン・ガーフィートという男の能力の模造品。念威操者はニリスという女性の能力だそうよ。」

この二人がイグナシスが作った兵器とその能力を使って戦ったそうよ。」

そして、イグナシスとその兵器を月に封印したそうよ。
でも、その封印はいつか解ける。
その為にこの都市も私たちも存在しているよ。」

「と言うことはイグナシスとその兵器と戦うということが陛下の言う地獄のような戦場ということですか？」

サヴァリスが楽しそうにアルシェイラに聞いた。

「ええそうよ。」

「最高の戦場ですね。」

「戦闘狂が。」

「サヴァリスらしいのう。」

「どんな戦場だろうと関係ない。
敵は倒す。
それだけだ。」

今までソファーで寝ていたルイメイがそう口にした。

「俺は良い女さえいればそれでいい。」

トロイアットはそう言った。

「あなたは女性のことしか考えられないのですか？」

カナリスはトロイアットを覚めた目で見ながら言い放った。

「まあね。」

「君も一緒に一夜を共にする会カナリス？
最高の夜をプレゼントするよ。」

「あなたと一夜を共にするくらいなら死んだ方がましよ。」

「それは残念。」

「あ、あのそつという話は他でした方がいいんじゃないですか？
それに、陛下の話が終わっていないんじゃない？。」

自体を見守っていたレイフォンがそつ口にした。

「私の話はこの程度よ。」

後はこの都市の名前はグレンダンじゃないって事くらいかしら。」

「……………は？」「……………」

アルシェイラの言葉を聴き天剣授受者は驚いた。

「どついうことですか陛下！！」

いち早く立ち直ったカナリスがアルシェイラに聞いた。

「言ったとおりよ。」

グレンダンは世界をかけた戦いのために作られた名も無き都市。
そして、廃貴族のグレンダンがこの都市を動かしているから今の
名前になった。

それだけよ。」

アルシェイラは事も無げに言い切った。

「廃貴族？」

陛下廃貴族とは何ですか？」

レイフォンは聞きなれない言葉について聞いた。

「？」

天剣授受者になったときに話さなかった？」

「聞いていません。」

「そう。」

廃貴族は汚染獣によって都市を破壊され憎しみによって電子精霊が変化した成れの果てよ。

心の強いものに取り付いて力を与える存在。

とは言え、その力を制御できずに廃貴族にのっとられる事がほとんどよ。」

「はあ…。」

「まあ、その程度に覚えておきなさい。

たいして重要でもないからね。」

「陛下そろそろ全員を集めたことの説明をしてはどうですか？」

デルボネが本題を話すようにと促した。

「それもそうね。」

今日あなた達に来てもらったのは新しいダイト生成法を試すために来てもらったの。

ダイト生成所へ行くわよ。

準備も終わってるだろうからね。」

そういつとアルシェイラはダイト精製所へと向かった。

王宮ダイト生成所：

そこにはダイトメカニックたちが集まっていた。

「お待ちしておりました。」

責任者がアルシェイラと天剣授受者が来たため挨拶をした。

「準備はできてる？」

「はい。」

いつでも始められます。」

「そう。」

なら今から始めるから用意してくれる？」

アルシェイラの言葉を聴きメカニックは天剣授受者に二つのダイトの原料を渡した。

「今からあなた達にしてもらうのはそのダイトの原料の一つには受容総量の半分ともう一つにはぎりぎりまで剉をこめてもらうわ。」

アルシエイラは天剣授受者たちにこれから行つことを説明した。

「なぜ二つなんですか？」

レイフォンはなぜそんな手間のかかることをするのかをアルシエイラに聞いた。

「あんだねえ…。」

その二つでどんな違いが生まれるのかを調べるために決まってるでしょ！！」

「それくらい自分で気づけよバカが。」

レイフォンは天剣授受者たちからあきれた目で見られた。

「すみません。」

その場の空気に耐えかねてレイフォンは謝った。

「それじゃあ初めて。」

アルシエイラは天剣授受者たちに作業を始めるように言った。

天剣授受者たちはダイトの原料に剉をこめた。

そしてそれを受け取ったメカニックがいつも道理にダイトの生成を行い始めた。

1時間が過ぎダイトが完成した。

「完成しました。」

メカニックたちは完成したばかりのダイトを持ってきた。

「それじゃあ、行くわよ。」

そう言ってアルシェイラは生成所をでて行った。

それに続くように天剣授受者、作成したばかりのダイトを持ったメカニックと各計測機器を運ぶメカニックが続いた。

天剣調整室：

メカニックたちは早速ダイトを天剣授受者の天剣と同じ設定をダイトに調整した。

「それでは復元してください。」

そういわれて天剣授受者たちはダイトを復元した。

「へえ〜。」

「ほお〜。」

「なるほど。」

天剣授受者たちは復元したダイトが今までのダイトとの違いに驚いていた。

「どうなのあんたたち。」

アルシエイラは天剣授受者たちに感想を聞いた。

「どちらも今までよりも受容量が増えています。

半分ほどしかこめなかつた方は多少あがつた程度ですが、ぎりぎりまでこめた方は倍近くまで増えています。

それでも私たちの全力を受け止められません。」

アルシエイラの問いにカナリスが答えた。

そして、他の天剣授受者たちはうなずいた。

「それでもやつた価値はあつたみたいね。」

「陛下よろしいでしょうか？」

「何サヴァリス。」

「このダイトを一ついただきたいのですがよろしいですか？」

「何に使うの？」

アルシエイラは天剣を持つサヴァリスが新たなダイトを求めるところに疑問を感じたためそう問いかけた。

「母上の新たなダイトにしようと思っただけです。」

サヴァリスも隠すようなことでもなかつたため正直に話した。

「なるほど。」

彼女の今の度量なら普通のダイトじゃ全力を出せないわね。

いいわ、もって行きなさい。

ただし、調整はここで行うこと。
いいわね。」

「はい。」

「それで陛下、新たなダイトの名前は何にするのかのう？」

ティグリスがアルシェイラに聞いた。

「そうねえ〜。」

天剣ほどではないけど今までのダイトと一線を画するものだから
呼び名も新しいものにしなくちゃね。

そう考えると地剣なんてどうかしら。」

「陛下がそうおっしゃるならそれでよろしいのでは。」

カルヴァーンがそう答えた。

「じゃあ、そういうことこれからこのダイトは地剣よ。」

この瞬間新たなダイトの名称が決定した。

「それでは陛下私どもは地剣の新たな可能性を研究します。」

ここの主任であるメカニックがそう言った。

「ええ、頼んだわよ。」

それじゃあ、私たちは会議室に戻るわよ。」

アルシェイラがそう言い天剣授受者を連れて天剣授受者会議室へと戻っていった。

天剣授受者会議室：

「さて、地剣を誰に渡すかね。
新たなトーナメントでも作ろうかしら。」

アルシェイラは地剣を持つものをどう選ぶか考えていた。

「普通のダイトを使いこなせないものに地剣を持たせても意味が無
いと私たちは思っています。」

カナリスが天剣授受者たちの考えをアルシェイラに伝えた。

「それもそうなんだけどね。
とは言え、選定の仕方くらい決めておかなくちゃ拙いでしょ?」

「それならば、天剣授受者の推薦者に渡すというのはどうじゃ?」

ティギリスがそう意見した。

「うん…。」

まあ、それでいいか。

天剣授受者の推薦を受けたものをそれ以外の天剣授受者たちが見極める。

これでいきましょう。」

地剣授受者の選定方法がこうして決まった。

「それでは僕は母上を推薦しますよ。」

サヴァリスは早速ティアレスを地剣授受者に推薦した。

「レイフォンあなたはどう思うの？」

アルシエイラは見極め役をレイフォンに振った。

「僕ですか！！」

「当然でしょ？」

ティアレスの実力を知っているのはサヴァリスとあんなだけなんだから。」

「確かにそうですね。」

ティアレスさんなら地剣を使いこなすだけの実力があり、劉量も十分だと僕は思います。」

なので渡しても問題ないと思います。」

レイフォンは真剣な顔をしてアルシエイラに答えた。

「あなたがそういうなら問題ないでしょう。」

武芸に関しては嘘を言わないからね。」

今日最初の地剣授受者が決定した。

「地剣授受者には老成一期の討伐と複数期の老性体との戦いするとき天剣の補佐を任務とするわ。」

まあ、これからの地剣授受者の実力しだいで内容が変わるけど最初はこんなものでしょう。

それじゃあ、今日はこれまでよ。」

これにより、今日の集まりは終了した。

第15話 新たなダイト・授受者決定（後書き）

今回の話で天剣授受者たちの戦う相手について書いてみました。
如何だったでしょうか？

そろそろアルシェイラによるレイフォン改造計画を書こうと考えて
いますのでそちらもお楽しみに。

また、過去編がかなり長くなり申し訳ありません。

読んでいる人の中には早く過去編が終わらないかと考えている人が
いると思いますが、当分過去についての話になります。

大変申し訳ありません。

原作での不明なところを私なりに話を面白くするために書いていま
すのでご了承ください。

第16話 衝撃の真実（前書き）

更新が遅くなって申し訳ありませんでした。

今回の話はいろいろ悩んだために内容がまとまらなかったために遅くなってしまいました。

それと今回の話は短いですがご了承ください。

第16話 衝撃の真実

第16話 衝撃の真実

王宮謁見室：

部屋には王宮の主であるアルシェイラをはじめ、彼女の剣たる天剣授受者、各大臣とミンスそして、本日の主役がいた。

「ティアレス・ルツケンス前に。」

アルシェイラの横に控えていたカナリスがそう言った。

「はい。」

名を呼ばれたティアレスがアルシェイラの前に来て臣下の礼をとった。

「お前に地剣を授受する。」

私の剣となりて、この都市に仇名すもを倒す剣となり、都市を守る盾であれ。」

「はい。」

「それでは地剣を受け取りなさい。」

そう言ってアルシェイラはティアレスに地剣を渡した。

「お前にはこれから老性体1期との戦闘と老性体複数期に出撃する天剣の補佐をしてもらおうわ。」

「いいわね。」

アルシェイラはティアレスに地剣の役割を話した。

「大変申し訳ないのですが女王陛下にお願いがあります。」

ティアレスは臣下の礼をとったままアルシェイラに言った。

「何？」

「言ってみなさい。」

「ありがとうございます。」

「それでは言わせていただきます。」

「1年ほど私への出撃を見合わせていただきたいのです。」

「何だと貴様!!」

「天剣授受者に次ぐ者となり老性体と戦うことに臆したか!!」

「何を考えている!!」

ティアレスの言葉を聴き大臣たちはティアレスに罵声を浴びせた。

「静かにしなさい。」

アルシェイラは静かにそう言った。

「なぜ1年間の出撃を見合わせたいの？」

あなたが老性体との戦いに臆しているわけではないでしょ？」

アルシエイラはなぜティアレスが出撃を1年見合わせたいのかを聞いた。

「今の私では戦闘を行うことができない体だからです。」

「1年で体を直せるの？」

それにあなたが体を壊すようなことは無かったはずよ。」

「はい。」

体を壊したのではなく、新たな命を身ごもったからです。」

ティアレスから1年間出撃できない衝撃の真実が告げられた。

「なるほど。」

それなら仕方ないわね。

元気な子を産むのよ。」

「ありがとうございます。」

「良かったわね、サヴァリス。」

新しい弟か妹ができたそうよ。」

「そうですね。」

ゴルネオのような子で無ければいいですよ。

これで僕も心置きなくルツケン流を捨てられます。」

さらにサヴァリスからも衝撃の事実が語られた。

大臣たちは余りのことに言葉が出なかった。

「あんたが決めることだからね。

私は何も言わないわよ。」

「陛下今は授受式の最中ですので、続きは会議室ですればいいのではないですか？」

アルシェイラの横に控えていたカナリスがそう言った。

「それもそうね。

それでは天劍授受者と地劍授受者は会議室に来るように。」

こうして衝撃的な地劍授受式は閉幕した。

天劍授受者会議室：

その部屋にはアルシェイラと天劍授受者、そして今日よりメンバーに加わった地劍授受者であるティアレスがいた。

「おめでとうティアレス。

子供ができたって事は当分の間は訓練も休むんでしょ？」

アルシェイラがティアレスにそう言った。

「いえ、訓練は続けます。

サヴァリスのときがそうでしたから。

それに、ゴルネオのときは訓練しなかったせいで軟弱な精神の持

ち主になつたんだと私は考えていますので。」

ティアレスはアルシェイラの問いにそう答えた。

「と言うことは私は生まれる前から武芸との付き合いがあったんですね。」

サヴァリスは嬉しそうにそう言った。

「今度生まれてくる子供はゴルネオのような軟弱な精神の持ち主でなければ最低限いいです。」

後はサヴァリスみたいに武芸にしか興味が無いというところが無く、普通に異性に興味を持った武芸者であれば文句は無いのですが。

「そればかりは自分ではどうにもならないからね。」

「そうじゃのう。」

「こればかりはどうにもなりませんね。」

ティアレスにアルシェイラとティゲリス、そして念威端子越しにデルボネがそう返した。

「どんな子が生まれるのか楽しみにしていますよ、母上。」

「私ではなんとも言えないわね。」

それよりサヴァリス、ルツケンス流を捨ててどこに所属するの？

普通に考えればどこにでも所属できるでしょうけど、あなたを所属させればルツケンス流を敵にするようなことになるのよ？

そのあなたを入門させてくれるような流派なんてあるの？」

ティアレスはサヴァリスがこれからどこの流派に所属するのか気になっていたのでためその事を聞いた。

「ありますよ。」

ルツケンス流が何もいえないところはいくつかありますしね。

その中に私にぴったりの流派があったんですよ。

だからルツケンス流を抜けるんですよ。」

「へえ、あなたが求めるほどの流派がねえ。」

ちよつと興味深いわね。

どこの流派なの？」

「戦闘狂のクソ野郎を受け入れる流派なんてあるわけ無いだろうが。」

バーメリンが自分の思っていることを言った。

「バーメリンさんそんな汚い言葉を言っているといい人にめぐりあえませんかよ。」

デルボネがバーメリンに注意をした。

「死ねクソ婆。」

大きなお世話だ！！」

「それでどこの流派なのサヴァリス？」

確かにルツケンス流と同じくらいの歴史を持つ流派なら文句は言えないでしょうけどそんなところならあなたを受け入れられないですよ。

「アルシェイラがサヴァリスに疑問をぶつけた。

「そこまで古い流派ではありませんよ。」

「……………?」「……………」

その言葉を聴き全員が困惑した。

「普通の流派なら流派以外の技を身につけることを嫌がりますが、この流派ならそんなことを気にしないでしょうしね。」

「そんな流派なんてあったかしら?」

ティアレスは余計に混乱した。

「それを体現している人物がその流派にいますからね。」

そう言っつてサヴァリスはレイフォンを見た。

「……………なるほど、確かに。」「……………」

レイフォン以外の全員が納得した。

「いったいどこなんですか、サヴァリスさん。」

理解できなかったレイフォンがサヴァリスに聞いた。

「はあ…。」

レイフォン、このグレンダンで自分の流派以外の技を使っている
武者者って言ったら誰を思い浮かべるかしら。」

アルシエイラはレイフォンにそう言った。

「そんな人っていましたか？」

「あんだでしょ。」

「お前以外に誰がいるんだよクソ野郎!!」

「えっ!!」

「と言うことはもしかして。」

「ええ、サイハーデン流刀争術ですよ。」

流派の信念はどんなことをしても生き残るでしたよね?」

「ええ。」

「だからですよ。」

生き残ればそれだけ戦う機会が多くなりますからね。

それに、ルッケンス流以外の技にも興味がありますからね。

他の流派なら自分の流派以外の技を身につけることを良しとしま
せんからね。

そういうことなのでこれからよろしくお願いしますね、レイフォ
ン。」

「は、はあ...。」

「確かにサヴァリスにはぴったりの流派よね。」

アルシェイラのその言葉にサヴァリスとレイフォン以外がうなずいた。

「まあそれはいいとして、ティアレスには地剣の調整をしてもらうから。」

サヴァリス案内してあげなさい。

それじゃあ、今日は解散。」

今日の集まりは終了した。

第16話 衝撃の真実（後書き）

いかがだったでしょうか？

サヴァリスが流派にこだわりが無かったことを考えてこんな話にしてみました。

これからの方針に取り入れてほしいことなどがありましたら教えてください。ください。

皆様のご意見を取り入れた話になるようにしていきたいと考えていますのでよろしく願います。

アンケート

今後の話の内容についてのアンケート

1・ティアレスの子供について。
現在の予定は武者者であることだけしか決まっています。
その為子供の性別などを決めかねています。

- (1) 男の子
- (2) 女の子
- (3) 上記のどちらかの双子
- (4) それ以外

(4)を選んだ人はどのような構成がいいのかの記述をお願いします。
たします。

また、名前も募集しています。

2・レイフォンの強化案

レイフォンは化錬剱が苦手ということもあり、強化としては化錬剱も使えるようにするべきなのか、今の実力をそのまま伸ばすのかを決めかねています。

- (1) アルシエイラとの修行
- (2) 天剣授受者たちの元での修行
- (3) その他

(3)を選んだ人はどのような内容がいいのかの記述をお願いします。
たします。

3・リーリンとの関係

この話ではリーリンのヒロインかを目指しています。

しかし、ツエルニに行くまでの関係を恋人か婚約者・原作と同じ関係のどちらにするべきなのかを決めかねています。

(1) 恋人か婚約者

(2) 原作と同じあいまいな関係

の二つとなっています。

以上の3つについてです。

もしよろしければ皆様のご意見をよろしくお願いいたします。

第17話 とある一門の探め事（前書き）

今回の話はサヴァリスのルッケンスとの決別とサイハーデン流への入門の話となっています。

第17話 とある一門の掾め事

第17話 とある一門の掾め事

ルツケンス修練場：

道場生が全員そろっており二人の話を聞いていた。

「父上、僕は今日を持ってルツケンス流を抜けさせていただきます。」

サヴァリスはそう言い放った。

「今なんと言ったサヴァリス。」

ルツケンス流正統後継者であるフォルシル・ルツケンスは自分の息子であり、天剣授受者でもあるサヴァリスに問いかけた。

「先ほども行ったとおり、僕はルツケンス流を今日を持って抜けます。」

サヴァリスからもう一度言われた内容にざわついた。

「静まれ!!!」

その雰囲気を変えたのはフォルシルだった。

「サヴァリスお前が何を言っているのか理解しているのか？」

「ええ。」

ただ僕がルツケンス流から抜けるだけですよ。」

「やはりお前は何も判ってはいない！！」

ルツケンス家のものがルツケンス流を抜けるということがいかに大それたことなのか！！

それはルツケンス流の歴史と技を否定することなのだぞ！！」

怒りにより顔を赤くしたフォルシルがそう言った。

「僕はルツケンス流の歴史も技もどうでもかまいません。」

ただ自分が強くなり、強い敵と戦えるのであればそれでいいんですよ。」

サヴァリスは平然と言つてのけた。

「お前はルツケンス流ではこれ以上強くなれないと言いたいのか！」

「！」

「そうです。」

「ここで学ぶことはもう何もありませんからね。」

「思い上がるなよサヴァリス！！」

ルツケンス流の長き歴史がその強さを物語っていることをわかつてはいない！！」

「ただ長く続いてきただけじゃないですか。」

他の都市ではそれでいいのかもしれませんが、ここはグレンダン。

武芸者には強さが求められています。

そこでの歴史の長さがなんになるんです?」

「歴史を残すことがいかに難しと思っている!」

「たいした事ではありませんよ。

ただ強くある。

それだけでいいのですから。

ゆえに天剣授受者は多くのことを許されているのですよ。」

「クッ!!」

好きにしる!」

そう言い放ちフォルシルは修練場を出て行った。

「さて、行きますか。」

そう言って出ていこうとした。

「待ってくださいサヴァリス様!!」

一人の門下生がサヴァリスを呼び止めた。

「何ですか、ガハルド?」

サヴァリスは呼び止めた相手に不機嫌そうに返事をした。

「考え直してくださいサヴァリス様!!」

ルッケンス流にはサヴァリス様が必要なんです!」

「誰がなんと言おうと変わりません。」

「それでは僕は入門する流派に挨拶に行きますので。」

「サヴァリス様に相応しいのはルツケンス流だけです!!」

「いったいどこの流派に入門するつもりですか!!」

「僕に最も相応しいサイハーデン流刀争術ですよ。」

「『『『『『なっ!!』『』『』『』」

「サヴァリスが入門しようとしている流派を聞き門下生たちは驚いた。」

「な、なぜです。」

「なぜそのような流派に入門されるのですか!!」

「『『『『『そうです。」

「『『『『『『『『『『お考え直してください!!』『』『』」

「『サイハーデン流以上に僕に適している武芸はないと思ったからこそ入門するんだよ。』」

「『しかし…』」

「サヴァリスは自分の言いたいことを言ったため門下生が話しかけるのを無視して同情を後にした。」

「サイハーデン道場：」

そこには三人の人物がいた。

その三人は入り口側に一人、奥に二人が向かい合って座っていた。

「本日はどのようなご用件でいらっしゃったのですかサヴァリス様。」

道場主であるデルクがサヴァリスにそう問いかけた。

「サイハーデン流に入門するためです。」

サヴァリスはいつもの笑顔で当然とばかりにデルクの質問に答えた。

「それはどうということでしょうか。」

サヴァリス様は徒手空拳で戦うルツケンス流を納めていたはず。

なのになぜ刀で戦うことを主体とするサイハーデン流に入門しようと思ったのですか？」

デルクはサヴァリスがなぜサイハーデン流に入門しようと思ったのか次第によって決めようと考えた。

「簡単ですよ。」

サイハーデン流以上に僕にあつた流派がないと感じたからですよ。」

「なぜそう言いきれれるのですか？」

何を持ってサイハーデン流以外にないと言い切るのですか？」

「僕は強いものと戦うことが好きです。」

そして、戦うためには生き残らなければいけません。

多くの流派は生き残ることに重点を置いているのではなく流派を残すことに重点を置いていますからね。

しかし、サイハーデン流はどんなことをしても生き残ることが理念と聞きました。

それに、その理念の実行者がいますからね。」

そう言いながらサヴァリスは今までだに何もしゃべらないレイフオンを見た。

「わかりました。

入門を許可します。」

デルクはサイハーデン流の理念を学ぼうとすることから入門を許可した。

「ありがとうございます。

それと、他の道場生たちと同じ扱いと結構です。」

「承知しました。

レイフオンサヴァリス様の指導はお前がしなさい。」

「えー！

何で養父さん。

技を教えるなら養父さんがするほうがいいんじゃない？

それに、他の道場生と同じにするならなおさら僕が教えるのはおかしいと思うけど。」

今まで黙っていたレイフオンがデルクの言葉を聴きそう言った。

「レイフォンお前は武芸の天才だ。

人の剋技を一目見ただけでどのように剋を使用しているのを見抜き自分のものになっている。

しかし、それではダメなんだ。

自分の技を人に伝えることも武芸者としての役目だ。

だからこそサヴァリス様の指導を通して技の伝え方をお前に学んでもらいたいんだ。」

デルクはレイフォンの武芸者としての才能の偏りを矯正したいと考えていた。

しかし、今いる道場生への指導となるとレイフォンには荷が勝ちすぎるため行えなかった。

その為、初めてサイハーデン流を学ぼうとしているサヴァリスへの指導を通して二人で高めあってもらおうと考えたため決断した。

「それではレイフォン、これからよろしくお願いしますね。」

サヴァリスはデルクから伝えられたこれからの指導者であるレイフォンにそう声をかけた。

「人に教えるのは初めてなので、こちらこそよろしくお願いします。」

「ああ、それと、報奨金は孤児院へ寄付させてもらいます。」

「そのようなことを気にしなくてもかまいませんよサヴァリスさま。王宮からの援助も増えてきたので大丈夫です。」

「いえいえ。」

その方が報奨金も有効活用されますからね。

それに、孤児院の子供たちの中に強くなる武芸者の卵がいるかもしれせんからね。

その子を育てるために使われるかも知らないんですから安いことですよ。」

サヴァリス自身レイフォンが孤児院出身ということを考えると孤児の中には武芸者としての才能が高いものがあるのではないかと考えた。

そして、彼らは精神的に強いたため強くなると考えたために寄付しようと考えた。

「それでは訓練は明日からでいいでしょうか？」

「ええ、明日からよろしくお願いします。」

こうしてサヴァリスのサイハーデン流への入門が決まった。

サヴァリスへの指導がレイフォンの武芸者として大きく成長させることとなる。

第17話 とある一門の探め事（後書き）

今回の話はどうだったでしょうか？

余りにもレイフォンが戦うことへ傾いていたためその事を矯正するためにサヴァリスの指導員としてみました。

結果発表

結果発表

4月23日から行っておりましたアンケートの結果の集計ができましたので発表いたします。

1. ティアレスの子供について

第一位 4票 (4) それ以外

男女の双子3票

男女女の三つ子1票

第二位 3票 (2) 女の子

第三位 2票 (1) 男の子

第四位 0票 (3) 上記のどちらかの双子

となりました。

その為、ティアレスの子供は(4)それ以外で男女の双子となります。

2. レイフォンの強化案

第一位 4票 (1) アルシエイラとの修行

第二位 3票 (2) 天剣授受者との修行

(3) その他

となりました。

今回の強化案はほぼ同じだったため、すべてを取り入れてみます。その為、指導者側に女王、天剣授受者、ティアレスとなります。

修行者レイフォン+

の内容で困うと思います。

+ には今後の話を面白くするためにとある人物を加えます。

見当が付いているかもしれませんが今回はまだ発表はいたしません。

発表は本編にて発表となります。

3・リーリンとの関係

第一位 6票 (1) 恋人か婚約者

第二位 3票 (2) 原作と同じあいまいな関係
となりました。

その為、恋人か婚約者となります。

いつ頃になるかは今のところ秘密です。

アンケートに回答していただいた皆様へ。

アンケートへの回答していただきまして誠にありがとうございました。

皆様からいただきました回答とご意見を参考により一層皆様楽しんでいただける話を書いていこうと思っております。

その為、これからもご意見や間違いの指摘をよろしく願います。

第18話 授与・強化訓練構想（前書き）

これから先の話の布石となるお話です。

また、内容としては地剣の作成方法を確立させた二人をねぎらう内容となっています。

第18話 授与・強化訓練構想

第18話 授与・強化訓練構想

サヴァリスがサイハーデン流刀争術に入門した翌日

謁見室：

今ここには女王陛下、天剣授受者、地剣授受者、ミンスとグレンダンの政務に関わる大臣たち。

そして、今日の主賓であるロイヤー・クオートとルシャ・シルフィだけであつた。

「これより功労者への功労者受賞式を行います。」

カナリスがそう告げた。

「ロイヤー・クオートとルシャ・シルフィは女王陛下の前へ」

女王の前に来た二人は跪いた。

「此度の地剣生成方法の確立したことを認め、ここに功労賞を授与する。」

御簾越しにアルシエイラは二人に言った。

「「ありがとうございます。」」

カナリスが二人に勲章と報奨金を渡すために近づいた。

「受け取りなさい。」

これはグレンダン王家からの二人の功績に対する勲章と少しばかりの報奨金だからね。」

アルシェイラはカナリスが二人の前に来たときにその声をかけた。

「陛下一つお願いがあります。」

アルシェイラの言葉を聞いたルシャが言葉を発した。

「何？」

「多少のことなら聞くわよ。」

「私への報奨金は孤児院への寄付にさせていただきたいのです。」

「「「「「！！」「」「」

それを聞いた政務大臣たちは驚いた。

「なぜ？」

理由を聞かせてくれないかしら？

「そうでなければあなたの報奨金を寄付にまわすことはできないわよ。」

「お待ちください陛下！！」

報奨金を孤児院への寄付にするなどなりません！！」

一人の大臣がその声をあげた。

「そのとおりです陛下!!」

陛下からの報奨金を孤児院にするなど許されることでは在りませ
ん!!」

「「「そうです陛下。」

お考え直してください!!」」」

他の大臣たちも一人の大臣の意見を肯定した。

「黙りなさい。」

これは私が決めたことです。

それに、理由によっては彼女の報奨金を孤児院への寄付にはしな
いわ。

それじゃあ、理由を聞かせてくれる?」

「はい。」

私の弟はそこにいる天劍授受者の一人であるレイフォン・ヴォル
フシュテイン・アルセイフです。

弟は自分の報奨金を孤児院への寄付に使っています。

今は孤児院への助成金が多くなり各孤児院の経営状況が悪くなっ
てきました。

しかし、いまだに経営状況が苦しい孤児院もあります。

私はそんなレイフォンの姉として恥ずかしくない姉でありたいの
です。

それゆえに私の報奨金を孤児院への寄付にしていただけだったので
す。」

その理由を聞き大臣たちは黙った。

天劍授受者であるレイフォンを引き合いに出されてしまったため

自分たちではどうすることもできないと悟ったためである。

「そういふこと。」

いいわ。

あなたへの報奨金は孤児院への寄付にしておわ。

いい姉を持ったわね、レイフォン。

そんな姉を泣かせるようなことをするんじゃないわよレイフォン。

それじゃあ、受け取りなさい。」

「お待ちください陛下。」

私の報奨金も孤児院への寄付へしていただきたいのです。」

今まで黙っていたロイヤーがそう口にした。

「はあ……。」

あなたまで？

一応理由を聞かせて頂戴。」

「私はここにいますルシヤの師です。」

弟子であるルシヤがグレンダンの孤児院を助けるために報奨金を寄付にすると決めました。

ならば師である私は弟子の手助けをするのは当然のことです。

それゆえに私の報奨金も孤児院への寄付にしよう決めました。」

「そう。」

わかったわ。

それじゃあ、二人への報奨金は孤児院への寄付にするわ。

二人とも勲章を受け取りなさい。」

「はい。」

二人は勲章を受け取った。
カナリスは二人が勲章を受け取ったためアルシェイラの横へと戻った。

「これで功労者授賞式を終わります。」

カナリスが授賞式の終了を告げた。

ロイヤールとルシャが部屋より退出した。

そして、二人が部屋を退出したのを確認してからアルシェイラは口を開いた。

「それでは今日は解散。

あんたたちも自分の仕事に戻りなさい。

あと、レイフォンは私の執務室に来るように。」

そして、大臣たちとカナリスは自分の執務室へと向かい、残りのものは自分の家へと戻っていった。

いや、一人だけ自分の家へと帰らずに一つの懸案を解消するため行動を始めた。

また、レイフォンはアルシェイラとともにアルシェイラの執務室へと向かった。

アルシェイラ執務室：

「レイフォンはお菓子を作ることができたわよね？」

部屋についてすぐにアルシェイラはレイフォンにその声をかけた。

「え、ええ作れますがそれが何か？」

アルシエイラから突然言われたことに戸惑った。

「じゃあ、今日は私のためにお菓子を作ってもらおうよ。

厨房にある材料を使って今から作ってきなさい。」

「…。」

もしかして僕を呼んだのはそのためですか？」

「そうよ。」

子供たちがレイフォンのお菓子はおいしいって言っていたから私も食べたくなくなってね。

そういうわけだから早く作ってきてね。」

「わかりました。」

そう言ってレイフォンは執務室を出て厨房へと向かった。

レイフォンが部屋から離れたこと確認してからアルシエイラは口を開いた。

「レイフォンをどうやって鍛えようかしら…。」

手っ取り早いのは実践なんだけど…。」

アルシエイラはレイフォンをどのようにして鍛えるかを考えていた。

「そつだー!!」

天剣授受者たちに鍛えさせればいいんだわ!!

特にレイフォンは化鍊剱が苦手だったわね。

…。

考えてみたらトロイアットがまともに教えられるのかしら…。

どうしようかしら…。

化鍊剱といえばサヴァリスも使えるけど、教えるのは不向きよね。

うん…。

そっか!!

ティアレスにも頼めばいいんだわ!!

全員の下での修行が終わったら私との組み手をすればいいんだわ

!!

これで完璧ね。」

アルシェイラのレイフォン強化訓練案が決定した。

厨房：

「すみません、厨房を貸してほしいのですが…。」

レイフォンは厨房にいた料理人にそう声をかけた。

「食べたいものを言うていただけましたら私どもが作りますが？」

レイフォンに声をかけられた料理人は戸惑いながらもそう答えた。

「いえ、食べるのは僕じゃなくて陛下なんです。」

「陛下は何を食べたいとおっしゃっていたのですか？」

「それが、僕が作ったお菓子を食べたいとっていたので…。その、厨房を貸してほしいんです。」

「レイフオン様は料理ができるのですか？」

「ええ、家ではよく作っているのです。」

「そうですか。」

それでは私たちは何を手伝えればよろしいでしょうか？」

「いえ、手伝ってもらつと皆さんにご迷惑をかけてしまつかもしれないので…。」

「わかりました。」

「自由に厨房をお使いください。」

「ありがとうございます。」

そうこたえてお菓子を作り出した。

そして、2時間ほどの時間が経つた。

「できた。」

レイフオンは自分の作ったケーキを納得顔で見ている。

「あのレイフオン様よろしいでしょうか？」

レイフオンが作ったケーキを見た料理長が恐る恐る声をかけた。

「かまいませんが何か？」

レイフオンは不思議そうな顔をして振り向いた。

「それは陛下が一人で食べるのですか？」

「そうだと思いますけど。」

「そ、そうですか…。」

そして料理長は自分の持ち場へと戻っていった。

アルシエイラの執務室：

「陛下作ってきましたけど入っていいでしょうか？」

レイフオンは部屋の外から部屋の主にその声をかけた。

「ええ、いいわよ。」

アルシエイラは何気なくそう答えた。

「失礼します。」

そう言ってレイフオンは作ってきたケーキとともに入ってきた。

そして、アルシエイラはレイフオンが作ってきたケーキを見て持っていた書類を落とした。

「…。」

レイフォン、それは何？」

アルシエイラは予想もしていなかったものを見たためレイフォンにそう聞いた。

「？」

見たとおりのケーキですが。

どこがおかしいですか？」

レイフォンの持ってきたケーキはなんと直径60cm高さ10cmもあった（笑）。

「どこから突っ込んでいいんだか…。

作ったものは仕方ないわね。

デルボネどうせ見てるんでしょ？」

アルシエイラは天剣授受者である念威操者のデルボネを呼んだ。

「ええ見ていましたよ。

それでどうしました？」

「バーメリンとカナリスとティアレスに裏庭に今すぐ来るように伝えて頂戴。」

「わかりました。」

「レイフォン、あんたが作ったんだから責任を取ってあんたも一緒に食べるのよ。

いいわね。」

「は、はあ…。」

レイフォンはアルシェイラの反応からまた自分が作りすぎてしまったことを悟った。

「さつさと裏庭に行くわよ。」

そう言っただけでアルシェイラはレイフォンとともに裏庭に向かった。その途中で見かけたメイドに裏庭に紅茶を持ってくるように伝えた。

王宮から孤児院へと帰る道：

レイフォンが王宮にてケーキを作っていると時を同じくして、ルシャが孤児院へ帰るために歩いていった。

「ルシャ・シルフィだな。」

ルシャにそう問いかけてきた者たちがいた。ルシャは自分に声をかけてきたものたちに振り向きそして悟った。

『武者者』
だと。

「武者者の方たちが私に何のようですか？」

なぜ声をかけてきたのかを大体理解していたがそれでも理由をはっきりさせるためにそう質問した。

「そんなこと決まっているだろ？」

最近孤児たちが調子に乗っているみたいだからな。

ここいらで締めておこうとおもってな。

さすがにヴォルフシュティンは無理でもお前なら俺たちで何とかもできるからな。」

武芸者たちは不気味に笑い出した。

しかし、そこにここにいるはずのない人物が声をかけてきた。

「ほゝお。」

そいつをどうするつもりだ。」

その場にいたルシャと武芸者たちが声のするほうを見ると一人の大男がいた。

「ルイメイ様！！

なぜここに？」

「クツ！！」「クツ」

ルシャはいるはずのないルイメイになぜここにいるのかを聞いた。そして、武芸者たちはこれで自分たちが行おうとしていたことが実行不可能になったことを悟った。

「何ただの気まぐれだ。」

それでお前たちは彼女に何をしようとしていた？」

ルイメイは武芸者たちを睨めながらそう問いただした。

「武芸者でもない彼女に複数の武芸者が何のようだ!!」

ルイメイは武芸者として墮落した者たちを見ているだけで苛立ちを高めさせていた。

「な、何でもありません。

失礼します。」

そう言っつて武芸者たちはその場を逃げるようにして後にした。

「大丈夫だったか？」

ルイメイは先ほどより声をやわらかくしてルシャに声をかけた。

「は、はい!!」

危ないところをありがとうございました。」

「気にするな。

ただの気まぐれだからな。

それよりも家まで送っつていこう。

俺がいなくなればあいつらが戻ってくるかもしれないからな。」

「いえそんなことをしていただくわけには…」

「天剣授受者だからといって気にするな。

お前の弟と同じなのだからな。

それに、お前のような芯の強い女は嫌いではないからな。

後はめんどくさいことを避けるためだ。」

「めんどくさいことですか？」

「このあとお前に何かあればレイフォンのやつが俺のところを言いに来るだろうかなら。」

それを避けるためだ。」

「それではお願いしてもよろしいですかルイメイ様？」

ルイメイの言葉の一部は本音だろうが自分の事を心配して言うてくれていることを感じたルシャはルイメイを頼ることにした。

「ああ、遠慮するな。」

そして二人は孤児院へと向かった。

王宮裏庭：

そこには今アルシエイラとカナリスとレイフォン、そして給仕をするメイドがいた。

「そろそろあの二人も来るころね。」

「そうですね。」

レイフォンは気まずい雰囲気能耐えかねていた。

「早く二人とも来てくれないかな…。」

カナリスさんの機嫌がこれ以上悪くならない内に…。」

カナリスは自分の仕事と中に呼ばれたため機嫌が悪かった。

「何のようだクソ陛下」

「何かあったのですか陛下？」

レイフォンがそう考えている間にバーメリンとティアレスが裏庭へとやってきた。

「やっと来たわね。」

今回来てもらったのはあんたたちとお茶会をするためよ。」

アルシエイラは自分で作らせたケーキの量が多すぎたため食べるのを手伝わすために読んだことを隠してそう言った。

「はっ！」

いまさらそんなことしてどうするんだか。」

「私は皆様のことをよく知らないのですから陛下がこのようなお茶会を開いてくださったのですから。」

今回のお茶会に付き合っていただけないでしょうかバーメリン様。」

ティアレスはこれ以上場を悪くしてはいけなないと考えそう言った。

「確かにあなたは地剣となって間もないですから多少の交流をしておいてもいいかもしれませぬね。」

今まで黙っていたカナリスがそう言った。

「ふん！」

なら付き合ってるよ。」

そして急遽決まったお茶会が始まった。

「何でケーキがこんなにでかいんだよくぞ陛下！！」

バーメリンは自分の前におかれたケーキを見てそう言った。

「ケーキの文句はレイフォンに言いなさい。

作ったのはレイフォンなんだから。」

バーメリンはケーキを作った張本人を睨みつけた。

「すみません。」

レイフォンはただ謝るしかできなかった。

「まあ、これくらいなら食べられるでしょうからいいんじゃないですか？」

ティアレスはバーメリンにそう言った。

「ふん。」

そして全員がケーキを食べた。

「うまいな。」

「おいしい。」

「おいしいですね。」

「へへえ。」

やるじゃないレイフォン。」

レイフォンが作ったケーキを四人が総評した。

「ありがとうございます。」

こうしてお茶会は始まった。

第18話 授与・強化訓練構想（後書き）

次回はお茶会についてとルシヤの話となる予定です。
またとある人物が登場してきます。
お楽しみに。

第19話 お茶会と新たな発見（前書き）

今回はお茶会での話とある人物の新たな発見について書いて見ました。

ある人物とはいったい誰なのかは本分にて確認してください。
では、本文をどうぞ。

第19話 お茶会と新たな発見

第19話 お茶会と新たな発見

王宮裏庭：

そこにはアルシェイラ、カナリス、バーメリン、ティアレス、レイフォン、そして給仕をしているメイドがいた。

「これからティアレスはどうするの？」

アルシェイラはそう言い放った。

「これからどうするとはどういうことでしょうか？」

しばらくは地剣授受者として戦場に立つことはできませんが、産まれてからはグレンダンのためにも戦場にて地剣授受者として戦いますか？」

「地剣授受者としてじゃなくて、訓練をするにしてもルツケンス流の道場には今まではサヴァリスがいたけど、これからはいないけどどうやって訓練するのかわかってね。」

アルシェイラはサヴァリスのいないルツケンス修練場でどうやって訓練するのかを聞いた。

「そのことですか。」

それは決まっています。

訓練相手のいるところに私が行けば問題ありませんから。」

ティアレスは気軽に言い放った。

「そう。」

練習方法をきちんと決まっているならいいわ。」

「それにしても子供を身ごもった状態で訓練なんかして大丈夫なのか？」

今まで黙ってケーキを食べていたバーメリンがそう言った。

「そうですよ。」

訓練といつてもかなりハードなことになるでしょうから危険なのではないですか？」

カナリスもバーメリンに続いて発言した。

ティアレスはそんな二人に笑顔を返して言葉を発した。

「大丈夫ですよ。」

なんせ、サヴァリスを身ごもっているときは汚染獣討伐にも出ていましたから。

そのせいかあの子は武芸にしか興味がないのかもしれない。」

「「「……………」」」

先にサヴァリスを身ごもっているときにも訓練していたことをしてはいたが、その状態で汚染獣討伐に出撃していたことを知りティアレス以外は絶句した。

「その為、ゴルネオの身ごもってからはおとなしくしていました。」

ティアレスは周りの反応を気にも留めずそう言った。

「それで今回は訓練だけにするんですね。」

何とか立ち直ったレイフォンがティアレスにそうたずねた。

「ええ。」

そうすれば二人の間くらいの子供ができるんじゃないかって考えてね。」

「まあ何にせよ。」

元気な子供が生まれてくれればいいわね。」

「はい。」

ティアレスはとても嬉しそうな顔をしてそう答えた。

同時刻孤児院前：

孤児院の前に二人の人物がいた。

「お礼がしたいのでよって言うていただけないでしょうか？」

ルシャが自分の隣にいるルイメイにそう問いかけた。

ルイメイは少し考え答えを出した。

「レイフォンが帰ってくるまでいてもかまわないか？
あいつに用があるんだが。」

ルイメイは今日ルシヤの身にあつたことを伝えておこうと考えそ
う答えた。

「ええ、かまいませんよ。」

たいしたおもてなしはできませんがどうぞ。」

そして二人は孤児院へと入っていった。

孤児院入り口：

「ただいま。」

ルシヤはそう言って孤児院へと入った。

「失礼する。」

ルイメイはそう言ってルシヤに続いた。

廊下から入り口に向かつて走ってくる複数の足音が聞こえてきた。
そして、足音を立てていた人物たちが入り口にやってきた。

「「「「お帰りなさい、ルシヤ姉。「「「「」

子供たちがそう言った。

そして、ルシヤと一緒にいた人物を見て子供たちは

「……その人ってルシャ姉の彼氏?」「……」

「皆ルイメイ様に失礼でしょ!!」

ルシャは顔を赤くしながら子供たちにそう言った。

「すみませんルイメイ様。」

ルシャは隣にいるルイメイに謝った。

「気にするな。」

子供たちは純真なんだからな。」

ルイメイはそっけなくそう言った。

「ありがとうございます。」

「それよりルシャ姉、クララとサヴァリスってお兄ちゃんがルシャ姉のことを待ってるよ?」

子供たちはルシャを尋ねて来て来ている人物がいることを告げた。

「クララはタイトの調整に来たんでしょうけど、サヴァリス様は何で?」

ルシャはサヴァリスが自分を訪ねてきていることに疑問を持ち子供たちに聞いた。

「わかんない。」

「そう。」

「ありがとう。」

そうルシヤがそう答えて全員で食堂へ向かった。

食堂：

「お待ちせしてしまい申し訳ありません、サヴァリス様」

食堂に入りサヴァリスがいることを確認してルシヤはそう言った。

「かまいませんよ。」

急に来た僕が悪いんですから。」

サヴァリスはいつもの笑顔でそう答えた。

「それにしてもなぜルイメイさんがここにいるんですか？」

ルシヤたちと一緒に入ってきたルイメイにサヴァリスは尋ねた。

「ただの気まぐれだ。」

「そうですか。」

「それよりなぜお前がここにいるんだ？」

「僕はサイハーデン流刀争術に入門したので刀のダイトを作成する

ためですよ。」

「なるほどな。」

そして沈黙が降りた。

その沈黙を破ったのは

「お帰りなさいルシャさん。」

早速なんですけど私のダイトを調整してくれませんか？」

食堂に入ってきたクラリーベルがルシャにそう言った。

「どうしたんですか皆さん？」

「なんでもないのよ。」

ダイトの調整をしたいのでサヴァリス様も来て頂けますか？」

「ええ。」

解りました。

それと、僕のことと呼び捨てでかまいませんよ。」

「そ、そんな天剣授受者であるサヴァリス様を呼び捨てなんかにできません。」

「レイフォンと同じ天剣授受者なんですからかまいませんよ。」

「やっぱりダメです。」

「そうはいつでもダイトを調整してもらおうんですから気にしないでください。」

その方がタイトの調整でも言いたいことを言い合うことができずからね。」

サヴァリスは無を言わせぬ笑顔でそう言い切った。

「わかりました。

サヴァリスさん。」

「よろしくお願いします。」

そして、三人はルシャの作業室へと向かった。

王宮裏庭：

「それでレイフォン、サヴァリスとの訓練も1ヶ月経ったけどどう？」

アルシェイラはサヴァリスとの訓練の調子を聞いた。

「サヴァリスさんからいろいろなことを学ばせてもらっています。」

レイフォンは真剣な顔をしてそう答えた。

「そう。

それは良かったわ。

勉強の方も基礎が固まってきたから応用をできるようになれば問題ないわね。」

「それは良かったです。」

「これからは私が直さなくて良くなりそうですね。」

カナリスはレイフォンを横目で睨みながらそう言った。

「すみませんでした。」

レイフォンはカナリスに向き直り真剣に謝罪した。

「これからきちんとしてくれればかまいませんよ。」

カナリスはレイフォンが余りにも真剣に謝罪してきたためそう答えた。

「頭がちよつと良くなってもバカはバカのままに決まってる。自分にできることとできないことをきちんと把握しておけよ。」

バーメリンは先の一件を暗にほのめかしてレイフォンに注意をした。

「はい。」

そして、それ以降は特に意味のない内容の話が続いた。

ルシヤの作業室：

「まずはクララのタイトの調整を行いたいのですが、いいですかサヴァリスさん？」

ルシヤは微調整をするだけでいいクラリーベルのダイトからはじめようと考えサヴァリスにその事を聞いた。

「ええ、僕はかまいませんよ。」

サヴァリスも最初にクラリーベルのダイトの微調整をするだろうと考えていた。

『さすがレイフォンの姉ですね。』

天剣授受者だからといって優先順位を変えることはありませんでしたね。』

サヴァリスは内心でルシヤの評価を上げた。

「それじゃあクララ、ダイトを復元してくれる？」

「はい！！」

レストレイション」

クラリーベルはダイトを復元した。

「それでクララはどう調整したいの？」

ルシヤはどのように調整をして欲しいのかをたずねた。

「刀を早く振りたいたので重量を軽くしたいんです。

でも、長さを変えたくないなので幅を小さくしたいんです。」

クラリーベルは練習のときに感じていた不満を解消するためにそ

う告げた。

「うん…。」

それは私では決められないわね。

たぶんそれはクララ側に問題があると思うの。」

ルシャは今までレイフォンのダイトを調整してきた経験からそう答えた。

「私にですか？」

クラリーベルはルシャの返答に疑問を持った。

「ええ。」

クララは刀の扱い方を体で覚えてないじゃないかと思うの。グレンダンでも刀を扱う流派が少ないからクララは無意識にでも剣と同じように刀を振るっているんだと思うの。

だから先にレイフォンに相談してからになるわね。でなければいつまで経ってもクララの問題は解決しないと私は思うの。」

「わかりました。」

レイフォン様に相談してから調整内容を決めます。」

クラリーベルは刀の使い方について詳しく知らないため、ルシャの指示に従うことにした。

「それではサヴァリスさんのダイトを作りましょうか。」

「ええ、お願いします。」

「それではどのダイトで刀を作りますか？」

刀は基本的にアイアンダイトで作られるが人によっては違うダイトで作る人もいるためルシヤはサヴァリスにたずねた。

「僕も刀について詳しくないので基本的に使用されているダイトでお願いします。」

サヴァリスは刀にどのダイトがいいかわからないためルシヤに任せた。

「それではアイアンダイトで作りますね。」

そう言つてルシヤはサヴァリスに背を向けてアイアンダイトにレイフオンが使用している設定をアイアンダイトに書き込んだ。そして書き込みをおえたダイトをサヴァリスに渡した。

「復元してみてくださいませるか？」

「レストレイション」

サヴァリスは早速ダイトを復元した。

「何か違和感がありますか？」

「そうですね。」

ダイトにもう少し余裕を持たせて欲しいですね。後は化鍊剱を使いやすくして欲しいくらいですかね。」

サヴァリスは自分の剄を受けきれないことを理解していたため余り期待していなかった。

しかし、今自分が手にしているダイトは剄量こそ普通のダイトと同じだったが、剄の流れは天剣以外では最もよく感じられた。

「わかりました。」

そしてルシヤは微調整を行った。

「今度はどうですか？」

「ちょうどいいですね。」

サヴァリスは大雑把に伝えたことをルシヤが理解してし、実行したことに驚いていた。

『あんな伝え方で僕の考えを理解することができるとは。

それに今までのメカニックと違って使い手重視の設定ですか。

これも一つの強さ《ちから》ですか…。』

「それは良かったです。」

表情には出ていなかったがルシヤは緊張していたため安心した。

「一つお願いがあるのですがいいですか？」

「設定におかしなところがありましたか？」

不安そうにルシヤはサヴァリスに聞いた。

「いえいえ設定には何も不満はありませんよ。

お願いというのは僕が今使っているダイトの調整をしていただきたいということです。」

「それはレイフォンとの訓練に使用しているダイトということですよ。よろしいでしょうか？」

「ええそうです。」

あなたにとってもいいことだとは思いますが。

いろいろな形状のダイトの調整を行うことはメカニックにとって大切なことですから。」

「確かにそうですね。」

わかりました。

全力で調整をさせていただきます。」

ルシヤも自分の経験の偏りを理解していたため手甲の調整を行うことを決めた。

「ではお願いします。」

そう言って天剣とは違い持っているダイトをルシヤに渡した。

「そんなにルシヤさんの調整はいいんですか？」

今まで黙っていたクラリーベルがサヴァリスに質問した。

「ええ。」

他のメカニックと違い使い手重視の設定を心がけているところがいいですね。

それに、実力もかなりのものですよ。
家のメカニック以上ととってもいいでしょう。」

サヴァリスは自分がルシヤに感じたことを正直に話した。

「そ、そんな。」

私なんてまだまだです。」

サヴァリスの話聞いたルシヤはそう言った。

「謙遜しなくていいですよ。」

僕はただ事実を言っただけですから。」

「あ、あのダイトを復元していただけますか？」

サヴァリスが本当にそう思っていると感じたルシヤは恥ずかしくなり調整が終わったダイトを渡してそう言った。

「わかりました。」

レストレイション」

「どうですか？」

初めての手甲の調整だったため不安そうな顔をしながらルシヤはサヴァリスに聞いた。

「さすがですね。」

今まで以上に使いやすいですよ。」

『ただ武芸だけではなくいろいろな強さというのも見たいです』

ね。
』

ルシャのメカニックとしての實力を見たことにより、武芸以外の強さにも興味を持った。

第19話 お茶会と新たな発見（後書き）

いかがだったでしょうか？

サヴァリスが武芸にしか興味がなかったのは他の強さを見ることがなかったからではないかと考え今回のような良いようにしてみました。

読んでくださった皆様にお知らせです。

話も私の考えていたところまでできましたので、少々今後の話についてのことを書かせていただきます。

ISのとある人物がレギオスの世界に来ます。

次回の話では登場しませんがまもなく登場させようと考えています。登場するのは誰なのかは登場するまでのお楽しみということですのでよろしくお願いいたします。

第20話 続お茶会（前書き）

更新が遅くなって申し訳ありませんでした。

今回の話は前回のお茶会の続きとなっています。

なかなかかけなかったためおかしなところなどが多数あると思いますのでそのことに対してのご指摘などをよろしくお願いいたします。

それでは本編をどうぞ。

第20話 続お茶会

第20話 続お茶会

王宮裏庭：

そこでは女性たちの話が行われていた。しかし、そこには一人だけ男がいたが…。

「それでレイフォン、リーリンとはどうなの？」

アルシェイラが今まで気になっていたことを聞いた。

「どうとは？」

レイフォンは不思議そうにしてアルシェイラの真意を聞こうと問い返した。

「決まっているじゃない。」

リーリンとはどこまでいったの？」

「どこまで行ったのかといわれましてもリーリンとはよく買い物に良く行きますけど？」

その答えを聞いた女性たちは心を一つにした。

『鈍感なんじゃ…。』

「買い物なんてどうでもいいのよ!!」

リーリンとの関係はどこまで発展しているのか聞きたいのよ!!」

アルシエイラはレイフォンに聞きたいことをストレートに聞いた。

「関係ですか？」

幼馴染で、家族ですけど。」

レイフォンはアルシエイラの問いかけに自分の感じているリーリンとの関係を答えた。

そして、アルシエイラは

『リーリン、お姉ちゃん負けないから。』

必ずレイフォンの鈍感を治して見せるかなね!!」』

心の中で決意をした。

「とりあえずレイフォン。」

「はい?」

「一発殴らせなさい!!」

アルシエイラはそう言ってレイフォンに殴りかかった。

「ええ〜!!」

な、何で殴られなくちゃいけないんですか!!」

レイフォンはアルシエイラの拳を何とかかわしながらそう答えた。

「これは女王命令よレイフォン。
おとなしく殴られなさい。
リーリンのためにも!!」

こうして、アルシエイラとレイフォンの鬼ごっこが始まった。
レイフォンは必死に逃げていた。
なぜなら、

『一発でも食らえば動けなくなる。

今の陛下は一発では許してくれそうにないから、なんとしても逃げなくちゃ僕の命が危ない!!』

そしてレイフォンは場外に逃げようと考えた。

『場外ならいくら陛下でも僕を殴れないだろうから早く逃げなくちや。』

レイフォンは一直線に場外へと逃げようとした。

しかし、その逃走ルートをふさいでいるものがいた。

「囲まれている!!」

「そういうことよレイフォン。

確かに裏庭にいる天剣授受者は三人だけど城にはリントンスもいたのよ。」

足を止めたレイフォンの背後からアルシエイラがそう答えた。

レイフォンの逃走ルートをふさいでいるのはリントンスの鋼糸で作られた陣であった。

「いつの間じい。」

「あんたを殴ろうと決めたときにリントンスに命じていたのよ。さて、これであんたの逃げ道はなくなっただわ。おとなしく私に殴られなさい！」

追い詰められたレイフォンはアルシェイラに殴られることを覚悟した。

ゴンー！

「痛い？」

レイフォンはアルシェイラに殴られたためそう言った。しかし、レイフォンが考えて痛みに比べて余りにも軽かったため疑問符となって言葉が出た。

「これで許してあげる。
席に着くわよレイフォン。」

そう言ってアルシェイラは自分が座っていたいすに座るために戻っていった。

「は、はい。」

レイフォンはそう答えてアルシェイラの後に続いた。そして、ふたりが席に座ったのを見計らい声をかけるものがいた。

「陛下なぜレイフォンを殴ったのですか？」

カナリスがアルシエイラの真意を聞くために質問した。

「女心を理解していないバカがいたからよ。」

「そうですか。」

カナリスはそれ以上聞くことはしなかった。

「レイフォン君、リーリンって子の事詳しく教えてくれない？」

笑顔でティアレスがレイフォンにそう言った。

「暇だから聞いてやるからさっさと話せ。」

バーメリンが紅茶を飲みながらそう言った。

「面白いことは何もないですけど……。」

「……それはこっちで決めるから早く話しなさい……」「……」

女性はレイフォンに早く話すように催促した。

そして、レイフォンは今までにあったリーリンとの話を話した。

「……発殴らせ（なさい……）ろ……」「……」

「もう一発殴らせなさい……！」

話を聞いた女性はレイフォンにそう言った。

そして、レイフォンはあきらめて四人に殴られた。

四人はあることを決心した。

『絶対に矯正し（なくては）てやる』』』』

「レイフォン、あなたには明日から新しい勉強もしてもらおうからね。場所は王宮のあなたの部屋で行うから。」

これは命令だから逃げることは許さないわよ。」

アルシエイラはレイフォンにそう言った。

そして、アルシエイラと三人の女性の目が拒否することは許さないと言っていた。

「。。。」

わかりました。

時間はいつからですか？」

レイフォンはあきらめて勉強の開始時間を聞いた。

「15時から2時間行っわ。」

準備するものはないから自己鍛錬が済んだらすぐに来ること！！いいわね。」

「わかりました。」

「私の話したいことはこれで終わりよ。」

他に話したいことがあるやつはいる？」

アルシエイラは四人にそう聞いた。

聞かれた全員は首を横に振った。

「それじゃあ、今日のお茶会はこれでお開きよ。」

こうして王宮裏庭でのお茶会が終了した。

孤児院食堂：

ダイトの調整を行っていたサヴァリス、クラリーベル、ルシャが入ってきた。

「今お茶を入れるね。」

三人に入ってきたことに気づいたリーリンはそう言ってお茶を入れるためにキッチンへと向かった。

そして三人はリーリンが戻ってくるまで待っていることにした。

「ルイメイはどこに？」

食堂内にルイメイがいないことに気づきルシャが疑問を口にした。

「彼なら外にいますよ。」

子供たちと一緒にようです。」

「みたいですね。」

ルシャの疑問にサヴァリスとクラリーベルがそう答えた。

「私ちよつと見てきます。」

そう言っつてルシャは早足で外へと向かった。

「行ってしまいましたね。」

「そうですね。」

「どうします？」

リーリンさんは三人分のお茶を用意しに行ってしまったが、

「まあ、それまでに戻らなければリーリンさんを入れてお茶を飲みながら話をすればいいじゃないですか？」

サヴァリスとクラリーベルは特に話す内容がなかったため、リーリンが戻ってくるまで静かに待っていた。

そして、リーリンがお茶を持って戻ってきた。

「あれ？」

ルシヤ姉さんは？」

戻ってきてすぐに食堂内にルシヤがいないためそう口にした。

「彼女でしたらルイメイさんのところにいますよ。」

サヴァリスがリーリンの疑問に答えた。

「ルイメイ様のところにですか？」

あの、何かありました？」

「いえいえ。」

特に何もありませんよ。

ただ子供たちの様子を見に行ったのでしょう。」

「たぶんそうだと思いますよ。」

サヴァリスとクラリーベルは自分たちの考えを述べた。

「どうしよう。」

ルシャ姉さんがいると思って三人分用意しちゃった。」

「なら私たちと話しませんか？」

サヴァリスがリーリンに席について自分たちと話さないかと誘った。

「え、でも、ご迷惑になるんじゃない？」

「かまいませんよ。」

武芸についての話をしたりするわけではありませんから。」

「リーリンさんも一緒に話しましょう。」

それに、昔のレイフォン様についての話を聞かせてください。」

「わかりました。」

そう言って二人にお茶を配り自分も席に着いた。

「それじゃあ、リーリンさんレイフォン様の昔の話を聞かせてください。」

クラリーベルは早速自分の聞きたい話をして欲しいとリーリンに頼んだ。

「そうですね。
レイフォンは昔から不器用でしたけど、武芸の才能は今も変わり
ないと思います。」

ただ、不器用な性格をしているので無理をしないかいつも心配で
す。

でも、今の武芸をしているレイフォンを見ているのは好きです。」

リーリンはそう笑顔で言った。

しかし、その後笑顔に影が落ちた。

「何か困っているんですか？」

サヴァリスが何かに悩んでいるのではないかと感じそう聞いた。

『彼女なら僕に新しい強さを見せてくれるかもしれないですね。』

などとサヴァリスは考えていた。

「そうです。」

何か悩みがあるなら私たちに話してください。

悩みを解決できないかもしれないかもしれませんが話すだけでも気持ち
が楽になることもありますから。」

クラリーベルもリーリンの力になるうと思いきやそう言った。

話の内容としてはルシャとレイフォンは打ち込めることがあり自
分だけが置いていかれているように感じているということだった。

「そういうことですか。」

そうなるのかなり難しいですね。」

話を聞いたクラリーベルはそう答えた。

「彼らは自分たちにできることをしているわけですから、リーリンさんは今していることや、自分にできることに打ち込めばいいと思いますよ。」

「していることや、できることですか？」

「でもサヴァリス様それがわかっていれば悩まないのではないでしょうんか？」

「そうとも限りませんよ。」

短すぎて気づいていないだけかもしれないですね。

その為にもまずは今孤児院でしていることを教えてもらってもいいですか？」

サヴァリスはクラリーベルの問いに自分なりの考えを話し、リーリンの悩みを解決するためのきっかけを見つげるためにリーリンが普段どのようなことをしているのかを聞いた。

「孤児院では皆の食事の準備や、洗濯、掃除をしていますが、ルシヤ姉さんやレイフォンも手伝ってくれます。」

後は、ルシヤ姉さんと一緒に孤児院の経理をしています。」

「なら、経理や経済についてまず勉強をしてはいかがですか？
そうすれば彼らの力にもなれますからね。」

「なるほど。」

さすがサヴァリス様ですね。

ただの戦闘狂ではいのですね。」

クラリーベルは感心しながらそう言った。

「でもサヴァリス様、経理や経済について勉強するにしてもどつすればいいのですか？」

「それなら僕に任せてください。

あてがありますから。」

「あて？」

サヴァリスの答えを聞いてリーリンとクラリーベルは疑問を口にした。

「カナリスさんに経済などを教えた人を聞いてその人に教えてもらえばいいんですよ。」

「でもそんなことリーリンさんが聞いてもカナリス様が教えてくださらないのでは？」

クラリーベルがサヴァリスにそう聞いた。

「？」

なぜリーリンさんが聞きに行くのですか？

言い出したのは僕なんですから僕が聞いてきますよ。」

「そ、そんなことサヴァリス様にさせるわけには……」

「僕がしたいだけですから気にしないでください。」

リーリンの話の途中でサヴァリスはそう言った。

「で、でも…。」

「気にしないでください。」

それに、レイフォンにもそんなに気を使うのですか？」

「そんなことはありません。」

でも、レイフォンとサヴァリス様は違いますし。」

「そうですねよサヴァリス様。」

リーリンさんにとってレイフォン様は家族なんですからそんなに気を使ったりはしないでしょうけど、サヴァリス様は天剣授受者なんですからそういうわけには行かないと思いますけど。」

「たいした違いはありませんよ。」

天剣授受者といってもたいした事はありませんからね。」

ただちよつと強いだけの武芸者なのですから気にしないでください。」

「で、でも…。」

「気にしないでください。」

サヴァリスはいつも以上の笑顔でリーリンに言った。

「わ、わかりました。」

「それでは明日訓練に来る前に聞いてきますね。」

楽しみにしててください。」

そして、「こちらでのお茶会もいっしょに終了した。

第20話 続お茶会（後書き）

いかがだったでしょうか？

これからの話の内容のために必要になったためこのような内容になりました。

次回はルイメイの元に向かったルシャの話とレイフォンとアルシェイラが孤児院まで戻ってくるまでの話を予定しています。
お楽しみに。

また、原作キャラの性格などが大きく変わってくると思いますがなにとぞよろしくお願いいたします。

第21話 裏庭では（前書き）

投稿が遅くなってしまい誠に申し訳ありませんでした。

今回は子供たちの様子を見に行ったルシャと子供たちと一緒にいる
ルイメイについての話となります。

第21話 裏庭では

第21話 裏庭では

孤兒院裏庭：

リーリンがキッチンでお茶の用意をしているころ。

「あの子達ルイメイ様に迷惑をかけていないかしら。」

ルシャがルイメイと子供たちがいるであろう場所を目指していた。ルシャがルイメイたちが居るであろう場所に近づくにつれて子供たちの笑い声が聞こえてきた。

「あの子達何してるのかしら？」

子供たちの笑い声が聞こえてきたため、ルイメイに迷惑をかけていないだろうと考えた。

しかし、彼女がそこで見たのは、

「あなたたち何してるの！！」

ルシャが見たのは、ルイメイに肩車してもらっている者や、天剣を復元して鎖の部分に子供たちを乗せているルイメイだった。

ルシャの声を聞き、子供たちは肩をすくめた。

「あなたたちは何を考えているの！！」

ルイメイ様はこの都市を守ってくださっている天剣授受者なのよ
!!

レイフォンも天剣授受者だけど・・・」

「そう子供たちを責めるな。」

子供たちと遊んでいるのは俺がそう望んだからだ。」

ルイメイはルシャの言葉をさえぎってそう告げた。

「しかし・・・。」

ルシャはルイメイに子供たちがレイフォンと同じように気軽に接していたため注意したというだけだったため納得しきれないでいた。

「ここまでの道のりでもいったように天剣授受者だからといって気にすることはない。」

レイフォンのやつと同じように扱ってくれてかまわない。」

「い、いえ、そんなことできません。」

「すぐには無理かもしれないからかまわない。」

ただ、俺もレイフォンもたいして変わらないのだから余り気を使わなくていいぞ。」

「はい。」

わかりました。」

「さて次はどんなことをして欲しい?」

ルイメイはひざを突いて子供たちに近づいて問いかけた。

「で、でも……。」

子供たちはルシャに叱られたことと、近くにいるために頼みにくくなった。

「レイフォンに頼みにくいことでもかまわないぞ。」

穏やかな声で問いかけた。

「それなら、ルシャ姉さんの話し相手になってあげてくれませんか？
何か用事もあるみたいなので。」

そう言ったのは年少組みのリーダーのトビがそう言った。

「えー!!」

そういわれて一番驚いたのはルシャだった。

「確かに何か用事があったのかもしれないな。
気おつけて遊ぶんだぞ。」

「……はい!!」「……」

子供たちは元気に返事をして自分たちのやりたい遊びを始めた。

「そう構えなくていい。」

話しやすい話し方でかまわないぞ。」

それを見届けたルイメイがルシャに声をかけた。

「子供たちと遊んでくださってありがとうございます。」

「気にするな。」

俺が子供たちと遊びたいと思ったから遊んでいただけだ。

それに、ここの子供たちは俺を一人の人間として見ていたからな。

「
そういわれてルシヤは気づいた。」

『天剣授受者ということで神聖視されて一人の人間として接してくれる人たちが余りいないんだ。』

だから純粋なあのことたちとあんなに楽しそうに遊んでいたんだ。

ルシヤはレイフォンが孤児院では一人の兄として接している自分たちがいるため今まで考えることのなかったことに気づいた。

その為、ルシヤはルイメイのことをいろいろ知ろうと思った。

「ルイメイ様は子供が好きなんですか？」

「ああ。」

いくら俺たちが汚染獣を倒したとしても都市の未来は子供たちにかかっているからな。

俺たち武芸者にできることはただ敵から都市を守るだけだからな。

「そんなことはありません!!」

武芸者の皆さんは私たちの心の支えなんです。

皆さんがいるから私たちは平和に暮らすことができるんだと思っ

ています。」

「そうか。」

俺たち武芸者もとはいつても一部の者たちくらいだろうが、お前たちに守られていることを自覚し、感謝している。」

「どういうことですか？」

「私たちは何もしていませんよ？」

「簡単なことだ。」

都市が機能しているのは武芸者以外の者たちの力があるからだ。それに、レイフォンはお前にいつも感謝していたぞ。」

「そうなんですか？」

「ああ、言葉にはしなかったが、あいつがダイトを見るときは誰かのことを思っているような顔をしていたからな。」

あんなことが合ったから口にすることができなかった葛藤があったんだろうな。」

「ありがとうございます。」

ルシャはルイメイの不器用なやさしさに感謝した。

『養父やレイフォンみたいに不器用なんだ。』

それに私はルイメイ様に惹かれているんだろうな。ふたりと違うやさしさを好きになったのね。』

ルシャは短い時間ではあったが自分がルイメイのことをどう思っているのかを理解した。

しかし、それを告げるべきではないと理解もした。

「子供たちは気が済むまで遊んでいるだろうな。」

「そうですね。」

それじゃあ、私たちは戻りますか。」

「そっだな。」

そして、ふたりは孤児院にいるサヴァリスたちの元へと戻っていった。

とある道場：

そこでは今まで鍛錬をしていた少女がいた。

「そろそろ戻るか。」

も待っているだろうからな。」

女性はそういうと家に帰るために着替え始めた。

「戸締りは問題ないな。」

女性は道場の戸締りを確認し終えたために出口へと向かい始めた。しかし、出口へ向かい始めた女性は急に後ろに引っ張られた。

「な、何だ!?!」

何に引っ張られているのか確認するため後ろを振り向いた。

「なんだ、あれは!!」

そこにあつたのは黒い空間の裂け目だった。

そして、自分がそれに引っ張られていることを理解した。

「くっ。」

徐々に引っ張られる力が強くなってきた。

女性は必死に耐えていたが、ついに空間に引っ張り込まれてしまった。

「!!」

完全に引っ張り込まれる前にある人物の名前を呼んだが、聞いているものは誰もいなかった。

そして、女性は完全に空間の裂け目に飲み込まれ姿を消した。

第21話 裏庭では（後書き）

次回は空間の裂け目に飲み込まれてしまった女性の正体についての話となります。

第22話 1人の少女との邂逅（前書き）

更新が遅くなってしまい誠に申し訳ありませんでした。

なかなか内容がまとまらなく何度も書き直していたため更新に時間がかかってしまいました。

これからはもう少し早く更新できるように努力しますのでこれからも天剣授受者レイフォンをよろしくお願いいたします。

簡単な今回の内容としては前回の話に出てきた少女との邂逅についてになりますが、少女についての内容はありません。

では本編をどうぞ。

第22話 1人の少女との邂逅

第22話 1人の少女との邂逅

王宮裏庭：

「さてレイフォン孤児院に行くわよ。」

アルシェイラはレイフォンにそう声をかけた。

「はい。」

でもその前によるところがあるんですが、いいですか?」

返事をしたレイフォンはアルシェイラに孤児院へ帰る前によるところがあることを伝えた。

「かまわないわよ。」

でも、どこによるの?」

アルシェイラは了承したがどこによるのか気になったために問い返した。

「ダイト管理局です。」

レイフォンは素直に場所を答えた。

「何であんなとこに……。」

ああ、ルシヤの調整訓練のためにダイエットが必要になったわけね。」

「い、いえ……。」

「お前もちよつとは考えられるようになったんだな。」

今まで黙って紅茶を飲んでいたバーメリンが口を挟んだ。

「そのようですね。」

「これからもきちん勉強すれば一般常識も身につけられるでしょう。」

そしてレイフォンの作ったケーキを食べ終えたカナリスがバーメリンに同意した。

「陛下私も孤児院と一緒に伺ってもよろしいでしょうか？」

裏庭にいる最後の一人であるティアレスがそう口にした。

「いいけど、別に私の許可なんて必要ないわよ？」

「陛下たちと一緒に伺うのですから陛下の許可が必要と申しましたので。」

「そんなこと気にしないでいいわよ。」

私の命令と天剣の使い方に口を挟まなければ基本的に好きにしているからね。」

「わかりました。」

「それにしても何で孤児院に？」

「今日はサヴァリスがダイトを作り、孤児院へ行っているのだから、挨拶に伺おうと思ひまして。」

「なるほど。」

「そういえばサヴァリスはサイハーデンに入門したんだったわね。」

「大丈夫かな？」

レイフォンは姉を心配した。

「大丈夫よレイフォン。」

「サヴァリスは戦闘狂変態だからルシヤを襲うことはないわよ。」

「まあ、あの子が異性に興味を持ってくれれば嬉しいけど、それはないでしょうからね。」

「ああ、あいつが女に興味を持たないだろうな。」

「ええ、彼は異性より強者にしか興味がないですからね。」

裏庭にいる4人の女性は自分の考えを口にした。

「僕が気にしているのはそういうことじゃなくて、アイアンダイトの在庫がないんじゃないかと思ったので。」

レイフォンが気にしていることと4人が気にしていることが違うため、そう口にした。

「大丈夫じゃない？
道場生のためにも保存してるでしょ？」

「ええ、していますが、ルシャ姉さんが弟子入りしてからは他の
ダイトも保管しているので一度に保管できる数が少なくなったので。」

「そういうこと。」

なら早く戻らなくちゃね。

それじゃ今日のお茶会はこれにて終了よ。

この後は各自の好きなようにしなさい。

行くわよレイフォン、ティアレス。」

アルシェイラはそう言って席を立った。

「それでは失礼します。」

ティアレスはそういうとアルシェイラの後を追った。

「あ、あの……。」

レイフォンは後片付けのことを気にしてなかなか席を立てずにいた。

「後片付けは私が指示しておきますから気にせずに行きなさい。」

カナリスがレイフォンの気持ちを察し、レイフォンにその事を伝えた。

「ありがとうございます。」

失礼します。」

そう言って席を立った。

「じゃあ、後のことは任せた。」

そう言ってバーメリンも自宅に帰るために席を立った。

「この片付けは任せましたよ。」

後、おいしい紅茶をありがとう。

何かありましたら私の執務室に報告をお願いします。」

そうメイドたちに指示をしてカナリスは仕事に続きをするために自分の執務室へと戻っていった。

ダイト管理局：

今その前には3人の人物がいた。

「さつさと受け取って孤児院に行くわよ。」

その内の一人であるアルシェイラがレイフォンをせかせかせた。

「わかりましたから少し待ってください。」

それに、数が多いので時間がかかりますよ。」

レイフォンはせかせかすアルシェイラにそう言った。

「それでいくつダイトを持って帰るの？」

ティアレスが気になっていたことをレイフォンに聞いた。

「普段なら20個なんですけど、持って帰るための準備をしていなかったなので5個にしようと考えています。」

「それだけで足りるの？」

ティアレスは普段の数と今回持ち帰る数からそう聞いた。

「不安はありますがすぐにはなくならないと思いますから。」

「それなら私も手伝うから10個にしましょう。」

「いいんですか？」

レイフォンはティアレスのおなかを見てそう言った。

「セクハラっていわれても知らないわよレイフォン。」

アルシエイラがそう口にした。

「ち、違います。」

そんなことを考えていたんじゃないんです。」

「ふふ。」

わかっていますよ。

私のおなかの中の子を気にしてくれているのよね？
でも大丈夫よ。

訓練をしている私のおなかの中で育っているんだもの。
その程度じゃどうってことないわよ。」

「でも……。」

「ああもう。」

人の好意は素直に受け取りなさいレイフォン!!」

「そうですよレイフォン君。」

いくら戦場で一人前に戦っていても年齢で言えばまだ子供なんですから大人に甘えなさい。

それが許される年なんだから。

ね?」

「……。」

はい、ありがとうございます。

では、5個お願いしてもいいですか?」

「ええ。」

それじゃ早くしましょう。

陛下が早く孤児院に行きたいみたいだからね。」

「そうそう。」

早くしてね。」

ティアレスの言葉を肯定し、二人をせかした。

「はい。」

そう返事をしてレイフォンは受付へと向かった。

そして、ティアレスはレイフォンの後に続いた。

「さていつあのことを天剣たちに伝えようかしら？」

タイミングが難しいわね。

最近是天剣たちを登城させすぎてるから住民たちが不安に感じてるかもしれないしね。

「はあ、これで厄介ごとでもあればその事を理由に集められるのに……。」

アルシェイラはレイフォンの強化計画をいつ伝えるのかに悩んでいた。

しかし、その悩みがまもなく解決することをまだ知らないのだった。

そして、二人が手ぶらでアルシェイラの元へと戻ってきた。

「どうしたの二人とも？」

「ダイトを受け取りに行ったんじゃないの？」

アルシェイラは不思議に思い二人に聞いた。

「管理局の人たちが届けてくれるとのことだったのでいつもと同じ数を届けてくれるように頼んできました。」

「レイフォン君はもう少し自分の事を理解する必要がありますね。」

「どういうこと？」

アルシェイラはティアレスの口にしたことに疑問を感じたためティアレスに質問した。

「最後にダイトを受け取りに来たのが天剣授受者になる前だったんです。」

だから自分で持って帰っていたんですけど、今では天剣授受者ですから管理局の人たちが天剣授受者に大量のダイトを持って帰らせるわけには行かないといって届けてくれるそうです。」

「なるほど。」

そりゃそうよね。」

天剣授受者に1個ならまだしも20個のダイトを持って帰らせるなんて考えてみればおかしなことよね。」

まあ、いいわ。」

これで用事が済んだんだから行くわよ。」

3人はダイト管理局を後にしてレイフォンの住む孤児院へと向かった。

とある病院：

ベッドの上で横になっているデルボネがあることに気づいた。

「外縁部にいきなり人が現れるなんて不思議ですね。」

それに、彼女が出てきたあの黒い空間はなんだったのでしょうか？

まあ、そのことを考えるのは後にしましょう。」

陛下に連絡をしておきますか。」

孤児院へ向かう道：

3人の前にデルボネの念威端子が現れた。

「陛下に報告すべきことができました。」

「何があったの？」

「先ほど外縁部に突如として少女が現れました。その近くに誰も来ないように端子で封鎖をしています。いかがしますか？」

「場所的にはどのあたりなの？」

「今向かっている孤児院の近くになります。」

「わかったわ。」

「今から私たちで確認に行くわ。」

「他の天剣授受者たちにも連絡しましょうか？」

「いいえ。」

「その必要はないわ。」

「何かあったら私たち3人でその人物を始末するから。」

「アルシェイラはデルボネの報告を聞き決断をそう下した。」

「わかりました。」

「一応気おつけてくださいね。」

「ええ。」

それと私が王宮に戻ったらその時のことを詳しく報告するように。」

「ええ、了解しました。」

「それじゃあ、二人とも行くわよ。」

「はい。」

アルシェイラにレイフォンとティアレスは了解の返事を行った。そして、3人は活判にて身体強化を行いデルボネから連絡のあった外縁部へと向かった。

デルボネより報告のあった外縁部：

そこには一人の少女が倒れていた。

「戦闘があつたわけじゃなさそうね。」

外縁部の状況と少女の体の状況とデルボネの報告から外縁部にて戦闘があつたため少女が倒れているわけではないと判断した。

「それで陛下彼女をどうします？」

ティアレスはアルシェイラへと判断を仰いだ。

「そうね、このままにしておくわけにもいかないわね……。仕方がないから孤児院へ連れて行きましょう。」

「いいわねレイフォン。」

「僕がかまいません。」

「じゃあ、レイフォン彼女を運んで頂戴。」

「わかりました。」

レイフォンはアルシエイラに返事をして倒れている少女を背負おうとした。

「待ちなさいレイフォン。」

そのレイフォンをアルシエイラが止めた。

「どうしました?」

「はあ……。」

「何で背負おうとしているの?」

「彼女を運ぶのなら一番楽ですから。」

「それに何かあっても陛下とティアレスさんがいますからなんとでもなると思ったので。」

「私たちが信用してくれたのはいいけど、正体不明の子を簡単に背負おうなんてことはしないように。」

「そういう場合は自分の目の届く範囲においておきなさい。今後はそう言ったことにも気を配るのよ。」

「わかりました。」

「ごういったところを見るとやはり若い武者者だと感じますね。」

「そうね。」

いくら強くても経験の少なさが普段では出てくるわね。」

「すみません。」

レイフォンは二人の言葉に反論できなかったため正直に誤った。

「経験は積み重ねていくしかないから仕方がないわ。」

気にしないように。

ただ、これからは色々な事を考えて行動することを習慣づけなさい。」

「はい。」

レイフォンは真剣な顔でアルシェイラに返事をした。

「じゃあ、早速運んで頂戴。」

レイフォンはアルシェイラにそう言われ少女を抱き上げた。

「でも彼女は武者者なのかな？」

近くで確認したレイフォンは疑問を無意識の内に口にしていた。

「それはどういふことレイフォン？」

「えー!!」

「僕は何か言いましたか？」

「言っていたわよねティアレス？」

「はい、言っていましたよ。」

「彼女は武芸者なのかな？」と

「で、何でそうレイフォンは思ったの？」

3人は孤児院へ向かいながら話を続けた。

「彼女には剋脈があるんですけど、経絡が閉じているようなんです。こんな状態を見たことがなかったのでつい。」

「そういうこと。」

「確かに不思議ね。」

「彼女に何かあったのでしょうか？」

「さあ、私たちにはわからないことだからね。」

「そういうことなら、彼女の身柄はレイフォンに預けておくわ。怪しい動きをしたらあんたの判断で処断してもいいわ。」

「陛下、それは……。」

ティアレスはアルシェイラの判断に反論しようとした。

「わかりました。」

レイフォンは迷うことなくアルシェイラに返事をした。

「ほんとに良いのレイフォン君。
何なら私が変わるけど。」

「いいえ、大丈夫です。」

それに、陛下は僕にその覚悟ができるかと判断したから命令をしたんですから、やり遂げます。

それにいずれは僕も処断をする日が来るんですからそれが早いかわいいかの違いですよ。」

「そう。」

わかったわ。

でもつらくなったら私に相談でも、弱音でも言いにくるのよ。

良いわね!!」

「ありがとうございます、ティアレスさん。」

母親みたいですね。」

レイフォンはそんなことをつい口にしてしまった。

「これでも2人の母親でさらにこれから新しい子供を生むんだから当然よ。」

「そうでしたね。」

「まあ、ティアレスは見た目はかなり若く見えるからレイフォンがそう感じても仕方ないわよ。」

「ありがとうございます陛下。」

ティアレスはアルシェイラに若く見えるといわれたため、礼を言った。

「そういうことだからレイフォン君も自分の母親だと思って甘えてくれても良いわよ。」

「考えておきます。」

「遠慮しなくて良いからね。」

「それならティアレスのレイフォンの呼び方から変えてみたら？」

アルシェイラが二人の話に入ってきてそう言った。

「呼び方ですか？」

「そうよ。」

だって自分の子供を君付けで呼ぶのはおかしいでしょ？だからよ。

それともティアレスはサヴァリスのことも君付けで呼んでるの？」

「いいえ。」

確かにサヴァリスのことは呼び捨てでしたね。

じゃあ、これからはレイフォンって呼ぶわね。」

ティアレスは笑顔でレイフォンにそう言った。

「ちょっと恥ずかしいですけどかまいませんよ。」

レイフォンは恥ずかしそうに顔を赤らめながらティアレスに返事

をした。

「レイフォンたらかわいいわね。」

アルシエイラがからかいながらそう言った。

その後、3人はたわいもない話をしながら孤児院へと歩いていった。

こうして気を失っているが少女のこれからの人生に大きな影響を与える人物との邂逅がなされた。

第22話 1人の少女との邂逅（後書き）

いかがだったでしょうか？

次回の話にて突如として現れた少女の正体が明らかになります。
また、それ以外にもいろいろなお話を取り入れたないようにしたい
と考えていますのでご期待ください。

それでは次回の更新までしばらく少女の詳しいことはお待ちください。
い。

読者の皆様へのご連絡

読者の皆さん私の書いた小説を読んでいただき誠にありがとうございます。
います。

今回の連絡の内容についてですが、
私の文章能力がないために読者の皆様が読みにくいと感じましたので一度小説を書き直すことを決めました。

その為、現在の小説のタイトルの前に旧と付けさせていただきます。
また、更新はこちらに掲載させていただこうと考えています。

書き直している小説が現在の小説に追いつきましたら、更新を新しい方に切替、こちらの小説は削除させていただきます。

作者の勝手なことで読者の皆様にご迷惑をかけてしまいますことを心よりお詫びいたします。

よろしければこれからもよろしく願いたします。

錆びた刀より。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1610q/>

旧天剣授受者レイフォン

2011年11月5日15時16分発行